續國譯漢文大成

文學部　六十六の下

309
65
帙入

始

續國譯漢文大成

文學部　第六十六册（第十七帙の下ノ二）

蘇東坡詩集　六の二

吉田彦郎氏

昭和六年

309
65

蘇東坡詩集　卷四十四

古今體詩　四十三首

次韻王鬱林

王鬱林に次韻す

晚途流落不堪言。
晚途流落、言ふに堪へず、

海上春泥手自翻。
海上の春泥、手自ら翻す。

漢使節空餘皓首。
漢使、節、空しくして皓首を餘し、

故侯瓜在有頹垣。
故侯、瓜在り、頹垣あり。

平生多難非天意。
平生多難、天意に非ず、

此去殘年盡主恩。
ここを去つて、殘年、盡く主恩。

誤辱使臣相拔拭。
誤つて、使臣を辱うして、相拔拭、

寧聞老鶴更乘軒。
むしろ聞かむや、老鶴更に軒に乘ずるを。

【字解】【一】漢使節空　蘇武、使して匈奴に居ること久しく、節旄盡く落ちしこと、前に玉盤盂の詩中に注して置いた。【二】故侯瓜　邵平の事、前に蔡州道上の詩中に注して置いた。【三】拔拭　二字、ともにぬぐふ。漢書朱博傳に「左馮翊となる、長陵の大姓尙方禁、少時、かつて人の妻を盜んで斫られ、創、その頰に著く、府功曹、その賂を受け、自して禁を除して守尉に調す。博、聞知し、他事を以て召し見、その面

を視るに、果して瘢あり。博、左右を辟け、禁に是れ何等の創と問ふや、禁、自ら情の得らるるを知り、叩頭して狀を伏す。博、笑つて曰く、大丈夫、もとより時に之あり、馮翊、柳の恥を雪ぎ、汲黯して禁を用ひむと欲す、能く自ら效すや不や、と。禁、且つ喜び且つ懼れ、對へて曰く、必ず死せむ、と。博、因つて之を親信す」とある。【三】老鶴更乘軒　左傳に「衛の懿公、鶴を好み、鶴に軒に乘ずるものあり」と見ゆ。

【題義】この詩は、鬱林太守王某が詩を寄せしに因り、次韻して酬いたのである。輿地廣記に「鬱林州は、古しへの蠻夷の地、秦、桂林郡を立つ、宋の開寶七年、黨牢二州を廢して鬱林に入る」とあり、九域志に「廣南西路、鬱林郡軍事、南流縣に治す、西南、廉州に至る二百里」とある。王某の名字は失考。

【詩意】予は、晩年流落して、その不運は、御話にも成らぬ位、海邊に於て、春泥を自分ではね上げたと同じである。たとへば、蘇武が漢の使となつて、久しく胡地に留まり、節旄いつしか落ち盡して、白髮頭を剩せしが如く、邵平が瓜を植ゑて、破れ垣が依然として殘つて居る樣なものである。平生、度度ひどい目に遇つたのは、何も天意ではなく、ここを去つて、無事に餘生を送ることが出來れば、卽ち天恩である。頃ろ、態態、使者を遣され、從來の罪過を拭ひ消し下されるとのことであるが、老鶴が寵を得て、車に乘せられた樣な主意は、決して承はらない。

【餘論】乾隆御批には「忠厚悱惻、大雅の遺音」とあり、紀昀は「五六、詩人の言」といつて居る。

藤州江上、夜起對月、贈邵道士

藤州江上、夜、起つて月に對し、邵道士に贈る

江月照我心。江水洗我肝。江月、わが心を照らし、江水、わが肝を洗ふ。
端如徑寸珠。墮此白玉盤。端に徑寸の珠の如く、この白玉盤を墮す。
我心本如此。月滿江不湍。わが心、本と此の如く、月、滿ちて、江、湍せず。
起舞者誰歟。莫作三人看。起つて舞ふものは誰か、三人の看を作す莫れ。
嶠南瘴癘地。有此江月寒。嶠南、瘴癘の地、この江月の寒きあり。
乃知天壤間。何人不清安。乃ち知る、天壤の間、何人か清安ならざらむ。
牀頭有白酒。盎若白露溥。牀頭に白酒あり、盎として、白露の溥たるが若し。
獨醉還獨醒。夜氣清漫漫。獨り醉ひ、還た獨り醒む、夜氣、清漫漫。
仍呼邵道士。把琴月下彈。仍つて、邵道士を呼び、琴を把つて月下に彈ず。
相將乘一葉。夜下蒼梧灘。相將ゐて一葉に乘じ、夜下る蒼梧灘。

【字解】【一】白玉盤　月を云ふ。【二】江不湍　湍は早瀨、江水が急流しない。【三】三人看　月と我と我が影とを併せて云ふ。

【四】嶺南　嶺南に同じ。【五】邵道士　後に逢二邵道士彦環陽二郁嶠一といふ詩があつて、即ち其人なるべく、そこで、名は彦環といふことが分かる。【六】相將　相率ゐ、相攜ふに同じ。【七】蒼梧潭　漢書地理志に「蒼梧は鬱の地、元封五年、十三州刺史を置く、交州部七郡、蒼梧は其一」とあり、名勝志に「藤江は、藤潭縣に在り。交趾を出でて昌州に至る、左右江、ここに至りて鬱江と合し、又東流し、番禺に至つて海に入る。蘇子瞻、舟を藤城の下に繫ぐといふは、即ち此處なり。鶏兒灘あり、蒼梧に在り、金環灘は峽内に在り」と見ゆ。

【題義】この詩は、藤州の江邊で、夜中に起きて月に對し、仍つて賦して邵道士に贈つたのである。

【詩意】江天の月は、わが心を照らし、江中の水は、我が肝を洗ひ、白玉盤と見まがふ月が江心に落ちると、まさしく、直徑一寸ほどある珠の如く見える。わが心は、すでに、この月の如く、月は、まん圓で、江水急流せず、まことに、好い景色。この間、起つて舞ふものは誰か、月と影とを併せて、三人に見える樣に、浮かれ出してはならぬ。嶺南は、名だたる瘴癘の地とはいひながら、江月は、寒げに見える。すると、天地の間、何人か清安ならざるべき。幸にして、牀頭には濁酒があつて、蚤然たることは、白露の溥として滿ち湛へて居るが如くである。それを獨り酌んで醉ひ、やがて又獨り醒めると、夜氣清く、漫漫として、はてもなく、ひいやりと身にしみる。そこで、邵道士を呼び醒ましし、琴を取り出して、月下に彈じた。これから、君と共に一葉の舟に乘じ、この良夜に蒼梧の急流を下らうと思ふ。

【餘論】乾隆御批に「舒元輿の序に曰く、一篇只だ形容擬議を辨ず、猶ほ是れ月下孤雄の伎倆、と。この詩、乃ち能く妙明の心を證出し、直に是れ天を照らし、地を照らす」とあり、紀昀は「清光明徹、復た筆墨の痕なし、これを神來の候となす」といつて居る。

徐元用使君、與其子端常、邀僕與小兒過、同游東山浮金堂、戲作此詩

徐元用使君、其子端常と、僕と小兒過とを邀へ、同じく東山の浮金堂に游ぶ。戲に此詩を作る

昔與徐使君、共賞錢塘春。　むかし、徐使君と、共に錢塘の春を賞す。
愛此小天竺、時來中聖人。　愛す、この小天竺、時に中聖人を來らしむ。
松如遷客老、酒似使君醇。　松は遷客の如く老い、酒は使君に似て醇なり。
繫舟藤城下、弄月鐔江濱。　舟を藤城の下に繫ぎ、月を鐔江の濱に弄す。
江月夜夜好、山雲朝朝新。　江月、夜夜好く、山雲、朝朝新なり。
使君有令子、眞是石麒麟。　使君、令子あり、眞に是れ石麒麟。
我子乃散材、有如木輪囷。　わが子、乃ち散材、木の輪囷たるが如きあり。

二老白接䍦。兩郎烏角巾。　二老は白接䍦、兩郎は烏角巾。
醉臥松下石。扶歸江上津。　醉うて松下の石に臥し、扶けられて江上の津に歸る。
浮橋半沒水。揭此碧鱗鱗。　浮橋、半ば水に沒し、この碧鱗鱗たるを揭す。

【字解】〔一〕徐使君　使君は縣令以上の尊稱、前に數ば見ゆ。〔三〕錢塘　卽ち西湖の所在宅。〔三〕小天竺　王註に「杭州の佛寺に上下兩天竺あり、おもふに、今、浮金堂の景、稍や之に似たり、故に小の稱あるなり」とある。〔四〕中聖人　前に贈三孫莘老二七絕の詩中に注して置いた。然るべき高僧。〔五〕鏡江　王註に「藤州の縣、名づけて鏡津といふ」とある。〔六〕石鱗鱗　前に贈辨才師二の詩中に注して置いた。〔七〕散材　役に立たぬ材木、前に子由初到陳州の詩中に注して置いた。〔八〕輪囷　節くれ立つ。〔九〕浮橋　舟橋。〔一〇〕揭此　揭は、衣裳を捲くり上げる。

【題義】徐元用の名は疇であらうといふこと。この人は、元祐六年、右通直郎新差權知連州たりしことが、通鑑長編に見えて居る。はじめ、杭州に於て、東坡と相知り、後に親を養ふこと畢りし後は、復た越に官して居たのであらう。その徐元用が、子息端常と共に、東坡と末子過とを迎へて、同じく東山なる浮金堂に游びしに因り、東坡は、戲に此詩を作つたといふのである。

【詩意】むかし、徐使君と共に、錢塘の春を賞覽したことがあるが、ここ浮金堂は、宛然たる小天竺、時たま、然るべき高僧が來て、留まつて居られる。境内の松は、遷客たる予の如く老い、酒は、使君に似て清醇である。予は、舟を藤城の下に繫ぎ、夜は月を鏡江の濱に弄したが、江月、夜夜宜しく、山雲は朝朝新にして、まことに面白い景色。使君には、子息があつて、眞に天上の石麒麟に比すべく、愚息の如きは、役に立たぬ謂はゆる散材で、木の節くれ立つて居る樣である。使君と予とは、白い頭巾を戴き、二人の若い者は、黑い角巾を被り、醉うては松下の石に臥し、扶けられて江上の渡し場に歸つて來た。すると、舟橋が半ば水中に沒して居たから、止むを得ず、衣を捲くり上げて、碧鱗鱗たる處を徒涉した。

【餘論】紀昀は「平直にして興象少し」といつて居るが、いかにも、その通りで、材料の選擇排列が甚だ粗率である。

送鮮于都曹歸蜀灌口舊居

鮮于都曹の蜀の灌口の舊居に歸るを送る

籥盡霜須照碧銅。　霜須を籥き盡して、碧銅を照らす、
依然春雪在長松。　依然、春雪、長松に在り。
朝行犀浦催收芋。　朝に犀浦を行いて、芋を收むるを催し、
夜渡繩橋看伏龍。　夜、繩橋を渡つて、伏龍を看る。
莫嘆倦游無駟馬。　嘆ずる莫れ、倦游、駟馬なきを、

【字解】〔一〕籥盡　王註に「籥は讀んで歸の如し」とある、卽ち拔き取ること。〔二〕碧銅　鏡を云ふ。〔三〕犀浦　元和郡縣志に「犀浦は元と成都縣の界。乘供中、犀浦縣を置く、李冰遺るところの石犀に因つて名づく」とある。〔四〕繩橋　釣り

要將老健敵千鍾。老健を將て、千鍾に敵するを要す。
子雲三世惟身在。子雲三世、惟だ身あり、
爲向西南說病容。爲に西南に向つて、病容を說く。

に挂く。大風、これを過ぐれば、漁人の網を晒し、染家の彩布を晾らすの狀の如し。又須らく輿を捨てて疾步すべし、稍や從容たれば、震掉して行くべからず」とある。【五】伏龍　觀の名、范石湖、離堆の詩の序に「沿江の兩岸中斷、李冰、これを鑿つて、以て江水を分つ、上に伏龍觀あり、これ冰が孽龍を鎭ぜし處」とある。【六】駟馬　馬車を引かす四頭立の馬。【七】千鍾　俸祿の多きを云ふ。【八】子雲　漢書揚雄傳に「字は子雲、蜀郡成都の人なり、成哀平の三世を歷て、官を徙さず」とある。

【題義】鮮于都曹は名字失考。成都古今記に「秦の昭王、李冰を以て蜀守に代らしむ、離堆を鑿ちて洙水の害を辟け、二江を成都中に穿つ、ここに於て、沃野千里、號して陸海となす、民、その惠を思ひ、廟を立つて灌口山に在りし」と見ゆ。この詩は、都曹たる鮮于某が蜀なる灌口の舊居に歸らむとするを送つて作つたのである。

【詩意】霜の色せる鬢を拔き去つて、鏡に對し、どうやら、若若しく成つた積りで居ても、白髮は、依然として、春の雪が丈高い松にかかつて居る樣である。かくの如く老いたる君が、故鄕に歸りし後は、朝に犀浦を巡つて、早く芋を取り入れろといつて、小作人に催促し、夜は、釣り橋を渡つて、李冰が鎖したといふ龍を看て居る。すでに、宦游に倦んで、格別出世もせず、四頭立の馬車に乘る身分に成り得ざりしことを歎ずるに及ばず、唯だ老いての後の壯健は、千鍾の俸祿にも匹敵する。君は、彼の揚子雲が、三代の間、惟だ其身を餘して、すこしも官を徙さざりしと同じである。さればこそ、西南に向つて、病後の容態は如何と御尋ねする次第である。

橋、王註に「灌口に在り、繩を引いて之を架す、故に繩橋といふ」とあり、吳船錄に「橋の廣さ十二丈、繩の長さ百二十丈、上に竹笆を布き、數木ごとに一架を以てし、橋を半空

書堂嶼

蒼山古木書堂嶼。　蒼山古木、書堂嶼、
北出湘水百餘步。　北、湘水を出づる百餘步。
誰爲往來虧世界。　誰か往來の爲に世界を虧き、
至今人指安禪處。　今に至つて人は指す安禪の處。
豈無驚蛇與飛鳥。　豈に驚蛇と飛鳥となからむや、
後來那復知其趣。　後來、那ぞ復た其趣を知らむ。
不知我身今是否。　知らず、わが身、今是なりや否やを、
空記名稱在常住。　空しく名稱を記して常住に在り。

【題義】査註に「舊志を案ずるに、書堂嶼に三あり、一は梧州に在り、一は韶州曲江縣に在り、一は

【字解】【一】安禪　山公註に「禪典、初禪は五法を修し、四禪は八災患を離る、不動地と名づく、これを安禪となす」とある。【二】常住　楞嚴經に「了然自ら知り、本妙心を得、常住不滅」とある。

仁化縣に在り、未だ孰れか是なるを詳にせず。水經を考ふるに、湘水は、零陵始安縣より出づ、註に云ふ、湘灕同源、分れて二水となり、南を灕水となし、北は湘川と。今詩に云ふ、北出二湘水一百餘歩と、當に是れ梧州の書堂嶼なるべし」とある。

【詩意】書堂嶼は、蒼然たる山で、古木之に被り、湘水の北百餘歩の處に當つて居る。ここに往來する爲に、誰が世界を打ち虧いで、路を開いたのであるか、今日に至るも、人は遙に之を指して、安禪の處だといつて居る。ここには、鼉蛇と飛鳥とが居ない譯でもないが、後來、かかる趣を知るものはない。わが身は、今果して是なりや否やを知らざれども、ここに、空しく書堂嶼てふ名稱を記して、此詩を作り、常住の緣を結んだのである。

【餘論】紀昀は「輕率」といつて、例の如くけなして居る。

送邵道士彥肅還都嶠　邵道士彥肅の都嶠に還るを送る

乞得紛紛擾擾身。乞ひ得たり紛紛擾擾の身、
結茅都嶠與仙鄰。茅を都嶠に結んで、仙と鄰る。
少而寡欲顏常好。少にして欲寡く、顏、常に好く、
老不求名語益眞。老いて名を求めず、語、益す眞なり。
許邁有妻還學道。許邁、妻あり、還た道を學び、
陶潛無酒亦從人。陶潛、酒なく、亦た人に從ふ、
相隨十日還歸去。相隨ふ、十日、還た歸り去る、
萬劫清游結此因。萬劫清游、この因を結ぶ。

【字解】【一】乞得　暇を貰ふ。
【二】紛紛擾擾身　此世に在る身體。
【三】都嶠　題義の項に注して置く。
【四】許邁　晉書の本傳に「字は遠游、父母尚に存す、茅嶺の洞室に往來す。父母すでに終る、乃ち婦孫氏を遣して家に歸らしめ、遂に其同志五人を率へて幅れく名山に游ぶ」とある。
【五】陶潛　晉書の本傳に「羊松齡・龐遵等、或は酒あつて之を要す、ともに酒の座に至り、主人を設らかすと雖も、亦た欣然として忤ふなく、醉醉すれば卽ち返る」とある。
【六】萬劫　劫は世界の破滅をいふので、永久といふ意。

【題義】邵道士は、前にも見えて居た。都嶠は山洞の名、洞天福地記に「第二十都嶠山洞、周回一百八十里、寶元の天と名づく、容州に在り」と記し、司馬子微、天地宮府圖の序に「都嶠山洞は、容州普寧縣に在り、仙人劉根、これを治む」とあり、名勝志に「都嶠山は梧州容縣の南に在り、山に八峰あり、南北二洞あり、南洞は寬廣平坦、北洞は差や狹し、星壇を爲るもの八、中峰の絕頂に中宮院あり」と見ゆ。この詩は、道士邵彥肅の都嶠山洞に歸るを送つたのである。

【詩意】この紛紛擾擾たる身を乞ひ受けて、暇を貰ひ、全く此世を脫離すれば、茅屋を都嶠の山洞に結んで、仙人と鄰り合ふことであらう。君は、少にして慾望少きが故に、何等の煩悶なく、從つて、顏の色が常に澤澤しくて宜しいし、老いても、虛名を求めず、あくまで眞面目である處から、その言葉

は、すべて眞實である。君は、許邁の如く、細君までが仙道を學び、又陶淵明の如く、酒が無くても、人に從つて決して怍ふことはない。ここに相隨ふこと十日にして、君は歸り去らむとし、愈よ御別となつたが、永久に亡びざる清游の因緣を結んだのは、予に取つて、まことに喜ばしいことである。

【餘論】篇中、還の字が近接して複出して居るのは、一寸目障りである。

書韓幹二馬

韓幹の二馬に書す

赤髯碧眼老鮮卑。　赤髯碧眼、老鮮卑、
回策如榮獨善騎。　策を回すこと榮るが如く、獨り善く騎す。
赭白紫騮俱絶世。　赭白紫騮、ともに絶世、
馬中湛岳有妍姿。　馬中の湛岳、妍姿あり。

【字解】【一】老鮮卑　後漢書鮮卑傳に「東胡の支なり、別に鮮卑山に依る、故に因つて號とす」とある。【二】回策　晉書に「王濕、その兄の子濟を馬に乘ぜしむ、姿容すでに妙、策を顧らすこと、榮るが如く、善く騎するもの、以て之に過ぐるなし」とある。【三】赭白紫騮　ともに馬の名、文選顏延年、赭白馬賦に乘輿赭白とあり、李白、紫騮馬の詩に、紫騮行且嘶、雙鬟碧玉蹄とある。【四】湛岳　夏侯湛と潘岳、ともに姿容に美なるを以て有名であつた。

【題義】韓幹は、唐の玄宗の時の人で、畫馬に工なるを以て世に知られて居た。この詩は、二頭の馬を畫いた韓幹の圖に題したのである。

【詩意】赤い髯に碧い目をして居る鮮卑の老夷が馬に跨り、鞭を揮り廻はすこと、さながら廻るが如く、その騎馬に巧なることは、他に比類なき位。そして一は赭白、一は紫騮、ともに世にすぐれ、その姿の妍麗なるは、馬中の夏侯湛・潘岳とも稱すべきものである。

觀大水望朝陽巖作

大水を觀、朝陽巖を望みて作る

朝陽巖前不結廬。　朝陽巖前、廬を結ばず、
下眺江水百步餘。　下に江水を眺む、百步餘。
春泉濺濺出乳竇。　春泉濺濺、乳竇を出で、
青沙白石半洿涂。　青沙白石、半ば洿涂。
不到津頭二三日。　津頭に到らざる二三日、
誰知江水漲天墟。　誰か知らむ、江水の天墟に漲るを。
遙望橫盃不敢濟。　遙に望み、盃を橫へて、敢て濟らず、
巖口正有人罾魚。　巖口、正に人の魚を罾するあり。

【字解】【一】乳竇　鍾乳の滴れる穴。【二】洿涂　涂は塗、汚れたる路。【三】天墟　列子に「無底の谷、名づけて歸墟といふ」とある。天然の深壑。【四】橫盃　馮應檜の案に「盃渡の意を用ふるに似たり、再考」とある。杯渡の事は、高僧傳に見え「その名姓を知らず」とあるが、常套の典故で、杜甫にも杯渡不驚鷗の句がある。

【題義】元結の游二朝陽巖一記に「零陵に至り、その郭中、水石の異あるを愛し、舟を泊して之を尋ね、巖と洞とを得たり、その東に向ふを以て、遂に以て之に名づく」とあり、柳宗元の記に「朝陽巖より東南に水行して、蒸江に至る、取るべきもの三、袁家渦に如くなし」とあり、詩話總龜に「朝陽巖は、永州城南一里餘に在り、下、瀟水に臨む。元結、名を取り、自ら歌を爲つて云ふ、朝陽巖下瀟水深、朝陽洞中寒泉清、零陵城郭夾二瀟水一、巖洞幽奇當二郡城一」とあり、施昱の游記に「永州の西門を出でて、舟行二里、百歩に及ばずして山頂に至る。上下二巖あり。上巖は石厂聳植、石側の一亭を觀瀾といふ、ここを過ぎ、再び石磴數十級を歴、乃ち下巖に至る、大江汩汩、その前に循ふ」とある。この首は、大洪水の時、朝陽巖を望んで作つたのである。しかし、査愼行の案に「紀年錄、先生、庚辰八月末に於て廉州に至り、木栰を作つて水を下り、容藤を歴て梧に至る。この歳、復た永州に移るの命あり、先生の謝表亦た云ふ、先自二昌化貶所一移二廉州一、又自二廉州一移二舒州節度副使一、永州居住、行至二英州一、復二朝奉郎提舉成都玉局觀一云云、と。先生、永州に移るの命、當に本年八月以後に在るべし。その曾て永州に至ると否と、本集及び紀年錄、皆考ふべきなし。據るべきものは、止だ此詩あるのみ。而して、施氏原本、又載せず、外集杭州卷中に載するも、據るところを知らず」とあり、馮應榴の案に「先生の李之儀に與ふる書に、某移二永州一、過二五羊一、度二大庾一、至レ吉出レ陸、由二長沙一至レ永、荷叔靜擊レ舟、相送數十里、大浪中作二此書一云云とありと雖も、但し是れ藤梧、はじめて櫂を發する時に寄するところの書、預め永に赴くの途、かくの如きを經るを言ふ。英州に至るに及びて、又玉局の命を聞き、卽ち庾嶺より、扁舟、直に下る、實は未だ永に至らず、且つ詩に春泉の字あり、時候亦た合はず、この詩、必ず先生の作に非ざるなり」とあつて、成程と頷かしめる。

【詩意】朝陽巖前に廬を結ばず、偶ま此に來て、下に江水を眺めると、わづかに百餘歩を隔つるのみ。春の泉は、濺濺として、鍾乳の滴れる巖洞を出で、その邊一帶、青沙白石、半ば綠げに泥を帶びて居る。二三日、舟つきの處に往つて見なかつたが、誰か知るべき、江水は、天然の歸墟に漲つて居る。そこで、それを遙望し、盃を浮べて渡らうともせず、悵然佇立して居ると、折から、巖口には、魚を網する人が居つた。

【餘論】紀昀は「杜呉の體に效ふ、未だ高老となさず、呉體拗折、渾然天成に非ざれば不可」といつて居る。

將至廣州、用過韻、寄邁迨二子

將に廣州に至らむとし、過の韻を用ひて、邁・迨二子に寄す

皇天遣二出レ家。臨二老乃學一道。　皇天、家を出でしめ、老に臨んで、乃ち道を學ぶ。
北歸爲二兒子一。破二戒堪一一笑。　北歸、兒子の爲めなり、戒を破つて一笑に堪へたり。

披雲見天眼。回首失海潦。
蠻唱與黎歌。餘音猶杳杳。
大兒收衆穉。四歳守孤嶠。
次子病學醫。三折乃粗曉。
小兒耕且養。得暇爲書繞。
我亦困詩酒。去道愈茫渺。
紛紛何時定。所至皆可老。
莫爲柳儀曹。詩書教蠻獠。
亦莫事登陟。谿山有何好。
安居與我游。閉戸淨洒掃。

【字解】【一】出家　ここでは、家族と分れたといふ義。【二】天眼　雲の破れて青天の見えることをいふ。【三】海潦　如き海。【四】孤嶠　嶠は山。これは、惠州の白鶴峰を指すのであらう。【五】三折　左傳に「晉の范中行氏、齊に公を伐たむとす。齊の高張曰く、三たび肱を折つて良醫たるを知る、唯だ君を伐つを不可となす」とある。【六】耕且養　漢書藝文志に「古しへの學者は、耕し且つ養ひ、三年にして一藝に通ず」とあり、揚子注言に「古しへの學者は、耕し且つ養ふ」とある。【七】柳儀曹　王註に「殿林、魏に儀曹郎あり、唐、改めて禮部といふ」とある。唐書柳宗元傳に「貞元中、禮部員外郎となり、永州司馬に貶せられ、元和中、柳州刺史に徙る」とあるが、劉禹錫の集などでは、毎毎、柳儀曹と稱して居る。

【題義】この詩は、將に廣州に到著せむとする時、末子過の詩韻を用ひて、邁・迨の二子に寄せたもので、この時、長子邁は、家屬と共に、惠州なる例の白鶴峰下の新居を守り、次子迨は、常州に居た。過の斜川集に將至五羊、先寄伯達・仲豫二兄と題する詩があつて、卽ちこの韻を用ひた原作である。

【詩意】皇天は、予をして、家族と離れ、老に臨んで道を學ばしめた。今北に歸るのは、全く倅ともの爲めであつて、喜びの餘り、道家の戒律を破るは、まことに一笑すべきことである。雲を披いては、青天の眼の如きを仰ぎ、首を回らせば、行潦の樣な海水は最早見えなくなり、蠻奴竝に黎人の歌唱のみは、杳杳として、なほ耳に殘つて居る。長男は、多勢の穉子を引き具して、四年の久しき、白鶴峰下の新居を守り、次男は、病勝である爲に、醫術を學び、三たび、肱を折る樣に、散散困んだ揚句に、やつと、その大略に通曉する樣になり、末子は、自ら耕しつつ養ひ、暇さへあれば、讀書に忙しい。われも亦た詩酒に累せられて、道を去ること愈よ遠く、紛紛たる心中の愁は、何時鎭定するか分からぬが、到る處、どこでも、わが老を送ることは出來る。かの柳宗元の眞似をして、蠻獠の民に詩書を敎へもせず、さうかといつて、山丘に登りもせず、谿山は何の好き處があらうかといつて、多寡を括つて居

る。汝等と一緒に成つたならば、安居して、われと游ぶを旨とすべく、戸を閉ぢて、奇麗さッぱりと、ふき掃除をして呉れれば善いので、この外、格別に望むところはない。

【餘論】紀昀は「刻意擺脱、直にして剽ならず」といつて居る。

贈鄭清叟秀才

風濤戰扶胥。海賊横泥子。
胡爲犯二怖。博此一笑喜。
問君奚所欲。欲談仁義耳。
我才不逮人。所有聊足已。
安能相付與。過聽君誤矣。
霜風掃瘴毒。冬日稍清美。
年來萬事足。所欠惟一死。
澹然兩無求。滑淨空棐几。

鄭清叟秀才に贈る

風濤、扶胥に戰ひ、海賊、泥子に横はる。
胡すれぞ、二怖を犯し、この一笑の喜びを博せる。
君に問ふ、奚の欲するところ、仁義を談せむと欲するのみ。
わが才、人に逮ばず、有るところ、聊か足らむのみ。
安んぞ能く相付與せむ、過聽、君誤れり。
霜風、瘴毒を掃ひ、冬日、稍や清美。
年來、萬事足れり、欠くところは惟だ一死。
澹然として、兩つながら求むるなく、滑淨、空しく棐几。

【字解】【一】扶胥　廣州志に「扶胥鎮は、州城の南に在り」とある。【二】泥子　王註に「扶胥泥子皆經海の處なり」とあり、査註に「泥子は未詳」とある。【三】二怖　以上二つの危險。【四】過聽　あやまつて聽く。【五】棐几　榧の木で造つた几。

【題義】説明に及ばぬ、但し、鄭清叟は失考。

【詩意】扶胥鎮の外には風濤相戰ひ、泥子の邊では海賊が横行して居る。どうして二つの危險を犯して、この一笑の喜に換へ得たのであるか。君に問うて、何を欲するかといへば、仁義を談じたいといはれる。わが才、もとより人に及ばざれども、現に所有するものは、聊か十分である積り、しかし、これを互に附與することは出來ないので、實際以上に聞いて居るのは、君の誤りで、予は、そんな偉いものではない。今しも、霜を帶びたる寒風は、瘴熱の毒を掃ひ、冬の日色は、聊か清美である。年來、萬事を以て足れりとして居て、唯だ一死を缺くばかり。君と予と、すでに澹然として求むるところなく、唯だ棐几だけは、滑に磨き込んである。

【餘論】紀昀は「微に剽意あり、然れども、語、頓宕あり、尚ほ甚だ滑ならず」といひ「年來の二句、宋人の詩話、亦た之を議す。然れども、東坡、特に自ら萬念皆空しく、故に語言文字を立てざるの意を言ふ、怨尤するところあるに非ず、論者、未だ上下の文義を見ざるのみ」といつて居る。

和孫叔靜兄弟李端叔唱和

孫叔靜兄弟・李端叔の唱和に和す

病骨瘦欲折。霜髯(一)漸更疏。　病骨、瘦せて折れむと欲す、霜髯、漸けて更に疏なり。
喜聞新國政。兼得故人書。　喜んで新國政を聞く、兼ねて故人の書を得たり。
秉燭眞如夢。傾杯不敢餘。　燭を秉つて眞に夢の如く、杯を傾けて敢て餘さず。
天涯老兄弟。懷抱幾時攄。　天涯の老兄弟、懷抱、幾時か攄べむ。

【字解】【一】髯　毛を拔く、前に送二鮮于都曹一の詩中に注して置いた。

【題義】施註に「孫叔靜、名は碧、錢塘の人、江都に徙る。年十五にして太學に游ぶ、老蘇先生、亟ばば之を稱す。哲宗、提舉廣東常平に擢んづ。東坡、惠州に居り、極意ともに周旋す。二子、晁无咎・黃魯直の女を娶る。黨事起る、家人これを危む、叔靜、一も顧みるなし。平生行義に篤し、君子人なり。仕へて太僕卿殿中少監となり、顯謨閣待制知曹州單州を以て、靖康二年卒す。年八十六」とあり、馮應榴の案に「その兄弟の名字事蹟、ともに失考」とある。李端叔は、前に數ば見えて居た。この詩は、孫叔靜の兄弟と李端叔と唱和せし詩韻に次したのである。但し、紀昀は「題に脫誤の處あらむ」といつて居る。

【詩意】予は衰老の身、病骨瘦せて將に折れむとし、白髯を拔くと、一層疎になつた。ここに、國政の革新されたことを聞いて喜び、おまけに、舊友の手書に接した。行樂の爲に、燭を秉れば、まことに夢の心地、杯を傾けて、すこしも酒を餘さない。君等兄弟は、天涯はるかに隔つて居るから、何時再び逢つて懷抱を陳べることが出來やうか。

【餘論】紀昀は「渾老情あり、空調に同じからず」といつて居る。

廣倅蕭大夫、借前韻見贈、復和答之二首

廣倅蕭大夫、前韻を借りて贈らる、復た之に和答す　二首

生還粗勝虞(一)。早退不如疏(二)。　生還、粗ぼ虞に勝れり、早退、疏に若かず。
垂死初聞道。平生誤信書。　死に垂んとして初めて道を聞く、平生、誤つて書を信ず。
風濤驚夜半。疾病送災餘。　風濤、夜半に驚き、疾病、災餘を送る。
賴有蕭夫子。憂懷得少攄。　賴に蕭夫子あり、憂懷、少しく攄ぶるを得たり。

【字解】【一】勝虞　虞は虞翻、前に庚辰歲人日の詩中に注して置いた。查註に「案ずるに、先生、遠謫と雖も、猶ほ生還を得たり、故に虞に勝れりといふなり」とある。【二】如疏　疏は疏廣・疏受、卽ち二疏。漢書疏廣傳に「兄の子受と竝に太子の師傅となり、位に在ること五歲。廣、受に謂つて曰く、われ聞く、足るを知れば辱められず、止まるを知れば殆からず。今、官成り、名立つこと、か

くの如し、去らざれば、悉らくは、後悔あらむ。豈に如かむや、父子相携ひ、關を出でて故郷に歸老し、壽命を以て終らむには、亦た善からずや。受、叩頭して曰く、大人の教に從はむ、と。卽日、ともに病を移して骸骨を乞ふ、上、皆これを許す」とある。

【題意】　查註は「龍泉舊志、蕭世範、字は器之、嘉祐癸卯の進士、虔州廣州に通判たり、廣西轉運判官に遷る。その廣州に在る、蘇文忠公、これと游ぶ、廣倅蕭大夫に酬ゆるの詩あり」と見ゆ。この詩は、廣州の通判たる蕭世範が前に掲げた詩の韻を用ひて一詩を贈られたから、復た之に和答したといふのである。

【詩意】　予は遷謫されしものから、幸に生きて還つたことだけは、虞翻に勝つて居るが、早く身を退くることに就いては、二疏に及ばなかつた。死に垂んとして、初めて大道を聞き、平生、誤つて書物を信じて居たのは、まことに宜しくない事であつた。今や廣州に逗留し、夜半、風濤の物すごきに驚き、災禍を送りし後、又しても病氣で、散散な憂き目に遇つた。しかし、幸にも、蕭君が詩を贈られたりするに因つて、少しく憂懷を攄べることが出來た。

【餘論】　乾隆御批に「軾の詩、好んで古人の姓を用ひて韻を壓す、前人これを譏るものあり。この詩の起句の若き、亦た是れ、習氣未だ除かず。しかも、格韻は晩節よりも高明なり」とあり、紀昀は「これ便ち淺率」といつて居るが、垂死の一聯だけは、一寸面白い。

心閒詩自放。筆老語翻疏。
贈我皆强韻。知君得異書。
滔滔沮叟是。綽綽孟生餘。
一笑滄溟側。應無憤可攄。

【字解】　【一】詩自放　放は放縱、放逸。【二】語翻疏　疏は疎雜、粗率。【三】强韻　むづかしい韻。【四】異書　珍書、抱朴子に「時人、蔡邕の異書を得たるを疑ひ、その帳中を搜れば、果して王充作るところの論衡を得たり」とある。【五】滔滔沮叟　論語に長沮桀溺の語を載せて「滔滔たるもの、天下皆是れなり」とあるを翻用す。【六】綽綽孟生　孟子に「我に官守なく、我に言責なきなり、すなはち、吾が進退、豈に綽綽然として餘裕あらざらむや」とある。

【詩意】　心閒なるままに、詩は自然奔放であるし、筆が老熟すると、語は却つて粗率である。君が予に贈られた詩は、いづれも、むづかしい韻であつて、何か珍書を得られたからであらう。天下滔滔として、世事と相關せざるは、長沮・桀溺の如く、綽綽として餘裕あるは、孟子にして、はじめて能くすべきものである。予は、一笑して、滄溟の側に居るが、すでに、人事を拋棄して仕舞つたから、攄ぶべき忿憤の念慮だにない。

周教授索枸杞、因以詩贈、錄呈廣倅蕭大夫

周教授、枸杞を索む、因つて詩を以て贈り、錄して廣倅蕭大夫に呈す

鄴侯藏書手不觸。
嗟我嗜書終日讀。
短檠照字細如毛。
怪底昏花懸兩目。
扶衰賴有王母杖。
名字於今掛仙錄。
荒城古塹草露寒。
碧葉叢低紅菽粟。
春根夏苗秋著子。
盡付天隨恥充腹。
蘭傷桂折緣有用。
爾獨何損丹其族。
贈君愼勿比薏苡。
采之終日不盈匊。
外澤中乾非爾儔。
斂藏更借秋陽曝。
雞壅桔梗一稱帝。
堇也雖尊等臣僕。
時復論功不汝遺。
異時謹事東籬菊。

鄴侯の藏書、手も觸れず、
嗟す、我が書を嗜んで終日讀むを。
短檠、字を照らして、細、毛の如く、
怪底、昏花、兩目に懸る。
衰を扶くる、賴に王母杖あり、
名字、今に仙錄に掛く。
荒城古塹、草露寒く、
碧葉叢は低る紅菽粟。
春は根、夏は苗、秋、子を著く、
盡く天隨に付して腹を充たすを恥ず。
蘭傷桂折、用あるに緣る、
爾獨り何ぞ損じて、その族を丹にする。
君に贈る、愼んで、薏苡に比する勿れ、
これを采つて、終日、匊に盈たず。
外は澤、中は乾いて、爾の儔に非ず、
斂藏、更に秋陽を借りて曝らす。
雞壅桔梗、一に帝と稱す、
堇や、尊と雖も、臣僕に等し。
時に復た功を論じて汝を遺さず、
異時、謹んで事へよ東籬の菊。

【字解】【一】鄴侯　唐の李泌、前に書軒の詩中に注して置いた。【二】短檠　丈高からぬ燭臺。【三】王母杖　枸杞の別名、抱朴子に見え、前に黃子木拄杖の詩中に注して置いた。【四】紅菽粟　赤い小さい實を指して、豆や粟の粒に比したのであらう。【五】春根　本草に、枸杞は冬に根を采り、春夏に葉を采り、秋に熟實を取る」とある。【六】天隨　唐書に「陸龜蒙、字は魯望、松江の甫里に居り、時に江湖散人と謂ひ、或は天隨子と號す。居るところの前後、皆杞菊を種ゑ、以て杯案に供す」とある。【七】丹其族　一族を滅する。【八】薏苡　すすだま、馬援が交趾を征せし時、これを車に載せて歸り、その爲に嫌疑を招いたことがあつて、前に次韻王鞏の詩中に注して置いた。【九】不盈匊　兩手に一ぱいにならぬ。【一〇】雞壅　本草に「芡、一名雞壅」とある、水ぶき、或は鬼はすといふ。【一一】桔梗　陶弘景の別錄に「桔梗、梗草と名づく、葉は薺苨と相似たり」とある。【一二】一稱帝　莊子に「乘や　その實は堇なり、桔梗なり、雞壅なり、豕零なり、これ時に帝たるものなり、何ぞ勝げて言へべけむや」とある。帝たりとは、その貴きをいふ。【一三】堇也　本草に「堇は毒草なり、乃ち烏頭の苗」とある。

【題義】周教授の名は不詳。この詩は、周教授から、枸杞が欲しいといつて來たに就いて、詩を以て之に贈り、錄して、廣州通判の蕭世範にも見せたといふのである。

【詩意】名だたる李鄴侯の藏書は、不幸にして、まだ手を觸れぬが、われも亦た書を嗜んで、終日、讀誦に耽つて居る。夜、低い燭臺の下に居ると、文字は、小さくして毛の如く、不思議にも、兩方の目

が霞んで來る。これは、老衰した證據であつて、これを直すには、王母杖の異名ある枸杞に限り、現に、その名字は、仙人の記錄に揭げられてある。枸杞は、荒れた城の空濠の中などに生じ、晨に露を帶びて寒く、碧色の葉が低く茂つて居つて、その間に、豆や粟の如き小さな粒の赤い實が見える。春は根、夏は若芽を摘み、秋は實を結び、陸龜蒙は、平生、これを食して、腹を充たして居た。かの蘭や桂樹の傷折せらるるは、妙なる其香が用を爲すからであるが、汝、枸杞は何の爲に損じて、一族全滅の禍に遭ふのであるか。今、御依賴に因つて、これを君に贈るが、かの慧苡に比してはならぬ。慧苡は、終日摘んでも、兩手に滿たず、その上、外は澤澤しく、中は乾いて、氣を受くること全からざれば、到底、枸杞の類ではなく、これを收藏するには、よく秋の日に曝らさねばならぬので、なかなか、手數がかかる。かの雞壅の如き、桔梗の如き、皆藥中の帝王と稱せられ、烏頭も亦た尊いけれども、汝に比べると、臣僕に等しいものである。もし效果の顯然たることを論ずれば、決して、汝を遺さざるべく、そして、他日、秋の末になれば、誰んで、一歩を東籬の菊に讓つて、これに臣とし事へるが善い。

【餘論】紀昀は「結、感慨を寓す」といつて居て、卽ち功に矜らず、その分に安んずべきことを勸めたものであらう。

跋王進叔所藏畫

王進叔、藏するところの畫に跋す

徐熙杏花

徐熙の杏花

江左風流王謝家。　江左の風流、王謝の家、
盡攜書畫到天涯。　盡く書畫を攜へて天涯に到る。
却因梅雨丹青暗。　却つて、梅雨、丹青の暗きに因り、
洗出徐熙落墨花。　洗ひ出す徐熙落墨の花。

【字解】〔一〕王謝　東晉の王導謝安の後で、當時の名族。なほ、前に宿二九仙山一の詩中に注して置いた。〔二〕梅雨　王註に「廣南に黃梅雨あり、最も書畫を損ず」とある。〔三〕徐熙落墨　徐熙は五代より宋初に居た有名な畫家。落墨は、主として墨を用ひ、あまり彩色を用ひざる畫をいふ。圖畫見聞志に「徐熙は、意、古今に出づ、徐鉉曰く、落墨を格となし、彩繪の跡を雜ふ、色と相應映せざるなり」とあり、宣和畫院に遺らる。黃の妙は傳色に在り、用筆極めて細、殆んど墨蹟を見ず。熙は、墨筆を以て之を畫き、略ぼ丹粉を施し、別に生動の意あり。筌、その己に勝るを惡み、言ふ、熙の畫、粗惡、格に入らずと。これを毀む。熙の子、乃ち諸黃の格に效ひ、更に墨筆を用ひず。圖繪寶鑑、今の花を畫くもの、往往色を以て、曾淡して成す、ひとり、徐熙の落墨、以てその枝葉蕊萼を寫し、然る後、色を傳す、故に骨氣風神、古今の絕筆たり」とある。

【題義】本集の跋二峽中詩後一に「庚辰の歲、南海を過ぎ、部刺史王公進叔を見る」とあるから、進叔は、當時、嶺南の監司であつたに相違ないが、その名字閥歷等は不詳。この詩は、王進叔所藏の畫に題したのである。

【詩意】王謝といへば、六朝の頃、江南に鳴つた風流の名族、君も其後裔である處から、天涯の僻境に赴任するにも、態態、書畫を攜帶された。しかし、梅雨の頃は、丹青の彩色を剝損する虞があるといふので、落墨で畫いた徐熙の杏花の一幅のみを懸けて置かれる。

【餘論】紀昀は「五首、各〻寄託あり、風調、復た乏しからず。惟だ山茶の一絕、怨んで太だ怒る」といひ、この第一首に就いては「この首、自ら寓す」といつて居る。

趙昌四季

趙昌の四季

倚竹佳人翠袖長。
天寒猶著薄羅裳。
揚州近日紅千葉。
自是風流時世妝。芍藥

竹に倚るの佳人、翠袖長し、
天寒、猶ほ著く薄羅の裳。
揚州近日、紅千葉、
自ら是れ風流の時世妝。

馮應榴の案に「余の見るところ、末句なし。惟だ、名勝志に云ふ、芍藥凡そ三十二品、首御衣黃といふものあり、首御愛紅といふものあり」とある。千葉紅は、紅色で瓣の多いのを云ふのであらう。【三】時世妝　流行の風俗。白居易の新樂府に、時世妝、時世妝、自出城中傳四方」とある。

【題義】圖畫見聞志に「趙昌、工に花菓を畫き、名、獨秀を推す、伎、亦た僧にし難し」とある。この詩は、趙昌の筆に成れる四季の代表的花卉の畫幅に題したので、第一首は芍藥を詠じ、詩の末に自ら注して居る。以下之に倣へ。

【詩意】芍藥は、たとへば、佳人、竹に倚つて翠袖長く、天寒き折から、薄き羅裳を著けた樣である。近ごろ、揚州では、この圖中に見るが如き紅色多瓣の種類を愛するが、これは、風流なる流行である。

【餘論】紀昀は「この首、小人を刺るに似たり」といつて居る。

【字解】【一】倚竹佳人　杜甫の佳人に天寒翠袖薄、日暮倚二修竹一とある。【三】紅千葉　查註に「志林、揚州の芍藥、天下の冠たり。蔡繁刑、主となり、はじめて、萬花會を作し、御愛紅を以て第一となす」とあるが、

楓林翠壁楚江邊。
躑躅千層不忍看。
開卷便知歸路近。
劍南樵叟爲施丹。躑躅

楓林翠壁、楚江の邊、
躑躅千層、看るに忍びず。
卷を開いて、便ち知る歸路の近きを、
劍南の樵叟、爲に丹を施す。

【字解】【一】楓林　宋玉の九辨に江水湛湛兮上有二楓一とあり、阮籍の詠懷に湛湛長江水、上有二楓樹林一と見ゆ。【二】楚江　揚子江。【三】躑躅　つつじ、王註に「躑躅は、山石榴なり、その花深紅、蜀人、映山紅と號す。荆楚山壁の間、最も多し」とあり、韓愈の詩に躑躅紅千層とある。【四】劍南樵叟　趙昌の別號、范蜀公の東齋記に「趙昌、自ら劍南樵人と稱す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】揚子江の上流に於ては、苔青き絕壁高く峙ち、その上に楓樹が茂り、その間間には、躑躅

の花が層を爲して咲き滿ちて、まことに、看るに忍びぬ。卷を開けば、わが歸路の近きを知るべく、筆者の趙昌は、殊に意を用ひて、これを赤く染めたのであらう。

【餘論】紀昀は「この首、ひとり賦體を用ふ、但だ鄉心を寫す、竝に別意なし。知の字、疑ふらくは如の字の誤」とある。

輕肌弱骨散幽葩。　輕肌弱骨、幽葩を散ず、
眞是青裙兩髻丫。　眞に是れ青裙兩髻丫。
便有佳名配黃菊。　便ち、佳名の黃菊に配するあり、
應緣霜後苦無花。寒菊　應に霜後花なきに苦むに緣るなるべし。

【詩意】寒菊は、輕肌弱骨、まことにしをらしく、そして、奥ゆかしい花が、ちらほら咲いて居て、たとへば、青裙の老嬢が、頭上に二つの髻を結つて居る樣である。さればこそ、佳名を黃菊に配するので、霜ふりし後、花なきに苦む折から、愈よ珍重されるのであらう。

【餘論】紀昀は「これ小人の時に乘じて進むを得るを刺る」といつて居る。

【字解】〔一〕散幽葩　散は散落ではなく、散點の義で、奥ゆかしい花がちらほら咲いて居る。〔二〕兩髻丫　二個處に髻を結び分けてある。

游蜂掠盡粉絲黃。　游蜂、掠め盡して粉絲黃なり、
落蘂猶收密露香。　落蘂、猶ほ收む密露の香。
待得春風幾枝在。　春風を待ち得る、幾枝かある、
年來殺菽有飛霜。山茶　年來、菽を殺す、飛霜あり。

【題義】山茶は、さざん花、又或は椿を指すこともある。二花は、もと同種類であるから、いづれでも善い。

【詩意】游蜂は、黃粉を帶びたる雄蘂の花絲を掠め盡し、たまたま落ちた雌蘂は、露の香を帶びて居る。しかし、冬から後は、霜が降つて、豆を枯らす位であるから、咲き續けて、春風に遇ふものは、幾枝もない。

【餘論】紀昀は「この結、太だ露、亦た太だ激、その時を以て之を論ず、亦た應に作るべからず」といひ、馮應榴の案には「これ乃ち寓言、菽を殺すの霜あるに因つての故に、多枝、留めて春時を待つべからず。以て譴に遭ふの人、再び春和を被る能はざるに比するなり」といつて居る。

【字解】〔一〕粉絲　雄蘂の花絲を云ふ。〔二〕殺菽　菽は豆の類。

和黃秀才鑒空閣

黃秀才の鑒空閣に和す

明月本自明。無心孰爲境。　明月、本と自ら明かに、無心、孰れか境となす。

挂空如水鑒。寫此山河影。　空に挂つて水鑒の如く、この山河の影を寫す。
我觀大瀛海。巨浸與天永。　われ大瀛海を觀るに、巨浸、天と永し。
九州居其間。無異蛇盤鏡。　九州、その間に居り、蛇の鏡に盤するに異なるなし。
空水兩無質。相照但耿耿。　空水、兩つながら質なく、相照らして但だ耿耿。
妄云桂兎蟇。俗說皆可屏。　妄りに桂兎蟇といふも、俗說、皆屏くべし。
我游鑒空閣。缺月正淒冷。　われ鑒空閣に游ぶ、缺月、正に淒冷。
黃子寒無衣。對月句愈警。　黃子、寒、衣なく、月に對して、句、愈よ警。
借君方諸淚。一沐管城穎。　君が方諸の淚を借り、一沐す管城の穎。
誰言小叢林。淸絕冠五嶺。　誰か言ふ、小叢林、淸絕、五嶺に冠たりと。

【字解】【一】水鑒　文選、謝希逸の月賦に柔祇雪潔、圓靈水鏡とあり、容齋隨筆に「月中の空處は水影なり」とある。【二】桂兎蟇　酉陽雜俎に「舊傳、月中に桂あり、蟾蜍ありと。故に異書に云ふ、月桂、高さ五百丈、下に一人あり、常に之を斫る。長慶中、人あり、八月十五夜、月光を玩ぶ、林中、匹帛の如きに觸す。尋いで之を觀れば、一金背の蝦蟇を見る、疑ふらくは是れ月中の者」とあり、張衡の靈憲に「月は陰精の宗、積んで水を成し、兎に象る」とある。【三】黃子　卽ち黃秀才。【四】方諸　鏡を云ふ、淮南子に「陽燧、日を見て燒きて火となり、方諸、月を見て津うて水となる」とある。【五】管城穎　筆の尖鋒。【六】叢林　禪林寶訓に「衆僧の止まるところの處、草、亂生せざるを叢といひ、木、亂長せざるを林といふ、その內、規矩法度あるを言ふなり」とあつて、

資初白は、崇福寺だらうといつて居る。【七】五嶺　猗覺寮雜記に「五嶺の說、多くは同じからず。後漢吳祐・劉表傳の註、西、衡山・守甯より、東、海に至るまで、一山の限りて名を標する五あり。裴氏の廣州記、大庾・始安・臨賀・桂陽・揚陽、これを五嶺となす、衆說同じからず、錄して以て備考とす」とある。

【題義】黃秀才、名字失考。鑒空閣は、杭州に在るといつて、杭州圖經、咸淳臨安志を引く人もあるが、邵氏の王註正譌に「詩意を案ずるに、閣の嶺外に在ること、甚だ明かなり。胡氏註、乃ち杭州圖經を引く、殊に謂なし」といひ、查註には更に之を駁して「洪容齋續筆、余、南海に游ぶ、西歸の日、舟を金利山下に泊し、崇福寺に登る、閣あり、江流に臨む、標して鑒空といふ、正に東坡の詩牌、その上に揭ぐるを見る。蓋し、當時臨賦の處なりと。これに據れば、鑒空閣は、當に廣州に在るべし。王氏の註、謬れり、本詩の結句を觀るに、辨を待たずして自ら明かなり」とある。

【詩意】明月は、本來、自然明かであつて、無心の境は、この外、何處にもない。月が空に挂ると、宛として水鏡の如く、地上なる山河の影を寫して居る。われ、大瀛海を見るに、澤山の水は、天に接して永く、九州は、その間に浮び、蛇が鏡中に盤屈して居る樣なものである。天と水と、もと堅硬な物質ではなく、耿耿として、相照らして居る。月中には、桂が生えて居るといひ、兎や蟇が棲んで居るといふが、皆俗說にして斥くべきものである。われ、今、鑒空閣に登ると、缺月冷かにすさまじく、主人たる黃秀才は、この寒いのに、衣なくして、月下に詩を作ると、その句は、愈よ警拔である。君

から、鋩に結ぶ露を借りて、わが筆の先を洗つて、何か一つ拈り出さうと思ふ位、かの小叢林たる崇福寺は、五嶺以南、ひとり清絶と稱すべき譯でもない。

【餘論】紀昀は「靈空超妙、前の藤州江上の作に減せず」といつて居る。

韋偃牧馬圖

神工妙技帝所收。
江都曹韓逝莫留。
人間畫馬惟韋侯。
當年爲誰掃驊騮。
至今霜蹄踏長楸。
圉人困臥沙壠頭。
沙苑茫茫蒺藜秋。
風騣霧鬣寒颼颼。
龍種尚與駑駘游。
長稭短豆豈我羞。
八鑾六轡非馬謀。
古來西山與東邱。

韋偃の牧馬圖

神工妙技、帝の收むるところ、
江都曹韓、逝いて留まるなし。
人間の畫馬、惟だ韋侯、
當年、誰が爲に驊騮を掃ふ。
今に至つて、霜蹄、長楸を踏む、
圉人困臥す、沙壠の頭。
沙苑茫茫、蒺藜の秋、
風騣霧鬣、寒颼颼。
龍種、なほ駑駘と游ぶ、
長稭短豆、豈に我が羞ならむや。
八鑾六轡、馬の謀に非ず、
古來、西山と東邱と。

【字解】【一】江都曹韓　江都は、名畫記に「江都王緒は、霍王元軌の子、太宗皇帝の騎子なり。才藝多く、善く鞍馬を畫いて、名を擅にす」とある。曹は曹霸、名畫記に「曹霸は、魏の曹髦の後、套、後代に稱せらる。霸、開元中に在つて、すでに名を得、天寶の末、每に詔して御馬及び功臣を寫し、官、左武衛將軍に至る」とある。杜甫の作つた韋諷錄事宅、觀二曹將軍畫馬一引の破題に國初以來畫二鞍馬一神妙獨數江都王、將軍得レ名三十載、人間又見眞乘黃とあり、又別に丹青引、贈二曹將軍霸一の一首がある。韓幹は、卽ち曹霸の弟子、數ば見えて居た。【二】韋侯　韋君といふに同じ、卽ち韋偃、題畫の項に注して置く。【三】驊騮　名馬を云ふ。

【四】霜蹄踏長楸　杜甫の韋偃畫馬歌に、韋侯別レ我有レ所レ適、知我憐二君畫無レ敵、戲拈二禿筆一掃二驊騮一、欲見騏驎出二東壁一、一匹龁レ草一匹嘶、坐看千里當二霜蹄一とある。又曹子建の詩に圖レ雖東郊道、走レ馬長楸間とあつて、文選の註に「古人、楸を種う、故に長楸といふ」とある。【五】圉人　馬飼、主馬寮の吏員。【六】沙苑　水經註に「洛水、東、沙邱の北を經す」とあり、元和郡縣志に「沙苑、一名は沙阜、同州馮翊縣南に在り、その地、六畜に宜しく、沙苑監を置く」とあり、唐六典に「沙苑監は、隴右の牛馬を牧するを掌る」とあり、太平寰宇記に「沙苑の古城は、朝邑縣南に在り、馮翊縣の東界より洛水の南岸に沿ひ、朝邑の界に入り、南、渭水城に至る、廣さ四十八里」とある。【七】蒺藜　濱びし、海濱の沙地に生ずる一種の蔓草、夏、葉間に五瓣の小花を開き、三角又は四角の刺ある實を結ぶ、後世、餌又は米にて、この實の形を作り、敵の進路を繫ぐに用ふ。【八】風騣霧鬣　前に王晉卿欲レ畫二海石一の詩中に注して置いた。【九】龍種　名馬を云ふ。龍の神聖なるものは、化して馬となるといふ傳說に本づく、杜甫の李鄠縣胡馬行に一聞說盡意蘇村、轉益愁尙二駑駘眾一、始知神龍別有レ種、不レ比俗馬空多レ肉とある。【一〇】長稭　稭は皮を去りし藁。【一一】我羞　羞は勝羞、卽ち食物。【一二】八鑾六轡　四頭立の馬車といへば、無論、馬四頭をつけ、二頭づつ並んで二列。その各〻に鈴を二つつけるから八鑾。二頭に手綱三本で、一本を共通にする、四頭で六本、六轡といふ。轡は手綱、これをくつわといふのは邦俗の誤である。【一三】西山與東邱　王註に「西山は伯夷なり、東邱は盜跖なり。莊子駢拇篇、伯夷は名に首陽の下に死し、盜跖は利に東陵の上に死す」とある。

【題義】韋偃は、唐の畫家で、杜甫と同時、名畫記に「韋偃、畫山水に工なり、高僧奇士、老松異石、筆力勁健、風格高舉」とあり、名畫錄に「韋偃は、京兆の人、蜀に寓す、善く山水竹樹人物を畫き、戲筆を以て鞍馬を點綴し、千變萬化、その妙を曲盡す、韓幹の匹なり」とある。この詩は、韋偃の畫いた牧馬の圖に題したのである。

【詩意】凡そ神工妙技と稱せられるものは、天帝に收用されるから、いつまでも、この世には居らず、かの江都王緒の如き、曹霸・韓幹の如き、すでに死して留めることは出來ない。これ等の人人の後に在つて、馬を畫いたのは、唯だ韋偃だけで、その當時、誰の爲に、この名馬を畫いたか知らぬが、今一幅の畫が殘つて居る。その畫幅を見ると、依然として、名馬が霜蹄に長楸を踏みにじり、圉人は、弱り切つて、沙丘の邊に臥して居る處が寫してある。音に聞く沙苑は、茫茫として、蒺藜正に秋に入り、その名馬どもは、風鬣霧髭を振り立て、寒げに颯颯として打靡くを意とせざる樣である。おもへば、折角の龍種が、やくざ馬と一緒になつて游んで居る樣であるが、元來、藁や豆の如きは、名馬の食するものではなく、唯だ自由に草を齕み、水を飲んで居れば、その眞性を發揮すべく、又八鑾六轡といつた樣に、馬車を曳かされるのも、馬の欲するところではなく、矢張、足を翹げて勝手に躍りはねて居るのが、その本性で、人に飼はれる苦痛は、伯夷が西山に薇を采つて饑を忍び、盜跖の東陵に居る時、人の肝を食ふを減せしめられる樣なものである。

【餘論】紀昀は「語、頗る遒緊、後半純ら是れ寓言」といつて居る。

題靈峰寺壁

靈峰寺の壁に題す

靈峰山上寶陀寺。　靈峰山上の寶陀寺、
白髮東坡又到來。　白髮の東坡、又到り來る。
前世德雲今我是。　前世の德雲、今、我、是れなり、
依稀猶記妙高臺。　依稀、なほ記す妙高臺。

【題義】廣州志に「靈峰山、一名靈洲山、城西六十五里に在り、鬱水、その下に出づ。唐志に謂ふ、南海の名山は靈洲、名川は鬱水、これ、その上に寶陀院妙高臺あり、院中に寶陀佛あるを以ての故に名づく」とあつて、王註に、態態遠く南都の妙峰寺及び金山の妙高峰を引いたのは、この地と全く干渉なくして、無論誤である。この詩は、卽ち靈峰寺に參詣して、その壁に題したのである。

【詩意】靈峰山の上なる寶陀寺は、まことに招提の淨境である處から、白髮頭の東坡は、態態やつ

【字解】【一】靈峰　寶陀寺・妙高臺と共に題義の項に注して置く。
【二】德雲　名勝志に「蘇軾、惠州に謫せられ、舟を此に泊し、前身德雲和尙たるを夢み、詩を賦して云云」として、この絕句が引いてあるし、馮應榴は、寓惠州の註に據つて「按ずるに、德雲は、寶陀院の示寂僧なり」といつて居る。但し、德雲比邱といふものが、勝樂國妙峰山の上に居たといふことが、華嚴經に見えて居るから、この僧は、その名を襲用したのであらう。

て來た。そして東坡の前世は、この寺に居た德雲和尙であつて、今の予は、取りも直さず、その生まれ替りに相違なく、妙高臺など、朧げながら、記憶して居るのは、まさしく、その證據である。

廣州何道士衆妙堂　廣州何道士の衆妙堂

湛然無觀古眞人。　湛然として、古しへの眞人を觀るなく、
我獨觀此衆妙門。　われ獨り、この衆妙の門を觀る。
夫物芸芸各歸根。　夫れ物は芸芸として、各〻根に歸し、
衆中得一道乃存。　衆中、一を得れば、道、乃ち存す。
道人晨起開東軒。　道人、晨に起つて、東軒を開き、
趺坐一醉扶桑暾。　趺坐、一醉す扶桑の暾。
餘光照我玻瓈盆。　餘光、わが玻瓈の盆を照らし、
倒射窗几清而溫。　倒に窗几を射て、清にして溫。
欲收月魄餐日魂。　月魄を收めて、日魂を餐せむと欲す、
我自日月誰使呑。　われ自ら日月、誰にか呑ましめむ。

【字解】【一】衆妙門　老子に、「玄の又玄、衆妙の門」とあつて、宇宙の本體は、道と稱し、常無常有、玄玄微妙にして、衆妙の出づるところといふ義。【二】物芸芸　老子は「夫れ物云云だれども、各〻その根に歸る、根に歸るを靜といふ」とある。云云は、芸芸に同じく、しげりて多き貌。【三】扶桑暾　暾は朝日、楚辭の註に「日、はじめて東方に出づ、その容、暾暾として盛なる貌なり。東方に扶桑の木あり、その高さ萬仞、日、下れば、暘谷に浴し、上れば扶桑の法、常に日の初めて出づる時を以て、東向、齒を叩くこと九過、叩き畢つて、瞑目、攝つて固く存すれば、五色の流霞、來つて一身に接し、ここに於て、日光洞澈、ともに口中に入る。月を呑むの法、常に月の初めて出づる時を以て、西向、齒を叩くこと十過、咒し畢り、瞑目、攝つて固く存すれば、月色精光、ともに口中に入る、能く此道を修すれば、日月に奔るの神仙なり」とある。【五】我自日月　任註に「道家言ふ、人身中、自ら日月あり」と見ゆ。

【一】を拂ふなり」とある。【四】收月魄　餐日魂　黃庭經の註に「日氣を呑む

【題義】　查註に「先生、嶺南に在つて往還するもの、兩何道士あり、その一は惠州逍遙堂に居る、名は宗一、その一は廣州天慶觀に居る、卽ち崇道大師なり」とあり、又本集中の衆妙堂記を引いて、「廣州崇道大師何德順は、道を學んで妙に至るものなり、故に其堂を廣めて衆妙といひ、書、海南に來り、文以て之を記せむことを求む」とある。この詩は、東坡が北歸の途中、衆妙堂に立ち寄り、乃ち賦して、何道士に贈つたのである。

【詩意】　湛然と心を落ちつけて、古しへの仙人を觀、そして之を羨ましがつてはならぬので、われは獨り、この衆妙の門を觀るべしである。抑も、萬物は、芸芸として繁多なれども、各〻その根源に歸れば、衆妙中、唯だ一條の原理を得べく、そこに道が存して居る。君は、朝早く起きて、東軒を開き、あぐらをかいて、扶桑に上る朝日の光に醉うて、餘光は、座上に在る玻璃盆をさへ照らし、やがて、明窓淨几の間を射ると、清清しげにして、且つ溫かである。君は、日月の氣を吸收したいと思つて居

られるが、その身中に自然日月があつて、それは誰に呑ましめやうとされるのか。

題馮通直明月湖詩後

馮通直の明月湖の詩の後に題す

老衍清篇墨未枯。
小馮新作語尤殊。
呼兒淨洗涵星硯、
爲子賡歌墮月湖。
聞道牂江空抱珥、
年來合浦自還珠。
請君多釀蓮花酒、
準擬王喬下履鳧。

【字解】【一】老衍　衍は馮衍、同姓の故を以て馮通直に相比す。前に次韻蒜山縣見寄の詩中に注して置いた。【二】小馮　馮祖仁に比す。【三】賡歌　和して歌ふ。【四】墮月湖　諸家の註に未詳とあるが、明月湖に響くといふ意味に見て置く。【五】抱珥　東坡の自註に「南詔に西珥河あり、卽ち古しへの牂牁江なり、河の形、月の珥を抱くが如し、故に西珥といふ」とある。【六】合浦　前に紳才退居の詩中に注して置いた。【七】王喬　その來るを伺つて之を捕した處が、履を得たといふので、前に雙鳧觀の詩中に注して置いた。

【題義】馮通直の本名は失考、本集の與二馮相仁一書に「水道間關、寸進、更に二十餘日、乃ち曲江に至り、當に字下に至るべし」とあり、又「先什輒ち已に題跋」とあり、又、書二馮祖仁父詩後一に「河源令齊參祖仁、その先君子の詩、七篇を出す、爍然として唐人の風あり」と見ゆ。すると、この詩は、馮祖仁の請に應じて、その父通仁の明月湖の詩に題したのである。なほ、明月湖は、前に送二呂昌朝知二嘉州一の詩中に注して置いた。

【詩意】御尊父の清篇は、墨痕、未だ枯れず、さう古いものではなく、貴下の新作も、語語、殊絶である。今倅を呼んで、祕藏の涵星硯を洗ひ清め、君の爲に和詩を作り、歌聲が明月湖に響徹する樣にしたいと思ふ。聞けば、月湖に近き牂牁江は、月の珥を抱くが如くであるが、そこに產する珠は、年來、皆合浦に還つて仕舞ひ、今は何も殘らぬとの話。願はくは、君よ、多く蓮花酒を釀造せよ、醉中には、かの王喬が雙鳧に化して飛び行くが如く、吟魂は、はるかに月湖に行くことも出來やう。

次韻鄭介夫二首

鄭介夫に次韻す　二首

一落泥塗迹愈深。
尺薪如桂米如金。
長庚到曉空陪月。
太歲今年合守心。

一たび泥塗に落つれば、迹、愈よ深く、
尺薪は桂の如く、米は金の如し。
長庚、曉に至つて空しく月に陪し、
太歲、今年合に心を守るべし。

【字解】【一】尺薪如桂　戰國策に「蘇秦、楚王に謂つて曰く、楚國の食、貴きこと玉の如く、薪、貴きこと、桂の如し」とある。【二】長庚　太白星、卽ち明星。【三】太歲　李經尙命訣に「歲星、心を守れば、年穀

相與齧(一)氈指漢節。　相與に氈を齧んで漢節を指し、
何妨振(二)履出商音。　何ぞ妨げむ、履を振つて商音を出すを。
孤雲倦鳥空來往。　孤雲倦鳥、空しく來往、
自要閒飛不作霖。　自ら要す、閒飛して霖を作さざるを。

【語義】　鄭介夫、名は俠、その傳は、宋史に見え、ひどく新法に反對し、且つ流民の圖を獻じたことを以て知られて居る。神宗の末、英州に徙され、哲宗卽位、蘇子由、諫官となり、介夫放流十年、屢ば大赦を經るも、終に牽復を得ず、父、日に益す老いて、還る期なく、有志の士、これが爲に涕泣する旨を上言し、はじめて歸ることが出來て、泉州敎授となつたが、元符の初、再び英州に竄せられ、徽宗卽位、赦されて故官に還つた。東坡の此詩を寄せたのは、恰も英州再竄中に當つて居ると思はれる。

【詩意】　君は、不幸にして、泥塗に陷り、その跡、愈よ深く、且つ生活に苦み、一尺の薪は、桂の如く、一升の米は金の如くである。太白の星は、曉に至るまで、空しく月に陪從するも、格別何にも成らず、今年、歲星が心を守るといへば、年穀豐にして、すこしは、樂に成るであらう。かかる苦境に在るにも拘はらず、君が操守を變せざるは、かの蘇武が氈毛を嚙みつつ、漢節を持して離さざりしと同じく、朝廷に於て、一かどの重きをなすは、履聲涼しげに聞こえ、天子が鄭尙書の足音を知つて居られる如くである。雲、心なくして岫を出で、鳥、飛ぶを倦んで歸るを知るものから、南北に往來しても、何の效果なく、依然たる貶謫の身、倦鳥は閒飛すべく、孤雲は霖を成すに足らず、唯だ枉げて刻下の境涯に安んじて居る外はあるまい。

【餘論】　紀昀は「すべて、此事を用ふ。二公、遠謫と雖も、猶ほ宋士なり、結二句、自ら好し」といつて居る。

一生憂患萃殘年。　一生の憂患、殘年に萃まる、
心似驚蠶未易眠。　心は驚蠶に似て、未だ眠り易からず。
海上偶來期汗漫。　海上、偶ま來つて汗漫を期し、
葦間猶得見延緣。　葦間、猶ほ延緣を見るを得たり。
良醫自要經三折。　良醫、自ら三折を經るを要す、
老將何妨敗兩甄。　老將、何ぞ妨げむ、兩甄を敗るを。
收取桑榆植梨棗。　桑榆を收取して、梨棗を植う、

【字解】　【一】良醫　前に將に至る廣州の詩中に注して置いた。【二】老將　晉書周訪傳に「虜率杜曾を擊つ。李恒をして左甄を督し、許朝をして右甄を督せしめ、訪、自ら中軍を領し、その衆に令して曰く、一甄敗るれば三鼓を鳴らし、兩甄敗るれば六鼓を鳴らさむ、と。旦より申に至り、兩甄皆破る。訪、親ら鼓を鳴らす、將士皆踴躍奔赴、曾、遂に大

豐」とあつて、その註に「饑凶、心を守るを豐年となす、故に年豐なるなり」とある。心は二十八宿の一。【四】齧氈　蘇武の事、前に次韻孫巨源二の詩中に注して置いた。【五】振履　前に諸公餞三子敎二の詩中に注

祝君眉壽似增川。

祝す、君の眉壽、増川に似たるを。

とある。【四】増川　同じく天保に如川之方至、以莫不増とある。

【詩意】一生の憂患は、幾年に萃まり、老後、安きを得ず、心は驚蠶の如く、おッちりと眠られぬこととと推察する。君は、偶然、南海の上に來り、遊跡汗漫、いつ歸るとも知らず、葦間に路を尋ねて、どうやら川べりをたどることが出來た樣なものである。古しへより、良醫は、三たび肱を折るを要すと稱せられ、老將は、兩翼が敗れたからといつて、びくともしない。君は、桑榆を取り除け、梨棗を植ゑて、心のどかに、子孫の計を爲すべく、その長壽は、川の方に至つて增さざるなきが如くならむことを祈る次第である。

昔在九江、與蘇伯固唱和、其略曰、我夢扁舟浮震澤、雪浪橫空千頃白、覺來滿眼是廬山、倚天無數開青壁、蓋實夢也、昨日又夢伯固、手持乳香嬰兒、示予、覺而思之、蓋南華賜物也、豈復與伯固相見於此耶、今得來書、知已在南華、相待數日矣、感嘆不已、故先寄此詩

扁舟震澤定何時。
滿眼廬山覺又非。
春草池塘惠連夢。
上林鴻雁子卿歸。
水香知是曹溪口。
眼淨同看古佛衣。
不向南華結香火。

に潰ゆ」とある、嘗覆は嘗翼であらう。【三】眉壽　詩經に以介眉壽

むかし、九江に在つて、蘇伯固と唱和す。その略に曰く、われ夢に、扁舟、震澤に浮ぶ、雪浪、空に橫うて千頃白し。覺め來れば、滿眼、是れ廬山、天に倚つて、無數、青壁を開く、と。蓋し、實夢なり。昨日、又伯固を夢む、手に乳香の嬰兒を持して、予に示す。覺めて之を思ふ、蓋し南華の賜物ならむ、豈に復た伯固と此に相見むやと。今、來書を得、すでに南華に在つて、相待つこと數日なるを知り、感嘆已まず、故に先づ此詩を寄す

扁舟震澤定何時、
滿眼の廬山、覺めて又非なり。
春草の池塘、惠連の夢、
上林の鴻雁、子卿歸る。
水香ばしく、知る是れ曹溪口、
眼淨くして、同じく看る古佛の衣。
南華に向つて、香火を結ばざれば、

【字解】【一】惠連夢　前に次韻李端叔送保倅の詩中に注して置いた。【二】子卿歸　子卿は蘇武の字、漢書蘇武傳に「昭帝卽位、匈奴、漢と和親す。漢、武等を求む、匈奴、詭つて武死すと言ふ。後、漢使、復た匈奴に至る、常惠、使者に敎へ、單于に謂つて言はしむ、天子、上林中に得て、雁を得たり、足に帛書を繫くるあり、言ふ、武等、某の澤中に在りと。單于、左右を視て驚き、

此生何處是眞依。

この生、何の處か、これ眞依。

「この句、正に以て南華を言ふ。天寶元年、婆羅門智樂といふものあり、南游して曹溪口に至り、水を掬し、香を聞いて云ふ、これ必ず勝地、道場を建つべし、と。故に是に南華寺あるなり」と見ゆ。【四】眼睜　王註に「維摩經に云ふ、塵に遠ざかり、垢を離るれば、法眼の淨きを得、と。故に先生屢ば此字を用ふ、水洗ニ諢心一俱眼淨と云ひ、又眼淨不レ覩登伽女と云ふが如き、是れなり」とある。【五】古佛衣　宣註に「劉禹錫の曹溪第二碑、はじめ、達磨佛衣と俱に來り、道を得、傳付して以て眞印となす。大鑒に至り、置いて傳へず。翻譯名義、屈眴、ここに大細布といふ、木綿の花心を緝めて織成す、その色青黑、卽ち達磨傳ふところの袈裟」とある。

【題義】題の意味は――むかし、九江に在りし時、蘇伯固と唱和し、その詩中、我夢扁舟浮ニ震澤一、雪浪橫レ空千頃白、覺來滿眼是廬山、倚レ天無數開ニ青壁一といふ句があつて、どうやら、正夢であつた。昨日、又夢の中に、伯固が、手に乳の香の失せざる綠兒を抱いて來て、予に示したが、覺めての後に考へると、それは、南華寺の長老から物を賜はつたといふことであらう。さなくば、どうして、再び伯固と此に相見ることがあらう。今、伯固から手紙が屆いたので、すでに南華寺に在つて、數日も待つて居るといふことを知り、感歎止まず、仍つて、先づ此詩を寄せたといふのである。

【詩意】舟を震澤に浮べたのは、何時であつたか、覺め來れば、唯だ滿眼の廬山を見るだけで、一場の夢に過ぎなかつた。むかし、謝靈運は、惠連を夢みて、池塘春草の句を得たが、われと伯固との關係は、略ぼ之に類似して居るし、予が今北歸するのは、上林で雁を得たといふことから、蘇武が召し還されたのと同じである。やがて、一緒に南華寺に往けば、水の香ばしきに因つて曹溪口たるを知るべく、淨眼を以て、ともに達磨傳來の古い佛衣を拜見することも出來る。元來、南華は物外の靈境、その住持は希に見るところの高僧であるから、もし、之に對して、香火の社を結ばなければ、この一生を通じて、眞に歸依すべき處も無からう。

【餘論】紀昀は「又この事を用ふ、眞に解すべからず」といつて居る。

追レ和沈遼贈ニ南華一詩

沈遼の南華に贈る詩に追和す

善哉彼上人。了知明鏡臺。
歡然不ニ我厭一。肯致遠公杯。
莞爾無心雲。胡爲出岫來。
一堂安ニ寂滅一。卒レ歲扃ニ蒼苔一。

善いかな、彼の上人、了に知る明鏡臺。
歡然として我を厭はず、肯て遠公の杯を致さむや。
莞爾たり、無心の雲、胡すれぞ岫を出でて來る。
一堂、寂滅に安んじ、歲を卒へて、蒼苔に扃す。

【字解】【一】上人　禪宗要覽に「瓶沙王、佛弟子を呼んで上人となす、內に德智あり、外に勝行あつて、人の上に在り、故に上人と名づく」とある。【二】遠公杯　遠公は卽ち慧遠、廬阜雜記に「遠師、白蓮社を結び、書を以て陶淵明を招く。陶曰く、弟子、性、酒を嗜む、もし飲を許さば、卽ち往かむと。遠、これを許す、遂に造る」とある。

【題義】この首は、沈遼といふ人が、南華長老に贈つた詩に追和したのである。馮應榴の案に「咸淳

臨安志、遼は文通の弟、登第後、呉縣の令となり、効に遭うて籍を削られ、池陽に卜居す」とある。

【詩意】善いかな、かの上人は、明鏡臺に比すべき人の胸中の心を知り拔いて居られる。そこで、歡然として、われを厭はず、慧遠が陶淵明に酒を飲むことを許した樣に、杯を致される。上人は、雲を眺め、かの無心の者が、如何なれば、軸を出でて自ら勞するかといはれる。さればこそ、一堂の中に籠り、寂滅に安んじて、涅槃の境を希ひ、歳の終るまで、青苔が生えたまま、扃を鎖してある。

曹溪夜、觀傳燈錄、燈花落一僧字上、口占

曹溪の夜、傳燈錄を觀る、燈花、一僧字の上に落つ、口占

山堂夜岑寂。燈下看傳燈。山堂、夜岑寂、燈下に傳燈を看る。
不覺燈花落。茶毗一箇僧。覺えず、燈花落ちて、一個の僧を茶毗するを。

【字解】【一】傳燈　書名、釋氏稽古略に「吳曾道原、釋迦世尊、初祖迦葉より、以て東土禪宗の傳嗣、諸祖の機緣に至るまでを集め、景德傳燈錄三十卷となす。眞宗、嘉賞し、翰林學士楊億等に敕し、刊正して序を撰し、頒つて大藏に入る」とある。【三】茶毗　焚燒する、火葬する。

【題義】曹溪の南華寺に居て、夜、傳燈錄を讀んで居ると、丁子が僧といふ字の上に落ちたから、この詩を口占したといふのである。口占とは、くちずさむ、口中にて隱に其言語を度りて人に授くるの義。後には、人に授くるといふ意は無くなつて、咄嗟の間に唱へ出すといふ樣に用ひて居る。

【詩意】山寺の堂中で、ひッそりした夜に當つて、燈下に傳燈錄を看て居ると、知らぬ間に、丁子が落ちて、一個の坊主を茶毗に付して仕舞つた。

【餘論】まことに下らぬ題で、從つて、詩も駄洒落に過ぎず、紀昀が「これ豈に是れ詩ならむや」といつたのは、極めて適切である。

南華老師示四韻、事忙、姑以一偈答之

南華老師、四韻を示さる、事忙はし、姑く一偈を以て之に答ふ

惡業相纏五十年。惡業、相纏ふこと五十年、
常行八棒十三禪。常行、八棒十三禪。
却著衲衣歸玉局。却つて衲衣を著けて玉局に歸る、
自疑身是五通仙。自ら疑ふ、身は是れ五通の仙。

【字解】【一】五十年　この時、東坡は六十五歳であるが、これは、物心を知つてから以後の年數を云つたのであらう。【二】常行　行の字は、成行などいふ時、仄字であるが、通用したのかも知れぬ。【三】八棒　湯歷榴の案に「僧、閩山の令含禪師に問ふ、明明不會、師の指示を乞ふ。師曰く、八棒十三禪」とある。これだけでは、よく分からぬが、日ごとに八棒を打たれ、又、一日は十二時で、十二時以上の禪をやらねばならぬといふ意味でもあらうか。【四】玉局　この

頃、東坡は玉局觀を勾管することに成つた。【五】五通仙　五燈會元に「世尊、五通仙人が、世尊に六通あり、われに五通あり、如何が是れ一通と問ひしに因り、佛、五通仙人を召す、五通、應諾す、佛曰く、かの一通は、爾、われに問ふ」とある。すると、五通仙人は、佛と相去ること一通、略ぼ相頭ぐものと見える。

【題義】本集の南華長老題名記に「南華は、六祖大鑒示滅せしより、その傳法得眼の者、散じて四方に之く、故に、南華は、律寺となる。吾が宋の天禧三年に至り、はじめて、智度禪師普遂に詔して住持たらしむ、今の明公に至るまで十一世」とある。明公、一に朗公に作り、これが卽ち南華老師である。この首は、南華老師から、四韻、卽ち律體の詩を示されたが、何分、事忙しくて、考へる暇もない故に、取り敢へず、一偈を以て之に答へたといふのである。

【詩意】われ世に出でて、惡業に付き纏はれて居たこと、すでに五十年、八棒十三禪を常行として、精進したいと思つて居る。やがて、僧衣を著て玉局觀に入る時あらば、取りも直さず、この身は五通仙人だらうと疑ふであらう。

次韻韶守狄大夫見贈二首　韶守狄大夫の贈らるるに次韻す　二首

華髮蕭蕭老遂良。
一身萍挂海中央。

【字解】【一】老遂良　東坡の自註に「褚の河南帖に云ふ、卽日、遂良、須髮盡く白し、と。蓋し長沙に謫せらるるの時なり」とある。【二】孔文舉　後漢書孔融傳に「融、その高氣を負ひ、志、靖雄に在り、しかも、才疏にして、意廣く、遂に成功なし」とある。【三】顧長康　前に再用二前韻一寄二莘老一の詩中に注して置いた。【四】泣血　馮應榴の案に「末二句、晉宗の晏駕を指す、故に泣血の字を用ふ」とある。【五】七年　馮應榴

無錢種菜爲家業。
有病安心是藥方。
才疏正類孔文舉。
癡絕還同顧長康。
萬里歸來空泣血。
七年供奉殿西廊。

錢なく、菜を種ゑて家業となし、
病あるも、心を安んずるは是れ藥方。
才、疏にして、正に孔文舉に類し、
癡絕、還た顧長康に同じ。
萬里、歸り來つて、空しく血に泣く、
七年供奉す、殿の西廊。

の案に「先生、元豐八年、哲宗卽位の十二月、入つて延和に侍せしより、元祐八年九月、出でて定州に知たるに至るまで、中間五六兩年を除いて、京師の外に在らず、前後統計、正に七年なり」とある。【六】供奉　唐書百官志に「明皇、文學の士を選びて、翰林供奉と號す。開元二十六年、又翰林供奉を改めて學士となす」とある。【七】西廊　東坡の自註に「通英閣は、延和殿西廊の下に在り」と見ゆ。蓋註に「黃山谷詩註、東京記を引いて云ふ、崇政殿西、通英閣あり。桑榆漫志、端明殿は後唐に始まる、國初改めて文明となす。而して、學士、仍ほ端明の職を領す。雍熙の初、又改めて文德と名づけ、明道の間、承明を改めて端明となし、後、改めて延和と名づく」とある。

【題義】蓋註に「太平寰宇記、嶺南道韶州、秦、南海郡に屬す。三國の吳、始興郡を置く。隋の開皇九年、改めて韶州となし、州北八十里、韶石を以て名となす。九域志に、廣南東路韶州、南、英州に至る一百九十五里、東北、南安軍に至る三百三十里と。狄大夫、名は咸、本集九成臺銘の敍中に見ゆ。又

後詩中に誰知南岳老の句あり、當に是れ衡州の人なるべし」とある。この首は、韶州の太守狄咸から詩を贈つて來たから、取り敢へず、これに次韻したのである。

【詩意】白髮蕭蕭として、褚遂良の老いたるに同じく、この一身は、萍の如く、海の中央に挂つて居る。錢なきが故に、百姓の眞似をして、菜を種うることを家業とし、病氣の時は、安心が唯一最善の藥方である。才の疏なることは、正しく孔文舉に類し、癡絕なることは、顧長康に類して居る。今萬里の海外より歸らむとし、天子の崩御を聞き、むかし、七年の久しき、延和殿の西廊なる邇英閣に、翰林學士として供奉し、日夕、聖恩を辱うしたるを思ふと、淚盡きはてし後、血を以て之に續ぐばかりである。

森森畫戟擁朱輪。
坐詠梁公覺有神。
白傅閒游空誦句。
拾遺窮老敢論親。
東海莫懷疏受意。
西風幸免庾公塵。
爲公過嶺傳新唱。
催發寒梅一信春。

森森たる畫戟、朱輪を擁す、
坐詠梁公、神あるを覺ゆ。
白傅閒游、空しく句を誦し、
拾遺窮老、敢て親を論せむや。
東海、懷くなかれ疏受の意、
西風、幸に免る庾公の塵。
公の爲に、嶺を過ぎて新唱を傳ふ、
發するを催す、寒梅一信の春。

【字解】【一】朱輪　前に會景亭の詩中に注して置いた。【二】梁公　唐書に「狄仁傑、梁國公に封ぜらる」とあつて、これは借用して韶州を指したのであらう。【三】白傅　東坡の自註に「事は、白樂天の奏鄂詩石記に見ゆ」とある。五註本に「白樂天、蘇州たる時、旬宴詩刻の序あり、云ふ、章、この州に在つて、歐詩甚だ多し、鄂宴の詩あり、云ふ、兵衞森森畫戟、宴罷淒淒清香」と。最も警策となす。今、この篇を石に刻して、將來に傳貽し、因つて余の旬宴の一章を以て亦た後に附す。」とある。【四】拾遺　東坡の自註に「事は、子美の贈「狄明府」の詩に見ゆ」とあつて、即ち樂公曾孫我績弟、不見十年官濟濟といふのである。【五】疏受　前に次韻孫巨源の詩中に注して置いた。【六】庾公　即ち庾亮、前に王廷老退居の詩中に注して置いた。

【詩意】森森たる畫戟は、朱輪を擁し、古しへの狄梁公の如く、坐して吟詠するのは、まことに精神ある樣に覺える。君は白樂天の如く、閒游して空しく句を誦し、又杜甫に似て、窮老の餘、敢て親を論ずることはない。依然として官に在る身は、東海の疏受の樣に辭職の心を起さず、誰でも快からざる人もないから、西風の吹きすさぶ日でも、庾亮の塵を受けることはない。君が爲に、五嶺を過ぎて、新しい詩句を傳へ、寒梅が第一に春信を傳へて咲き出でる樣に催促しやうと思ふ。

次韻韶倅李通直二首

韶倅李通直に次韻す　二首

一篇瀧吏可書紳。

一篇瀧吏、紳に書すべし、

【字解】【一】瀧吏　韓愈が潮州

莫向長沮更問津。長沮に向つて更に津を問ふ莫れ。
老去常憂伴新鬼。老去、常に憂ふ新鬼を伴ふを、
歸來且喜是陳人。歸來、且つ喜ぶ是れ陳人。
曾陪令尹蒼髯古。かつて、令尹に陪して蒼髯古く、
又見郎君白髮新。又見る、郎君、白髮の新なるを。
回首天涯一惆悵。首を回らせば、天涯一惆悵、
却登梅嶺望楓宸。却つて、梅嶺を登つて楓宸を望む。

に貶ぜられる途中の作で、その中に往問三邇頭吏、潮州尚幾里、邇吏垂首笑、官何問之愚、蒲大瓶罌小、所在自有宜、官何不自量、漏溢以取斯、不知官在朝、有益國家不、得無風與其問、不武亦不文、仁義飾其躬、今更羞とあつて、大指、皆嘲憤の詞である。【三】書紳　帶に書きつける、論語に見ゆ。【四】長沮　孔子が子路をして津を長沮に問はしめたといふので、亦た論語に見ゆ。【五】新鬼　新に死せし人、鬼は祭らざるを云ふ。左傳に「夏父弗忌、宗伯たり、僖公を祭び、且つ明かに見て曰く、われ新鬼大、故鬼小なるを見る」とある。【六】陳人　陳は古い、世におくれた人。【六】令尹　李倅の父を指す。【七】郎君　李倅を指す、王註に「古人、その父を識り、又その子を識るに於ては、謂うて郎君となす。李義山の令狐綯に與ふる詩に、郎君官貴施「行馬」の如し」とある。【八】梅嶺　査註に「史記索隱、蹕章三十里、梅嶺あり、古しへの驛道に當る。相傳ふ、梅將軍を以て名を得たり、と。越絕書、越王の子孫、姓は梅氏、秦、六國を併す、越王、零陵を踰えて南海に往く、越人梅鋗、從つて塞嶺に至つて家す、鄉人、因つて塞嶺を謂うて梅嶺となす、又大庾嶺と名づく」とある。【九】楓宸　王註に「天子の殿庭なり、何平叔、景福殿賦、芸若充庭、槐楓被宸」とあり、馮應榴の案に「說文解字、楓木は、漢の宮殿中多く之を植う、故に楓宸と稱す」とある。

【題義】王註に「案ずるに、先生、李惟熙に與ふるの帖に、偶ま生還を得、平生、龍舒の風土を愛し、卜居して終老の計を爲さむと欲す」とあつて、査註にも、この帖を擧げ「第二首と意合ふ、惟熙、疑ふらくは、卽ち李通直ならむ」とある。すると、この詩は、韶州の通判たる李惟熙、字は通直の詩に次韻したのである。

【詩意】韓退之の瀧吏といふ詩は、宜しく紳に書すべく、貶謫された人は、顧みて自ら反省するが善いので、長沮に向つて、渡し場を問ふにも及ばない。次第に年を取つては、新佛に伴ふことを憂へ、歸り來つては、今の世に似合はしからぬ昔の人であることを喜んで居る。さきには、白髯の古りたる御親父の令尹に陪從したこともあつて、その上、貴下の白髮の新なるを見、君の家とは、累世の知り合である。身は、天涯に在つて、首を回らせば、惆悵の思に堪へぬものから、却つて、梅嶺に登つて、天子の居ます楓宸の方を望んで居る。

【餘論】紀昀は「語淺く、意深く、常語にして其奮を覺えず」といつて居る。

青山祇在古城隅。青山、祇だ古城隅に在り、
萬里歸來卜築初。萬里歸り來る、卜築の初。
曾見四山朝鶴駕。かつて見る、四山、鶴駕に朝するを、

【字解】【一】四山　李註に「一統志、龍眠山は桐城縣に在り。又舒州に潛山あり、左慈修煉の處、龍山は天柱山、道書に司元洞天と稱す、漢の武帝、かつて此に登封し、以、

更看三李跨鯨魚。　更に看る、三李、鯨魚に跨るを。
欲從抱朴傳家學。　抱朴より、家學を傳へむと欲す、
應怪中郎得異書。　應に怪むべし、中郎の異書を得たるを。
待我丹成馭風去。　待て我が丹成つて風に馭して去り、
借君瓊珮與霞裾。　君の瓊珮と霞裾とを借るを。

南岳に代ふ。或は、卽ちこの數山を指すなり」とある。【三】三李　王明清の揮麈三錄中に「元祐中、舒州に李亮工といふものあり、文を以て縉紳の間に鳴り、伯時、元中と龍眠の三李と號す。同年、進士に登り、出處相若く、その後、仕、ともに顯

はれず」とある。【四】跨鯨魚　李白が鯨に跨つて仙去したといふので、前に次韻讀杜二の詩中に注して置いた。【四】抱朴　資註に「神異錄、明皇、元洞先生諫議大夫李抱朴に勅し、御頻を賫らして、九天司命の爲に、像を舒州潛山に塑せしむ。はじめて至る、忽ち殿後の石壁裂け、中に泥五色あり、卽ち取つて以て事を竣る、按するに、明皇又送元洞眞人李抱朴詞二司命眞君二の詩あり、今先生引くところは、乃ち舒州の事。通直、姓は李、故に傳三家學」といふ。もし以て葛稚川と爲さば、これを失ふこと遠し」とある。【五】中郎　蔡邕の事、前に和陶答龐參軍、及び廣作薤大夫の詩中に注して置いた。【六】丹成　李白の詩に待吾還丹成、投跡歸此地」とある。又東坡の自註に「僕、むかし、開封の幕となり、先生、赤令たり、暇日、相與に內外の丹を論じ、且つ其丹を出して僕に示す。今、三十年にして、君を龜江に見、同じく南華に游び、山水の間に宿すること數日、書を道うて綦嘆し、且つ我に舒に卜居せむことを勸む、故に詩中、これに及ぶ」とある。

【詩意】青山は、只だ舒州古城の隅に在つて、景色も宜しく、予は萬里の海外より歸り來り、ここに落ち付いて後、地を卜して住居を築造しやうとさへ思つて居る。さうすれば、四方の山山で、仙人が鶴駕に乘じて、天に朝するを見るべく、又李氏の三人が、鯨に騎して登仙する其處をも尋ねることが出來る。君は、李抱朴の後裔として、家學を傳へやうと思つて居るし、予が珍らしいことを話し出すと、古しへの蔡邕の如く、必ず異書を得たに相違ないといつて怪むであらう。予が丹を煉つて成り、將に風に御して去らむとする時は、君から瓊佩と霞裾とを借りて、初めて昇天すべく、決して、無沙汰で往つて仕舞ふ樣なことはないから、安心して、待つて居て貰ひたい。

狄韶州煮蔓菁蘆菔羹　狄韶州、蔓菁蘆菔の羹を煮る

我昔在田間。寒庖有珍烹。　われ、むかし、田間に在り、寒庖に珍烹あり、
常支折脚鼎。自煮花蔓菁。　常に折脚の鼎を支へ、自ら花蔓菁を煮る。
中年失此味。想像如隔生。　中年、この味を失ひ、想像、生を隔つるが如し。
誰知南岳老。解作東坡羹。　誰か知らむ、南岳老、東坡の羹を作るを解せむとは。
中有蘆菔根。尙含曉露清。　中に蘆菔の根あり、なほ曉露の清を含む。
勿語貴公子。從渠嗜羶腥。　貴公子に語る勿れ、渠が羶腥を嗜むに從かせよ。

【字解】【一】折脚鼎　前に贈月長老二の詩中に注して置いた。【二】東坡羹　本集、東坡羹の引に「東坡居士、煮るところの菜羹、魚肉を用ひず、五味、自然の甘あり。その法、菘、もしくは蔓菁、もしくは蘿蔔、もしくは齊を以てし、揉洗して汁を去り、菜を

湯中に下し、生米を入れて、糜となし、少生薑を入れ、油麻を以て之を覆ひ、其上に飯を炊ぐこと、常法の如し、飯熟し、羹亦た糜して食ふべし」とあつて、日本でいへば、雜炊の如きものであらう。【三】 糟糜　二字ともに糜い、卽ち肉食を指す。

【題義】 秋韶州は、前にも見えた韶州の太守秋成。蔓菁は蕪、蘆菔は大根、諸家の註には、本草・埤雅等を引いてあるが、必要がないから、今、すべて略すことにする。この詩は、秋成が蕪・大根の羹を煮て進めたから、大に喜んで作つたのである。

【詩意】 予が昔日田舍に居た時は、貧しき廚にも珍らしい御馳走があつたので、毎毎、脚の折れた鍋を進めて、花の咲きかかつた蕪を煮て食つた。中年の頃は、全く此味を口にせず、これを想像すると、隔生の感がある。しかも、料らざりき、南岳老の秋韶州が、東坡發明の羹を造り出して進めむとは。その中には、大根があつて、依然として、晨の露の涼しげなるを含んで居る。しかし、貴公子輩に語つた處で、仕方がないので、彼等には、唯だ腥羶を食はして置けば、それで宜しい。

【餘論】 紀昀は「淺近」といつて、大にけなして居るが、一應尤もである。

李伯時畫其弟亮工舊隱宅圖

李伯時の畫ける其弟亮工の舊隱宅の圖

樂天早退今安有。

【字解】【一】 樂天　白居易の字、【二】 早退　早く身を退ける。【三】 摩詰　王維の字。【四】 池上竹　白樂天に池上篇があつて、その中に竹を併敍してある。前に竹閣、及び獨樂園の詩中に注して置いた。【五】 輞川圖　輞川は終南山中の勝地、王維は別墅を築いて自ら之を圖した。唐書の本傳に「畫思、神に入り繪工に、以て天機の到るところとなす、學者及ばざるなり、別墅に華子岡・竹湖・竹里館・柳浪・茱萸沜・辛夷塢あり」と記し、國史補に「王維、性を立て致を高くす、宋之問の輞川の別業を得たり、山水絕勝」とある。【六】 陶令　卽ち陶淵明、彭澤の令たりしが故に云ふ。【七】 揚雄　前に和三歐陽少師の詩中に注して置いた。

摩詰長閒古亦無。
五畝自栽池上竹。
十年空看輞川圖。
近聞陶令開三徑。
應許揚雄寄一區。
晚歲與君同活計。
如雲鶩鴨散平湖。

【題義】 輿地紀勝に「飛霞亭は、乃ち李公寅隱居の處、その兄伯時、爲に舊宅の圖を作る、亭は尉署の後に在り」と見ゆ。すると、亮工は、亮功に作るべく、そして、名は公寅である。この詩は、李龍眠が其弟亮功の爲に畫いた舊隱宅の圖に題したのである。

【詩意】 早く退官した白樂天は、すでに仙去して、今は居らぬし、王摩詰の何時でも閒暇なるは、古へと雖も、その例を見ぬ位。樂天は、地上五畝の地に竹を栽る、王維の輞川隱居の圖は、ここに十年

の間、空しく見ただけである。近ごろ聞けば、亮功は、陶令の如く、官を罷めて歸里し、新に庭中に三徑を開いたといふことで、揚雄の如き予が、その傍に一區劃の宅地を寄せることを許すであらう。さうすれば、予が晩年は、君と共に、活計を同じうし、平湖に於て、雲の如く多き鵝鴨を養ひたいと思ふ。

【餘論】　査初白は「領聯、起二句を分承す」といつて居るし、乾隆御批にも之を承けて「池上は樂天の句を承け、輞川は摩詰の句を承け、陶令は李に比し、揚雄は自ら比し、一意直下、舒展自如、これを律詩の神境となす」とある。

東坡居士、過龍光、求大竹、作肩輿、得兩竿、南華珪首座、方受請爲此山長老、乃留一偈院中、須其至、授之、以爲他時語錄中第一問

東坡居士、龍光を過ぎて、大竹を求め、肩輿を作りて、兩竿を得たり。南華の珪首座、方に請を受けて此山の長老となる。乃ち一偈を院中に留め、その至るを須つて之を授け、以て他時語錄中の第一問と爲す

斫得龍光竹兩竿。　斫り得たり、龍光、竹兩竿、

【字解】【一】　龍光　寺の名。

持歸嶺北萬人看。　嶺北に持ち歸らば萬人看む。

竹中一滴曹溪水。　竹中一滴、曹溪の水、

漲起西江十八灘。　漲り起す西江の十八灘。

【一】　十八灘　前に過惶恐灘二の詩中に注して置いた。王註にも「虔州西江に十八灘あり」と見ゆ。

【題義】　東坡居士は、龍光寺を過ぐる時、大きな竹を求めて、肩輿を作らむとして、二竿を得た。折しも、南華寺の珪首座が衆に推されて、この山の長老となりしに因り、一偈を院中に留め、その至るを俟つて、これに授けしめ、仍つて他日語錄中の第一問と爲す積りであるといふので、その偈が、卽ち此詩である。

【詩意】　龍光寺中の竹兩竿を斫り取つたが、その太いことは、又格別で、これを嶺北に持ち歸つたならば、誰でも驚いて看るであらう。その竹筒の中なる一滴曹溪の水が、西江に注ぎ入り、漲つて十八灘とならうとは、誰か臆想すべき。長老の法德洪大なることは、かくの如く、やがて、大に世人を敎化されるであらう。

贈嶺上老人

嶺上老人に贈る

鶴骨霜髯心已灰。　鶴骨霜髯、心、すでに灰、

【字解】【一】　鶴骨　骨格の痩せ

青松合抱手親栽。　青松合抱、手、親ら栽う。
問翁大庾嶺頭住。　翁に問ふ、大庾嶺頭に住む、
曾見南遷幾箇回。　かつて、南遷幾箇か回るを見たる。

【題義】獨醒雜志に「東坡、還つて庾嶺の上に至りて、村舍に少憩す。一老翁あり、出でて從者に問うて曰く、官は誰とか爲す。曰く、蘇尚書。翁曰く、これ蘇子瞻か。曰く是れなり、と。乃ち前んで坡を揖して曰く、われ聞く、人、公を害するもの百端、今日北歸、これ、天、善人を祐くるなり、と。東坡笑つて之に謝し、因つて、一詩を壁間に題す云云」とある。

【詩意】予は、すでに年老いて、骨は鶴の如く瘦せ、髯は霜の樣に白くなり、心は冷灰と成りはてた。ここに立てる一かかへの青松は、さきに通過する時、手づから植ゑたもので、それが、かほど大きくなつたのを見ても、歳月の移り行いたことが分かる。翁に問ふが、年來、ここ大庾嶺頭に住んで居て、南に遷謫された人で、赦されて、北に歸つたものを幾個見たか、予の如きは、蓋し稀なもので、聊か自ら幸とせねばならぬ。

【餘論】乾隆御批には「高朗、青蓮の一體を得たり」とあるが、紀昀は「自ら幸とするの詞、然れども、亦た太だ淺し」といつて、忌憚なく遣ッつけて居る。

たるをいふ。
【二】霜髯　白い天神髯。
【三】合抱　一かかへある。

贈嶺上梅　嶺上の梅に贈る

梅花開盡百花開。　梅花、開き盡して百花開き、
過盡行人君不來。　行人を過ぎ盡して、君來らず。
不趁青梅嘗煮酒。　青梅を趁うて、煮酒を嘗めず、
要看細雨熟黃梅。　看るを要す、細雨の黃梅を熟するを。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】梅花開き盡し、春も稍や闌になつて、百花が亂れ開いた。その時、旅客が行き盡しても、君のみは、ひとり來なかつたが、今ごろに成つて、やッと御出になつた。君は、ここに青い梅の實を探がして、沸かした酒を嘗めやうともせず、細雨の中に、梅の實の黃に熟するを看て居られる。

【餘論】題して「嶺上の梅に贈る」といふものの、實は、嶺上の梅に代つて、言を立てた樣に成つて居る。

余昔過嶺而南、題詩龍泉鐘上、今復過而北、次前韻

余、むかし、嶺を過ぎて南し、詩を龍泉の鐘上に題す、今復た過ぎて北し、前韻

に次す

秋風卷黃落。朝雨洗綠淨。
人貪歸路好。節近中原正。
下嶺獨徐行。艱險未敢忘。
遙知叔孫子。已致魯諸生。

【字解】【一】卷黃　黃は黃葉。【二】洗綠　綠は綠葉。【三】叔孫子　漢書に「叔孫通、博士となり、上に說いて曰く、臣、願はくは、魯の諸生と臣の弟子とを召して、ともに朝儀を起さむ、と。ここに於て、通、魯の諸生三十餘人を徵さしむ。魯に兩生あり、行くを肯んぜず、云云。通、笑つて曰く、若は眞に鄙儒、時變を知らず、と。遂に徵するところの三十人と西す」とある。

【通義】査註に「龍泉は失考。志を案ずるに、大庾嶺の支を南源といふ、飛泉百丈、下に龍湫潭あり、深さ測るべからず。寺あり、雲封といふ。唐、庾山院と名づけ、俗、挂角寺と名づく。六祖大鑒禪師の塔あり。左に卓錫泉あり。疑ふらくは、卽ち龍泉ならむ」とある。題の意味は、予、さきに嶺を越えて南方に向つた時、詩を龍泉の附近なる寺の鐘の上に題した。今、再び此地を過ぎて、北歸するに際し、前韻に次して、この詩を作つたといふのである。

【詩意】秋風は颯として、黃ばんだ木の葉を捲いて吹き落したが、朝に成つて見ると、雨は常綠樹を洗うて淨く、まことに好い景色。人は、歸路を急ぐも好かるべく、中原に近づくに從つて、節物は、平正に成つて來る。嶺を下つて獨り徐行し、山中の艱險は、忘れられない位。今しも、叔孫通の樣な人が召し出され、元祐の黨人を起用して、新に禮儀を定めるといふが、予の如きは、當時の兩生の如く、全く除外されて居る。

【餘論】李註に「案ずるに、陸游の序に云ふ、建中の初、韓晉二相、政を得、盡く元祐の人を收用し、その召さざるものも、亦た大藩に補す。惟だ東坡兄弟、なほ宮祠を領す、末句、蓋し謂はゆる致す能はざるところの二人に寓す、意深くして語緩なり」とあつて、大に參考になる。それから乾隆御批には「刻意斵削、節短くして味長し」とあり、紀昀が「古韻を用ふ」といつたのは、中原正の正の字を指したのである。

過嶺、二首

嶺を過ぐ　二首

暫著南冠不到頭。
却隨北雁與歸休。
平生不作兎三窟。

しばらく、南冠を著くるも、頭に到らず、
却つて北雁に隨つて、ともに歸休。
平生、作さず兎三窟、

【字解】【一】南冠　鍾儀の故事、左傳に見えて、前に與二文郎一飲レ酒の詩中に注して置いた。【二】兎三窟　戰國策に「馮驩、孟嘗君に謂つて曰

今古何殊貉一邱。
當日無人送臨賀。
至今有廟祀潮州。
劍關西望七千里。
乘興眞爲玉局游。

今古、何ぞ殊ならむ貉一邱。
當日、人の臨賀を送るなく、
今に至つて、廟あり、潮州を祀る。
劍閣、西に望む七千里、
興に乘じて、眞に玉局の游を爲す。

て候するものなし。ひとり、徐晦、藍田に至つて慰餞す。宰相權德輿、謂つて曰く、君、臨賀を送る、まことに厚し、乃ち果を爲すなからむや。晦曰く、布衣の時に方つて、臨賀、われを知る。今、遽に棄つるに忍びむや。もし、公、異時、姦邪に謫斥せらるれば、又會るべけむや、と。德輿、その直を歎じて、これを朝に薦す。李夷簡、遽に奏して監察御史となす。曰く、君、楊臨賀に負かず、青て國に負かむや」とある。【六】潮州　韓愈が潮州に貶せられ、惠政ありしに因り、潮人、これが爲に廟を立て、東坡は盲て其記を作つた。【八】劍閣　元和郡縣志に「小劍の故城は、利州益昌縣の西南五十一里に在り、大劍の戍を去ること四十里、連山通衢、これを劍閣道といふ、縣の西南より小山を踰えて大劍口に入る、卽ち、秦、張儀・司馬錯をして蜀を伐たしめしとき、由るところの路なり、亦た之を石牛道といふ」とある。【七】玉局　觀の名、成都城南柳陰に在る。東坡は、この觀の提舉に任ぜられた。

【題義】　說明に及ばぬ。

【詩意】　しばらく、南冠を戴きしものから、すッぽり頭までは入らず、却つて、北地に歸る雁に隨ひ、罪を赦されて歸休することに成つた。平生、まさかの時の用意として、狡兎が三窟を穿つが如き事を爲さず、達觀すれば、今古は、おしなべて、一邱の貉に過ぎぬ。むかし楊憑が臨賀の尉に貶せられた時、徐晦が獨り之を送つて、その直を嘆賞されたが、予が曩に南遷された時は、かかる人だになく、韓愈は、潮州に左遷されて、後には其地に祀られたといふが、予も亦た此の如くならむことを希望する。故國なる劍閣は、ここより西に七千里を隔てて居るが、やがて、興に乘じて、本當に成都なる玉局觀に游ぶこともあらうと思ふ。

【餘論】　紀昀は「五六、自ら好し、然れども、宜しく自ら況すべからず」といつて居る。

七年來往我何堪。
又試曹溪一勺甘。
夢裏似曾遷海外。
醉中不覺到江南。
波生濯足鳴空澗。
霧繞征衣滴翠嵐。
誰遣山雞忽驚起。

七年來往、われ何ぞ堪へむ、
又試む、曹溪、一勺の甘きを。
夢裏、かつて海外に遷るに似たり、
醉中、覺えず、江南に到る。
波は、濯足に生じて空澗に鳴り、
霧は、征衣を繞つて翠嵐を滴る。
誰か、山雞をして忽ち驚起せしむ、

【字解】【一】七年　年譜を見ると、東坡は、紹聖元年を以て定州より惠州に貶せられ、凡そ四年にして、再び惠州に貶せられ、明年、元符と改元、乃ち廉州に量移したから、計七年になる。
【二】江南　卽ち廉州。

く、狡兎、三窟あり、わづかに其死を免るゝを得るのみ」とある。【三】貉一邱　漢書に「楊惲曰く、秦時、但だ小臣に任じ、竟に以て滅亡す、大臣を親任せしめば、卽ち今に至らんのみ。古しへと今と、一邱の貉の如し」とある。【四】臨賀　唐書に「楊憑、臨賀の尉に貶せらる。姻友、往いて候するものなし。ひとり、徐晦、藍田に至つて慰餞す。宰相權德輿、謂つて曰く、君、臨賀を送る、まことに厚し、乃ち果を爲すなからむや。晦曰く、布衣の時に方つて、臨賀、われを知る。今、遽に棄つるに忍びむや。もし、公、異時、姦邪に謫斥せらるれば、又會るべけむや、と。德輿、その直を歎じて、これを朝に薦す。李夷簡、遽に奏して監察御史となす。曰く、君、楊臨賀に負かず、青て國に負かむや」とある。【六】潮州　韓愈が潮州に貶せられ、惠政ありしに因り、潮人、これが爲に廟を立て、東坡は盲て其記を作つた。【八】劍閣　元和郡縣志に「小劍の故城は、利州益昌縣の西南五十一里に在り、大劍の戍を去ること四十里、連山通衢、これを劍閣道といふ、縣の西南より小山を踰えて大劍口に入る、卽ち、秦、張儀・司馬錯をして蜀を伐たしめしとき、由るところの路なり、亦た之を石牛道といふ」とある。【七】玉局　觀の名、成都城南柳陰に在る。東坡は、この觀の提舉に任ぜられた。

半巖花雨落毿毿。　半巖の花雨、落ちて毿毿。

【詩意】七年の久しい間、南北に來往して、老年の身には、まことに堪へられないが、その間、曹溪の本山に參詣して、一勺の甘きを味つたことがある。かつて、海外に遷謫されたことは、まるで夢裏の如く、今や、醉中、知らず識らずの間に、虔州に到著した。空澗の水に足を濯へば、波が湧いて鳴り出し、霧は旅衣を繞つて、翠嵐滴るが如く、はては、しとどに濡れて仕舞ふ。誰か知らぬが、水鏡に妝ふ例の山雞を驚かして起たしめたものと見え、巖半の花は、毿毿として、雨の如く降り注いだ。

【餘論】乾隆御批に「遷謫を視ること、猶ほ醉夢中の若し、その胸中、別に澄定のもの在るを知る」とあり、次に紀昀が「結、機心、すでに盡き、必ずしも相猜まざるの意を言ふ、寫景に非ざるなり」といつたのは、頗る發明するところがある。

過嶺寄子由

投章獻策謾多談。　章を投じ、策を獻じて謾に多談、
能雪寃忠死亦甘。　能く寃忠を雪がば、死も亦た甘んず。

一片丹心天日下。　一片の丹心、天日の下、
數行清淚嶺雲南。　數行の清淚、嶺雲の南。
光榮歸珮呈佳瑞。　光榮歸珮、佳瑞を呈し、
瘴癘幽居弄晚嵐。　瘴癘幽居、晚嵐を弄す。
從此西風庾梅謝。　これより、西風、庾梅謝す、
却迎誰與馬毿毿。　却迎、誰と與にか馬毿毿。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】かつて、文章を投じ、策略を獻じ、いたづらに、言ひ草のみ多く、その爲に禍を得たのであるが、苟くも、あくまで忠心を失はぬといふ樣に、寃罪を雪ぎ清められたならば、いつ死んでも善いと思ふ。一片の丹心は、耿耿として、天日の下に輝きわたり、數行の清淚は、嶺雲の南に降り注ぐ。今日北歸するに就いて、劍佩は、光榮の爲に佳瑞を呈し、瘴癘に鎖された幽居は、日暮に山氣に弄せられて、最早見えなく成つて仕舞つた。これより西風吹きすさび、大庾嶺上の梅の木も、葉が落ち盡す頃になるので、誰が毿毿たる馬を竝べて送迎するか、さすがに、邊僻の寂しさ、自然感慨を免れぬ次第である。

蘇東坡詩集　卷四十五

古今體詩　四十二首

留題顯聖寺

顯聖寺に留題す

渺渺疏林集晩鴉。
渺渺たる疏林、晩鴉集まる、
孤村煙火梵王家。
孤村の煙火、梵王の家。
幽人自種千頭橘。
幽人、自ら種う、千頭の橘、
遠客來尋百結花。
遠客、來り尋ぬ、百結の花。
浮石已乾霜後水。
浮石、すでに乾く、霜後の水、
焦坑問試雨前茶。
焦坑、問に試む、雨前の茶。
祇疑歸夢西南去。
祇だ疑ふ、歸夢、西南に去り、
翠竹江村繞白沙。
翠竹江村、白沙を繞る。

【字解】【一】百結花　丁香を云ふ。【二】浮石　名勝志に「浮石は、南安府南康縣西を去ること三十里、形、覆鐘の如く、水、その外を環り、上游の勝概たり、唐の顯聖院あり」とある。【三】焦坑　名勝志に「焦溪は、南康縣西三十五里に在り、源、鍋坑に出で、浮石に至つて章水に入る」とある。【四】雨前　穀雨の前。

【題義】 說明に及ばぬ。顯聖寺は、字解の中に注して置いた。

【詩意】 渺渺たる疏林には、晩鴉がとまり、孤村に煙火の上るのは、卽ち寺である。幽人たる予は、ここに千頭の橘を植ゑやうと思ふが、遠客は、丁香の花を珍らしげに尋ねるであらう。名だたる浮石は、霜後、水、すでに乾き、焦坑では、追追、穀雨の前に當つて、茶を摘むであらう。唯だ歸夢が、反對に西南に向つて去り、翠竹の白沙を繞れる江村に向ふのは、まことに不思議で、つまり、この地の風景が好いからであらう。

予初謫嶺南、過田氏水閣、東南一峯、豐下銳上、里人謂之雞籠山、予更名獨秀峯、今復過之、戲留一絕

予、はじめ嶺南に謫せられ、田氏の水閣を過ぐ。東南一峯、豐下銳上、里人、これを雞籠山と謂ふ。予は更めて獨秀峯と名づく。今復た之を過ぎ、戲に一絕を留む

倚天巉絕玉浮圖。　天に倚つて巉絕たり、玉浮圖、
肯與彭郎作小姑。　肯て彭郎と小姑たらむや。
獨秀江南知有意。　獨り江南に秀づる、意あるを知る、

【字解】 【一】 浮圖　卽ち塔、その峰を喩へて云ふ。 【三】 彭郎　王註に「按遺、江南に兩山あり、孤迥、江中に出づ、古しへ傳へて二孤となす、後人、これを訛し、卽ち大なるものを以て大姑となし、小なるものを以て小姑となし、詞を立て、婦人の名を以て之に配す。洞庭の下に洲あり、風濤、これに激すれば、隱隱として聲あり、古しへ、傳へて猛湖蠻となし、後の訛するものは彭郎磯といふ。又以て小姑の塔となすなり」とある。 【三】 二別　大別山と小別山。 【四】 三壺　海中の三山、卽ち蓬萊・方丈・瀛洲。

【題義】 南安志に「南康縣治の東七十歩に蘇歩坊あり、蘇子瞻、南遷して此を經へ、田如鼇の六經堂を過ぎ、留題、因つて名づく。坊側に井あり、深くして冽、石底、盤の如し、九竅あり、泉、中より湧き出づ」とあり、又「獨秀峰は、縣の東南二十里に在り、俗、雞籠と名づく、山下に龍湫あり」と見ゆ。題の意味は――予、はじめ、嶺南に謫せられしとき、田如鼇の水閣、六經堂を訪うた。そこで眺めると、東南の一峰、下が膨れ、上が銳く削つた樣で、里人は、これを雞籠と稱したが、予は、改めて獨秀峰と名づけた。今再び水閣を過ぎしに因り、戲に一絕を題したといふのである。

【詩意】 雞籠山は、塔の如く嶄然屹立、天に倚つて巉絕の勢を爲して居て、たとひ、彭郎の如きものがあつたとて、これに配して小姑となることを諾すべきか。ここに江南に在つて、獨り秀でて居るのは、大に意味あることで、二別に加へて三となし、三山に加へて四となさむとする積りであらう。

【餘論】 査註に「案ずるに、燕丹子に云ふ、高きこと、三王を四にし、下、五伯を六にせしめむと欲す、と。困學紀聞に云ふ、三墳を四にし、五典を六にし、二曜を三にし、五緯を六にすと。先生、こ

要二三二別四三壺。　二別を三にし、三壺を四にするを要す。

の詩の結句、正に此解に同じ」とあり、紀昀も亦た「これ五帝を六にし、三王を四にすの語より化して來る。然れども、詩に入つて、句法を成さず」といつて居る。

寄題潭州徐氏春暉亭

潭州徐氏の春暉亭に寄題す

瞳瞳曉日上三竿。　瞳瞳たる曉日、三竿上る、
客向東風競倚欄。　客は東風に向つて、競うて欄に倚る。
穿竹鳥聲驚步武。　竹を穿つの鳥聲、步武に驚き、
入簷花影落杯盤。　簷に入るの花影、杯盤に落つ。
勿嫌步月臨元圃。　嫌ふ勿れ、月に步して元圃に臨むを、
冷笑乘槎向海灘。　冷笑す、槎に乘じて海灘に向ふを。
勝概直應吟不盡。　勝概、直に應に吟じて盡さざるべし、
憑君寄與畫圖看。　君に憑つて、畫圖に寄與して看む。

【語義】　說明に及ばぬ。但し、春暉亭は、諸家の註に見えぬから、しばらく之を缺く外はない。

【詩意】　瞳瞳たる朝日が、三竿の高さに上り、春風徐に吹き度る時、ここ亭上の欄干に倚つて眺めやる心地よさ。鳥の聲は、竹を穿つて聞こえ、さながら人の近きに在るを知つて驚くが如く、花の影は、簷にまで入つて、杯盤にさへ映つて見える。ここに居れば、月に步して、玉を產する元圃の地を見下すが如く、舟に乘つて、海灘に乘り出す必要もない。その勝概は、なかなか、一寸の間に吟し盡すことが出來ぬから、君に依賴して、畫圖の中に寄せて、巧に寫して貰ひたいと思ふ。

【餘論】　紀昀は「步武の字、腐」といつて居る。

【字解】　〔一〕步武　國語に「步武尺寸の間に過ぎず」とあつて、わづかなる距離。

〔二〕元圃　晉書陸機傳に「葛洪、書を著し、機の文を稱す、猶ほ元圃の積玉、夜光に非ざるはなきがごとし」とあつて、卽ち玉が產する仙境。

乞數珠贈南禪湜老

數珠を乞うて南禪の湜老に贈る

從君覓數珠。老境仗消遣。　君に從つて數珠を覓む、老境、仗つて消遣せむ。
未能轉千佛。且從千佛轉。　未だ千佛を轉ずる能はず、且つ千佛に從つて轉ず。
儒生推變化。乾策數大衍。　儒生、變化を推し、乾策、大衍を數ふ。
道士守玄牝。龍虎看舒卷。　道士、玄牝を守り、龍虎、舒卷を看る。
我老安能爲。萬劫付一喘。　われ老いて、安んぞ能く爲さむ、萬劫、一喘に付す。
嘿坐閱塵界。往來八十反。　嘿坐、塵界を閱し、往來、八十反。

區區我所寄。蹙縮蠶在繭。　區區、わが寄するところ、蹙縮、蠶、繭に在り。
適從海上回。蓬萊又清淺。　適ま海上より回れば、蓬萊又清淺。

【字解】【一】且從千佛轉　傳燈錄に「法達禪師、法華經を誦して、三千部に及ぶ。六祖曰く、心迷へば法華轉じ、心悟れば法華を轉ず」とあり、翻譯名義に「佛の心中化他の法を轉じ、度して他心に入る、轉法輪と名づく」とある。【二】大衍　王註に「易、大衍の數五十、其れ四十九を用ひよ。又曰く、凡そ天地の數五十有五、これ變化を成して鬼神を行る所以なり」とある。【三】玄牝　老子に見ゆ、宇宙の本體を云ふ。前に贈三黃山人一の詩中に注して置いた。【四】龍虎　王註に「金晶論、夫れ龍虎は金木なり、金を虎となし、木を龍となす、虎の異名は眞鉛、金水なり、龍の異名は眞汞、木火なり」とある。【五】萬劫　未來永劫の義、前に登三常山一及び送三邵道士一の詩中に注して置いた。【六】八十反　王註に「釋氏の書、大劫小劫あり、饑饉・疾疫・刀兵の增減の如きは、これ皆小劫の異名、二十增減を統べて一住劫となし、これを中劫と名づくと。又、成壞空劫あり、皆中劫なり、時量各二十增減を經、住劫と等し。この成住壞空の短長の量を統べて、八十增減を經、一大劫と名づく」とあり、法苑珠林に「一壞二空三成四住、この四時中、各二十小劫に分ち、すべて八十小劫となし、始めて、一大水火劫となす」とある。【七】蓬萊又清淺　前に留二題仙都觀一の詩中に注して置いた。

【題義】本集に虔州崇慶院藏經記序といふ一文があつて、その中に「湜長老、寺を南禪に剏建す、卽ち崇慶なり」とあつて、亦た廉泉院と稱して居る。湜老は、本卷清隱老の下に詳しく注することにする。この詩は、數珠が欲しいといつて、南禪寺なる湜長老に贈つたのである。

【詩意】君に向つて數珠を求め、それに依つて、老境の閒暇を消遣したいと思ふ。もとより、悟り切らぬ心には、千佛を轉ずること能はず、しばらく、千佛に轉せられ、つまり、自力とは行かぬから、他力に依る外はない。儒生は、變化の理を推算し、易の象數を以て、大衍五十の數を算出し、道士は、玄牝と號する宇宙の本體を守り、龍虎金木の法を以て仙丹を調合する。われは、年を取つて、兩つながら之を能くせず、未來永劫を以て、一呼吸に付し、默坐して、この塵界の推移を觀じ、八十增減を經て大劫になることを知つて居る。區區として、わが心を寄せるのは、主として、この點に在るので、たとへば、蠶が身を縮めて、繭の中に潛んで居る樣なものである。今しも、適ま海上から歸つて來たが、蓬萊の水でさへ、淸淺になる位で、有爲轉變の到底免れぬ上は、佛道に歸依して、安心立命を求める外はない。

【餘論】紀昀は「太だ剽なり」といつて居る。

鬱孤臺

吾生如寄耳。贛海亦閒游。　吾が生、寄の如きのみ、贛海、亦た閒游。
贛石三百里。寒江尺五流。　贛石、三百里、寒江、尺五流る。
楚山微有霰。越瘴久無秋。　楚山、微に霰あり、越瘴、久しく秋なし。
望斷橫雲嶠。魂飛咤雪洲。　望は斷ゆ、雲に橫ふの嶠、魂は飛ぶ、雪を咤るの洲。

曉鐘時出寺、暮鼓各鳴樓。　曉鐘、時に寺を出で、暮鼓、各樓に鳴る。
歸路迷千嶂、勞生閱百州。　歸路、千嶂に迷ひ、勞生、百州を閲す。
不隨猿鶴化、甘作賈胡留。　猿鶴に隨つて化せず、甘んじて、賈胡となつて留まる。
祇有貂裘在、猶堪買釣舟。　祇だ貂裘の在るあり、猶ほ釣舟を買ふに堪へたり。

【字解】【一】贛海　五嶺と南海。【二】贛石　虔州志に「贛州の水は、府城の北、章貢二水の會處に在り、北流して萬安縣に至る、その間に九灘あり、上水の信豐寧都の如きは、石磧尤も險なり、故に、俗、上下三百里贛石と稱す」とある。【三】尺五流　五註本に「その窄きを言ふのみ」とある。【四】久無秋　馮應榴の案に「詩、天暖に、涼秋の氣候なきを言ふなり」とある。【五】橫嶠　蕭穆に「山峻くして高きを嶠といふ」とある、即ち五嶺をいふ。【六】陀雪洲　陀はほこる、珍らしがる、これは、瑰麗豊萬の四州を言ふ。賈捐之傳に「儋耳珠崖、皆南方海中に在り、洲は南蠻の地に居り、炎瘴にして雪なし、雪あらば、以て奢侈となすなり」とある。【七】猿鶴　抱朴子に「周の穆王南征し、久しうして歸らず、一軍皆化し、君子は猿鶴となり、小人は蟲沙となる」とある。【八】賈胡　商賈をする外國人。【九】貂裘　戰國策に「蘇秦、黑貂裘を衣て出游し、數歲、大に困んで歸る」とある。

【題義】鬱孤臺は、前にも見えて居た。東坡の自註に「再び虔州を過ぎて、前韻に和す」とある。

【詩意】わが一生は、この世に寄寓して居るに過ぎず、五嶺南海の遠きも、亦た閒游を爲した。贛石上下三百里の險は、他に其比なく、狹い寒江は、勢すさまじく流れて居る。楚山には、少しく霰が降つて、雪模糊であるが、越地は、依然暖く、瘴氣吹き滿ちて、全く涼秋の氣候がない。五嶺は、さかしき山が雲に橫はつて、望將に斷たむとし、雪を珍らしがる瓊・崖・儋・萬の地に向つて、魂を飛ばす次第である。曉の鐘は、寺を出でて響くが、暮の鼓は、各樓上に鳴つて居る。わが北歸の路は、千嶂の間に迷ひ、從來、この生を勞して、諸州を歷めぐり、しかも、なほ猿鶴と共に仙せず、甘んじて行商の外國人の樣な氣がして、此に留まつて居る。唯だ、むかしの儘の貂裘が殘つて居るから、釣舟を買つて、これから、世外に優游したいと思つて居る。

【餘論】乾隆御批に「深穩の至、彌よ出でて清新」といひ、「吾生如寄耳の一句、集中、屢ばその橫溢を見る、もとより此に屑屑たらざるなり」とある。

虔守霍大夫、監郡許朝奉見和、復次前韻

虔守霍大夫、監郡許朝奉、和せらる、復た前韻に次す

大邦安靜治、小院得閒游。　大邦、靜治に安んじ、小院、閒游を得たり。
贛水雨已漲、廉泉春未流。　贛水、雨、すでに漲り、廉泉、春、未だ流れず。
同烹貢茗雪、一洗瘴茅秋。　同じく、貢茗の雪を烹て、一洗せむ瘴茅の秋。
秋思生蓴鱠、寒衣待橘洲。　秋思、蓴鱠に生じ、寒衣、橘洲を待つ。
揚雄未有宅、王粲且登樓。　揚雄、未だ宅あらず、王粲、且つ樓に登る。

老景無多日。歸心夢幾州。　老景、多日なく、歸心、幾州を夢む。
敢因逃酒去。端爲和詩留。　敢て酒を逃るるに因つて去らむや、端に詩に和するが爲に留まる。
舊餞藏新語。清風自滿舟。　舊餞、新語を藏し、清風、自ら舟に滿つ。

【字解】【一】貢茗雪　產地から貢獻した名茶を雪水で沸かす。【二】療茅　黃茅瘴といつて秋時の毒熱をいふ。【三】揚雄　前に和二歐陽少師一の詩中に注して置いた。【四】王粲　前に二公再和の詩中に注して置いた。【五】老景　老境に同じ。【六】逃酒　酒席から逃れ出る、漢書に「劉章、高后の爲に酒を行る、諸呂の一人、酒を亡ぐ」とある。【七】新語　寄せられた新作。

【題義】虔州志に「霍漢英、字は子倖、紹聖間、虔州に知たり。許監郡の名、失考」とあり、馮應榴の案に「霍子倖、竝に先生が錢濟明・蘇伯固に答ふる尺牘中に見ゆ。又淸波雜志に云ふ、淮西の憲臣霍漢英、奏して、天下、蘇軾撰するところの碑刻、竝に一例除毀すべきを乞ふ。詔して之に從ふ。時に崇寧三年なり、と。これに據れば、漢英、淮西より虔に移り、先生の赦され歸りしを見て、復た詩を和して好を修す、眞に取るに足らず」とある。この詩は、虔州太守霍大夫及び監郡朝奉郎許某が共に予の詩に和して贈られたから、再び前韻に次して之に酬いたといふのである。

【詩意】大邦は、靜平の治に安んじて、四境無事なるが故に、二君は、小院中に引き籠つて、閒游することが出來る。折から、贛江の水は、雨の爲に既に漲り、廉泉は、方に涸れ盡し、春を待つて、まだ流れない。一緒に、貢茶を雪水に和して沸かし、秋の名殘たる黃茅瘴の毒熱を一洗したいと思ふ。秋思は、故國の蓴羹鱸鱠を思ふに因つて生じ、寒衣は、柑橘の洲上に熟するを待つて、はじめて著けやう。揚雄は、貧にして未だ宅あらず、王粲は、客中、しばらく樓に登つて、遠望を事として居る。予は、老境に臨んで、剩すところ、多日なく、心に北歸を急ぐ爲に、幾つかの州を夢に見る。予は、決して酒を逃れて去るのではないが、君の詩に和する爲に、此に留まつて居る。持ち古したる篋中には、君の新詩を入れ、その爲に、淸風が自然、舟に滿つるが如く感ぜられた。

贈虔州術士謝晉臣

虔州の術士謝晉臣に贈る

屬國新從海外歸。　屬國、新に海外より歸る、
君平且莫下簾帷。　君平、且つ簾帷を下す莫れ。
前生恐是盧行者。　前生、恐らくは是れ盧行者、
後學過呼韓退之。　後學、過つて呼ぶ韓退之。
死後人傳戒定慧。　死後、人は傳ふ戒定慧、
生時宿直斗牛箕。　生時、宿は直る斗牛箕。

【字解】【一】屬國　蘇武が匈奴より漢に歸りし後、典屬國に任ぜられた。【二】君平　嚴遵の字　成都に居て賣卜を業として居た、前に和二陶雜詩一の詩中に注して置いた。【三】盧行者　高僧傳に「慧能、姓は盧氏、韶陽に往いて劉志略に遇ふ。劉に姑あり、恆に涅槃經を讀む。能、これを聽き、卽ち尼の爲に中義を解

憑君爲算行年看。　君に憑る、爲に行年を算して看よ、
便數生時至死時。　便ち生時を數へて、死時に至る。

見、問うて曰く、卽心卽佛、願はくは指喩を垂れよ。師云ふ、音が傳々聽け、曰く、卽心是と名づく、卽佛は乃ち定、定慧等持、章中清澄と。蓋し佛氏、戒は定を生じ、定は慧を生ずるを謂ふなり」とある。【五】宿直　星が位置する。【六】斗牛箕　前に次三韻注に注して置いた。又王註に「先生、蓋し自ら謂ふ、生時、退之と相似たりと。蓋し、命宮、斗門に在り、而して、身宮、亦た在ればなり。事は、本集に見ゆ」とある。【七】行年　生涯の年。

【題意】　說明に及ばぬ、但し、謝晉臣は失考。

【詩意】　身は蘇武の如く、新に海外より都に歸らうとして居る折から、嚴君平に比すべき君に問ひたいことがあるから、しばらく、籠帷を下さずに置いて呉れろ。予の前生は、多分、盧行者でもあらうか。そして、後學の者は、過つて韓退之の樣だといつて居る。されば、佛道は悟入し、死後には、人をして、戒より定、定より慧と、次第に進境があつて、まことに偉らいといはしめる樣にしたく、生まれた時の星は、斗牛箕の間に當り、その出處進退、頗る退之と相類して居る。君に依賴するが、わが爲に、行年いくつまで生きられるかを算し、從つて、出生の時より死去の時に至るまでの事を數へ立てて、篇と話して貰ひたい。

【餘論】　前聯は、すでに答周循州の詩中に見え、唯だ一字違ふだけである。査初白は「この詩、五析す、尼、深く爲に歎服し、敬して行者となす」とある。【四】戒定慧　傳燈錄に「法海禪師、はじめて六祖を

六の聯、三四兩句を分承し、末一句又五六を總結す、章法遒緊」といつて居る。

虔州景德寺榮師湛然堂　虔州景德寺榮師の湛然堂

卓然精明念不起。　卓然精明、念、起らず、
兀然灰槁照不滅。　兀然灰槁、照、滅せず。
方定之時慧在定。　定の時に方つて、慧、定に在り、
定慧照寂非兩法。　定慧照寂、兩法に非ず。
妙湛總持不動尊。　妙湛、總持、不動、尊し、
默然眞入不二門。　默然、眞に入る不二の門。
語息則默非對語。　語、息めば默す、對語に非ず、
此話要將周易論。　この話、周易と論ずるを要す。
諸方人人把雷電。　諸方の人人、雷電を把り、
不容細看眞頭面。　容さず、細に、眞頭面を看るを。

【字解】〔一〕精明　楞嚴經に、「妙精明心」とあり、又「精明卽妙」とある、悟り澄ました心を形容して云ふ。〔二〕灰槁　灰の如く冷かに枯れる。〔三〕方定之時　定慧は前詩の戒定慧にも注して置いた。〔四〕妙湛　楞嚴經の註に「妙湛は眞諦般若德を贊するなり、總持は俗諦解脫德を贊するなり、不動は中諦法身德を贊するなり、卽ち三にして一、故に妙湛といふ。卽ち一にして三、故に總持といふ。三に非ず、一に非ず、故に不動といふ」とある。【五】不二門　佛敎の奧旨、前に維摩像の詩中に注して置いた。【六】周易論

欲知妙湛與總持。知らむと欲す、妙湛と總持とを、
更問江東三語掾。更に問へ、江東の三語掾。

王註に「蓋し、聖登すれば語となり、聖止めば默となる、語る者終に默せざるに非ず、默する者終に語らざるに非ず、この二者は本と相對せざるなり」とある。【八】三語掾　阮瞻の事、前に次韻道潛留別二の詩中に注して置いた。【七】把雷電　五註本に「各一その權を授にするを言ふなり、禪家、掣電の機といふは、是れのみ」とある。

【題義】　查註に「輿地紀勝、景德寺は、劉宋建つ、舊と安天と名づく、虔州府治の東南隅に在り、地勢夷曠、城南の山水を瞰覽す、梵宇壯麗、間を以て計るもの二千六百、佛像萬餘。黃山谷の詩、城東寶坊金碧重は、卽ち此なり。虔州志に謂ふ、唐の德宗貞元三年に建つ、と。未だ詳にせざるところ」とある。榮師は失考。この詩は、虔州景德寺の中で、榮師の居る湛然堂に題したのである。

【詩意】　悟り澄ました後は、卓然精明、すこしの念慮だに起らず、又兀然として灰の如く枯れ切つてからは、光明照耀し、決して消えることなく、榮師の精神狀態は、卽ち此の如くである。その入定を爲す時に當つて、慧は、早くも定中に生じて、意中、淸淨となるので、定と慧、照と寂とは、ともに修練する過程と其極致とであるから、全く同一と稱すべく、斷じて、兩法ではない。次に、妙湛といひ、總持といひ、不動といひ、その尊きこと、限りなく、默然として不二の法門に突入するのである。元來、語止めば默、語と默とは、互に聯關して居るもので、相對的の者ではなく、この事は、周易の原理と共に詳論する必要がある。諸方の人人は、雷電を把つて照らし見、それで、この域に到達しやうと思ひ、眞正の頭面を精細に見るといふ根氣が無いから、到底、その目的を達することが出來ぬ。そこで、この手合にして、妙湛といひ、總持といふ其意義を知らうと思ふならば、さし向、かの淸談を以て知られ、晉代の三語掾と稱せられし阮瞻輩に問ふ外なかるべく、その根柢が誤つて居ると、正當の結果は得られない。

【餘論】　紀昀は「眞に是れ偈呪」といつて居る。この邊の詩は、すべて東坡晩年の作に係り、御本人は、餘程悟り切つた積りであらうが、果して、如何なものか。それに、古今の註家は、佛理に懵いから、箋釋も到底不十分であるし、譯解者に於ては猶更の事であるから、先づ大抵にして片づける外はない。

次韻陽行先

陽行先に次韻す

室空惟法喜。心定有天游。
室は空しく惟だ法喜、心定まつて天游あり。

摩詰原無病。須洹不入流。
摩詰、もと病なく、須洹、流に入らず。

若嫌尋直枉。坐待寸田秋。
もし直枉を尋ぬるを嫌はば、坐して待たむ寸田の秋。

雖未麒麟閣。已逃鸚鵡洲。
未だ麒麟閣ならずと雖も、すでに逃る鸚鵡の洲。

酒醒風動竹。夢斷月窺樓。酒醒めて、風、竹を動かし、夢斷えて、月、樓を窺ふ。
衆謂元德秀。自稱陽道州。衆は謂ふ元德秀、自ら稱す陽道州。
拔葵終相魯。避穀會封留。葵を拔いて終に魯に相たり、穀を避けて會ず留に封せら
用舍俱無礙。飄然不繫舟。用舍、ともに礙なく、飄然たり繫がざるの舟。れむ。

【字解】【一】法喜　妙法を悟り得たる喜悅。【二】摩詰　維摩經に「維摩詰言ふ、我が此病の如きは、眞に非ず、有に非ず」とある。【三】須洹　金剛經に「須陀洹、名づけて入流となす、しかも、實は入るところなし」とあり、その註に「須陀洹、ここに、入流、果證を得るものと翻す。入流を約して說く、卽ち八聖道の流に入るなり」とある。【四】麒麟閣　漢書蘇武傳に「廿餘三年、單于入朝す、帝、殿獄の良を思うて、乃ち其人を麒麟閣に圖畫す」とある。【五】鸜鵒洲　禰衡が黃祖に殺された處、前に萩浦の詩中に注して置いた。【六】元德秀　唐書に「字は紫芝、母亡ぶ、親在つて娶るに及ばざりしを以て、肯て婚せず。人以て嗣を絕つべからずとなすや、答へて曰く、兄に子あり、先人祀らるるを得、吾、何ぞ娶らむ」とあり、田汝成の西湖志餘に「陽行先、平生娶らず、東坡、直に其室に遣り、かつて元德秀を以て之を呼ぶ。居士曰く、某は卽ち陽城の裔と。故に坡詩、衆謂元德秀、自稱陽道州と。皆その妻なきを謂ふなり」とある。【七】陽道州　唐書に「陽城、字は亢宗、道州刺史となる」とある。【八】拔葵　史記に「公儀休、魯の相たり、葵を食うて美なり、その園葵を拔いて之を棄つ」とある。【九】封留　漢書張良傳に「漢、功臣を封ず。帝曰く、籌策を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは、子房の功なり、と。自ら齊の三萬戶を擇ばしむ。良曰く、はじめ、臣、下邳に起り、上と留に會す。これ、天、臣を以て陛下に授く。願はくは、留に封ぜらるれば足れり、と。良、性疾多く、卽ち道引して穀を食はず」とある。

【題義】宋史に「陽孝本、字は行先、贛州の人、學博く、行高く、城西通天巖に隱る。蘇軾、海外より歸り、過ぎて之を愛し、これを號して玉巖居士といふ。隱遯二十年。崇寧中、八行に擧げられ、褐を解き、直祕閣を以て歸る」とある。この詩は、陽行先に次韻し、却つて其人に贈つたのである。

【詩意】室中空しくして人なき處、以て法悅を爲すべく、心定まりし後は、自由に神游することが出來る。維摩詰は、もと病あるに非ず、須陀洹は、未だ流に入らず、世の曲直を尋ぬることを億劫が り、唯だ方寸の心田が秋に入つて成熟するのを待つて居る。されば、未だ麒麟閣に圖せられずとも、鸜鵒の洲より逃れ去るべく、つまり、功名は立たずとも、禍害に遠ざかつて居るので、これが卽ち君の刻下の境涯である。平居無事の際、夕に酒醒むれば、風來つて竹を動かし、中夜、夢覺むれば、月が樓を窺つて居る。衆人は、君を以て元德秀に比するけれども、君は、自ら先祖の陽道州に同じであると稱して居る。やがて、公儀休が葵を拔いて魯に相たりしが如く、天晴立身すべく、その後は、張良が穀を避けて留に封ぜられた如く、世外に高遯されるであらう。君の一身は、これを用ふるも、これを舍くも、兩つながら、障礙なく、飄然として、繫がざる舟の如くであらう。

再用數珠韻贈湜老

再び數珠の韻を用ひて、湜老に贈る

嗣宗雖不言。叔寶猶理遣。嗣宗は、言はずと雖も、叔寶は、猶ほ理遣。

東坡但熟睡、一夕一展轉。
南遷昔虞翻、却掃今馮衍。
古佛既手提、諸方皆席卷。
當年清隱老、鶴瘦龜不喘。
和我彈丸詩、百發亦百反。
耆年日彫喪、但有犢角繭。
時來窺方丈、共笑虎毛淺。

東坡は但だ熟睡、一夕一展轉。
南遷、むかしは虞翻、却掃、今は馮衍。
古佛、すでに手提、諸方、皆席卷。
當年の清隱老、鶴痩せて龜喘せず。
わが彈丸の詩に和し、百發亦た百反。
耆年、日に彫喪、但だ犢の角繭するあり。
時に來つて方丈を窺ひ、ともに虎毛の淺きを笑ふ。

【字解】【一】嗣宗　阮籍の字。前に阮籍嘯臺の詩中に注して置いた。【二】理遺　理窟で萬事を推し遣る。【三】虞翻　前に庚辰歳人日の詩中に注して置いた。【四】馮衍　前に與二周李游一程山一の詩中に注して置いた。【五】手提　傳燈錄に「手に諸佛を提げ、直に本來の面目を見る、諸方の尊宿、能くその右に出づるなし」とある。【六】席卷　傳燈錄に「百丈禪師、馬祖に侍して言下に省悟す。次日、馬祖、座に升り、衆、わづかに集まる　百丈　出でて席を卷却す、祖、便ち座を下る」とある。【七】清隱老　查註に「本集、崇慶禪院新經藏記略に云ふ、吾、南遷して虔州を過ぎ、廬泉を訪うて崇慶院に入る。江南に於て壯麗第一たり、その貧二十餘萬、前長老曇秀、はじめて之を作り、成るに幾くして寂す。今の長老惟湜、嗣いで之を成す、と。先生、又湜長老の眞贊あり、云ふ、道與二之貌一天與二之形一雖同一乎人一、而實無情、彼眞清隱　何殊二丹青一日照月明、風動雷行、夫孰非幻、忽然而成、此豈清隱、可レ謂二雨晴一と。これに據れば、清隱は、當に是れ惟湜の號なるべし」とあり、馮應榴の案に「先生、又清隱堂の銘あり、云ふ、已去清隱而老二崇慶一と。すなはち是れ堂名にして、號に非ざるなり」とある。【八】犢角繭　前に次二韻送程六一の詩中に注して置いた。【九】虎毛淺　衛瓘の韓獄に「虎の寫毛、これを剝猫といふ、註に云ふ、寫は淺なり。疎に云ふ、虎の淺毛なるもの、別に剝猫と名づく」とあり。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】阮籍は、言ふことなきも、衞玠は、何でも理窟づめに遣りたがる。予、東坡は、但だ熟睡して居るだけで、夜中展轉し、すこしも六つかしいことは言はぬ。南遷せし昔は、虞翻の如く、その地より掃ひ去られし今は、馮衍の如くである。手に諸佛を提げて、その本來の面目を見るべく、言下に省悟しては、どこへ往つても、長老輩をして、席を卷いて座を下らしめる。當時清隱堂に居た湜長老は、年を取つて、修養愈よ積み、鶴の如く愈よ痩せ、そして、龜の如く喘ぐことはない。そこで、彈丸の如き我が詩に和し、百たび發すれば、その都度、投げかへされるので、胸中綽綽たること、以て想ひ見るべしである。今しも、年を取つた高僧輩は、日ごとに凋喪し、唯だ繭の形をして角の曲がり込んだ小牛に比すべき若僧のみ多く、時時來つて方丈に窺ふものは、虎としては毛の薄い剝猫の如き生道心に過ぎず、ここに、宗風を發揚するに就いて、長老の健在を祝する次第である。

【餘論】紀昀は「亦た剝」といつて、例の如く、けなして居る。

和猶子遲贈孫志舉

軒裳大爐韝。陶冶一世人。
從横落模範。誰復甘飢貧。
可憐方回癡。初不疑嘉賓。
頗念懷祖黠。瞋兒與兵姻。
失身墮浩渺。投老無涯垠。
回看十年舊。誰似數子眞。
孫郎表獨立。霜戟交重闉。
深居不汝覿。豈問親與鄰。
連枝皆秀傑。英氣推伯仁。
我從海外歸。喜及崆峒春。
新年得異書。西郭有逸民。
小孫又過我。歡若平生親。

猶子遲の孫志舉に贈るに和す

軒裳は大爐韝、陶冶す一世の人。
從横、模範に落ち、誰か復た飢貧に甘んせむ。
憐むべし、方回の癡、はじめ、嘉賓を疑はず。
頗る念ふ懷祖の黠、兒の兵と姻するを瞋る。
身を失うて、浩渺に墮ち、老に投じて涯垠なし。
回看す十年の舊、誰か數子の眞に似たる。
孫郎、獨立を表し、霜戟、重闉に交はる。
深居、汝を覿ず、豈に問はむや、親と鄰と。
連枝、皆秀傑、英氣、伯仁を推す。
われ海外より歸り、崆峒の春に及ぶを喜ぶ。
新年、異書を得、西郭に逸民あり。
小孫、又、われを過ぎ、歡は平生の親の若し。

清詩五百言。句句皆絶倫。
養火雖未伏。要是丹砂銀。
我家六男子。朴學非時新。
詩詞各璀璨。老語徒周諄。
願言敎宿好。永與竹林均。
六子豈可忘。從我屢厄陳。

清詩五百言、句句皆絶倫。
火を養うて、未だ伏せずと雖も、これ丹砂の銀なるを要す。
わが家の六男子、朴學、時新に非ず。
詩詞各璀璨、老語、徒に周諄。
願はくは言に宿好を敎くし、永く竹林と均しからむ。
六子、豈に忘るべけむや、われに從つて、屢ば陳に厄せらる。

【字解】【一】軒裳　軒車裳服、大官貴の行裝をいふ。【二】爐韝　爐は鞴形、揚子法言に「師は人の模範」とあり、又李註に「木を以て土を埏して器と爲すこと、冶は金を鑄て器となすこと。【三】陶冶　陶は鞴の王室に忠なるを以て、これを知らしめず、將に亡びむとするや、一箱の書を出して門生に付して曰く、わが亡後、もし大に飢食を損ずれば、この箱を呈すべしと。超の死するに及び、惜、果して、哀悼疾を成す。門生、皆に依つて之を呈す、悉く温と往反の密計なり。惜、ここに於て、大に怒つて曰く、小子死する、慢むらくは晚し」とある。【六】盧祖黠　晉書王述傳に「字は懷祖。子坦之、桓温の長史たり、温、子の爲に婚を坦之に求めむと欲す、家に還つて父を省するに及び、しかも、述、坦之を愛し、長大と雖も、なほ抱いて膝上に置く。坦之、因つて温の意を言ふ。述、大に怒り、遽に排下して曰く、汝、竟に癡なるか、詎ぞ温の面を畏る、女を以て兵に妻はすべけむや」とある。【七】失身　五註本に「先生の詩意謂ふ、人、皆富貴を樂む、鄙超が桓温の謀に預り、王坦之が桓温の婚に從ふが如き、皆富貴に趨るが爲のみ。而して、超の父、癡を以て後に其謀を怒り、坦之の父、黠を以て早く其婚に從は

す。然れども、その桓溫を惡むと爲すは一なり。奈何ぜむ、二子の本意、富貴を謀るに在るを、と。因つて以て自らその善く富貴を謀らずして、流落に至るを言ふのみ」とある。【八】 伯仁　晉書周浚傳に「三子、頤・嵩・謨、頤、別に傳あり」とあつて、伯仁は、卽ち頤の字。前に子由初到二陳州一の詩中に注して置いた。馮應榴の案に「鮮川集に、孫志康墓銘あり、云ふ、先君、貢舉に知たり、志康、擢んでて第六人に置かれ、廷試、復た第六に居ると。先生詩中の伯仁は、蓋し志康を指すなり」とある。【九】 崆峒　虔州志に「崆峒山は、城南六十里に在り、一名空山、章貢二水、夾んで以て北に驰す、一郡の望なり、山麓周回百里」とある。【一〇】 異書　東坡の自註に「陽行先、登眞隱訣を以て借さる」とあり、舊唐書經籍志に「登眞隱訣二十五卷、陶弘景撰」とある。【一一】 丹砂銀　王註に「古書子の丹砂行伏丹訣を案ずるに、丹砂五兩、汞を結んで砂子となし、火を煑ふこと七日、玉液となし、これを消して銀となす。又大銅鍊眞寶經に曰く、丹砂を將て修鍊し、伏火後、鼓して白銀を成す、これを名づけて一返となすなり、白銀を將て、化して砂を出し、伏火なして之を鼓せしめ、乃ち黃銀を成す、これを名づけて二返となすなり」とあり、抱朴子に「丹砂、これを燒いて水銀を成し、變を積み、又還つて丹砂を成す、故に能く人をして長生ぜしむ」とある。【一二】 六男子　自分と子由と、二家の侄、卽ち蓋・迨・過・遲・适・遠の六人。【一三】 周諒　周桓にしてくどきこと。【一四】 竹杯　前に次韻王震の詩中に注して置いた。【一五】 厄陳　莊子に「孔子、陳蔡の隙、邱に於て其れ幸なるか」といひ、漢書儒林傳に「匡二衡、陳に厄ざらる」とある。

【題義】 この詩は、姪の遲より孫志舉に贈りし作に和したのである。査註に「孫立節、字は介夫、二子、一は名鰓、字は志康、一は名勛、字は志舉、虔州志に見ゆ」とある。

【詩意】 軒車裳服は、大きな爐や鞴の如きものであつて、一世の人を陶冶し、すべての人は、縱橫に鑄型に入れられるので、飢貧に甘んじて居るものは殆んど無い。郗愔の癡なるや、初めは、その子の郗超が桓溫に與みせしことを丸で知らず、王述の黠なるや、その子の坦之が桓溫と婚姻を通せむとするを怒つた。郗超・王坦之、ともに富貴に志あるが故に、權臣に阿附したのであるが、予は、決して富貴を謀らざりしに因り、いつしか浩渺の間に落ち、老の身を投ぜむとするも涯際なく、現に、この地に流落して居る。ここに、十年の昔の事を回顧するに、まじめなものは五六人あつて、その中でも、孫君は獨立を表し、家は武人である處から、霜なす戟が幾重にも成つて居る門に交叉し、まことにいかめしく物物しい有樣。その奥深く居る君は、親舊近鄰の者でさへ一寸逢ふことも出來ぬ位。連枝の人人は、いづれも、秀でて傑出し、中にも、君は、英氣勃勃として、かの周顗に比すべき程である。予は、近ごろ、海外より歸つて、先づ、ここ虔州に來り、崆峒山の春に逢ひしは喜ぶべく、まして、西郭に居る逸民の陽行先といふ人から、新年に、異書を借し與へられた。それから、君も亦た來訪せられ、さながら、むかしからの知り合の如く、その示された詩は、五百字ばかりの長いもので、洗鍊の極、句句絕倫、たとへば、仙丹を練る樣なもので、まだ十分に火を伏して居らぬが、要するに、その本質は、丹砂から變ずる白銀であつて、いづれは、鍊り上ると同じく、君の詩も、いつかは上達するに相違ない。わが家には、倅や甥どもを併せて、六男子があるが、いづれも、古朴の學問をなして、當世向でなく、詩を作ると、文彩璀璨として居るが、年寄りの言葉がくどい樣なものである。願はくは、此に從來の好を更に厚くし、末長く竹林七賢と同じ樣にありたいものである。かの六男子は、予に取つて忘れることも出來ず、予に從つて、屢ば陳蔡同樣の災厄に遇つたものであるから、彼等の事

も、何分宜しく、御願ひする次第である。

【餘論】紀昀は「殊に冗漫を嫌ふ」といつて居るが、無論さういふ處もある樣である。

南禪長老、和詩不已、故作六蟲篇答之

南禪の長老、詩に和して已まず。故に六蟲篇を作つて之に答ふ

鳳凰覽德輝。遠引不待遣。鳳凰は德輝を覽、遠く引いて遣るを待たず。

鵾鶴戀庭宇。倏忽來千轉。鵾鶴は庭宇を戀ひ、倏忽、來つて千轉。

那將坐井蛙。而比談天衍。那ぞ井に坐するの蛙を將て、而も天を談ずるの衍に比す。

蠹魚著文字。槁死猶遺卷。蠹魚は文字に著き、槁死して猶ほ卷に遺ふ。

老牛疲耕作。見月亦妄喘。老牛は、耕作に疲れ、月を見るも、亦た妄りに喘ぐ。

東坡方三問。南禪已五反。東坡、方に三問、南禪、すでに五反。

老人但目擊。侍者應足繭。老人、但だ目擊、侍者、應に足繭すべし。

最後六蟲篇。深寄恨語淺。最後に六蟲の篇、深く寄せて語の淺きを恨む。

【字解】【一】德輝　賈誼の弔屈原文に「鳳鳳翔於千仞兮、覽德輝而下之」とある、德光といふに同じ。【二】遠引　遠く去る。【三】鵾鶴　莊子に見えた、註に「燕なり」とある。【四】坐井蛙　莊子に「埳井の蛙、一壑の水を擅にして跨跱する、樂、これ亦た至れり」とある。【五】談天衍　衍は鄒衍、前に洞庭春色の詩中に注して置いた。【六】蠹魚　紙魚、卽ちしみ。【七】見月亦妄喘　風俗通に「吳牛、月を望めば喘ぐ。彼日に苦む、月を見るも、怖れて亦た之に喘ぐ」とある。又世說に「滿奮、風を畏る。晉の武帝の坐に在り、北窗に琉璃屏を作す、實は密にして疎なるに似たり。奮、難色あり。帝、これを笑ふ。奮、答へて曰く、臣、猶ほ吳牛の月を見て喘ぐがごとし」とあつて、劉孝標の註に「今の水牛は、江淮の間に生ず、故に之を吳牛といふ。南土、暑、多くして、この牛、熱を畏る、月を見れば、これ日なるを疑ふ、月を見て喘ぐ所以」とある。【八】足繭　足の先が曲つて歩けなくなる。

【題義】南禪の湜長老より、しきりに和詩を寄せて止まざるに因り、この六蟲篇を作つて、これに答へたといふのである。

【詩意】鳳凰は、德光を見れば、いくら遠くでも、その方に向つて去り、決して他から遣さるるを待たない。これに反して、燕は、人家の庭宇をのみ戀ひ慕ひ、忽ちの間に、千遍も往復する。井に坐し、一壑の水を擅にして自ら足れりとする蛙は、いかで天を談する鄒衍に比すべきか。蠹魚は、文字の間にへばり著いて、乾らびて死ねば、その儘、卷き込まれる。老牛は、耕作に疲れ、月を見ても日と思ひ、その暑熱甚しかるべきを疑うて、しきりに喘ぐ。物の大小は、すべて此の如くである。東坡は、今しも、三たび問ふたに過ぎぬが、南禪の長老は、それに對して、五たびも、和作を遣され、長老は、年寄のことで、見て居るだけだから、善い樣なものの、取次をする侍者は、度度往復して、足

が棒の樣に成つたことと思ふ。そこで、この六蟲篇を差出して、これで打切りとしたいのであるが、折角、寄せるものの、語語淺薄なるは、まことに遺憾の至である。

【餘論】六蟲の蟲は、昆蟲ではなく、汎く動物といふ意味であるが、鳳凰・鶏鶴・蛙・蠹魚・牛と算へると、五つしかない。そこで、査初白は「詩中、止だ五種に及ぶのみ、豈に鳳凰を以て二となすか、殊に解すべからず」といつて、至極尤もである。

明日南禪和詩不到、故重賦數珠篇以督之、二首

明日、南禪の和詩、到らず、故に重ねて數珠篇を賦して以て之を督す　二首

未來不可招。已過那容遣。未來は招くべからず、已過は那ぞ遣るを容さむ。
中間見在心。一一風輪轉。中間、見在の心、一一、風輪轉ず。
自從一生二。巧歷莫能衍。一の二を生ぜしより、巧歷も、能く衍するなし。
不如袖手坐。六用都懷卷。如かず、手を袖して坐し、六用、すべて懷卷せむには。
風雷生聲欬。萬竅自號喘。風雷、聲欬に生じ、萬竅、自ら號喘。
詩人思無邪。孟子內自反。詩人、思、邪なく、孟子、內に自ら反す。
大珠分一月。細綆合兩繭。大珠は、一月を分ち、細綆は、兩繭を合す。
纍然挂禪林。妙用夫豈淺。纍然として禪林に挂る、妙用、夫れ豈に淺からむや。

【字解】【一】已過　過去に同じ。【二】那容遣　すでに滅し去つて形跡なきを云ふ。【三】風輪轉　大集經に「風あり、能く上り、風あり、能く下る。心、もし上を念へば、風、心に隨つて來起し、心、もし下を念へば、風、心に隨つて來下す。轉運の作すところ、皆是れ風心に隨つて轉ず」とある。【四】巧歷　上手な算數家。【五】六用　六根の作用、前に次に「孟子由浴龍」の詩中に注して置いた。【六】聲欬　しはぶきの聲。【七】思無邪　論語に「詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く、思、邪なし」とある。【八】內自反　反は反省。【九】分一月　形圓きが故に云ふ。【一〇】兩繭　繭二つから絲を繰つて御る。

【題義】前詩を提長老に贈つた處が、その翌日、和詩が來なかつた。今度は、參つたかと思つたが、再び數珠篇二首を賦して贈り、和詩を催促したといふのである。

【詩意】未來は、すぐに招く譯にも行かず、過去は、すでに跡を滅して態態遣すことも出來ず、中間なる現在に於て、この心は、風の如くに、ぐるぐる廻つて居る。一から二を生じ、それから無窮に及び、いくら算道の名人でも、これを數衍して考へることは出來ぬから、手を袖にして默坐し、六根の作用は、卷いて之を懷にする外はない。風雷は、聲欬にも生じ、萬竅は、自然に叫んで喘ぐものである。唯だ詩人のみは、思、邪なく、そして、孟子は、自ら向內的省察を爲すことを主張した。抑も、數珠でふものは如何といふに、大きな珠は、各一個の月を分ちしが如く、細い綆は、兩繭の絲を絢

り合せたものに外ならず、粲然として、これを禪林の中に挂くれば、その妙用、もとより深く、長老は、これに因つて、佛道に參透したものであらう。

朝來取飯化。乃是維摩遺。
全鋒雖未露。半藏已曾轉。
說有陋裴頠。談無笑王衍。
看經聊爾耳。遮眼初不卷。
三陀故自醒。一㗖何由喘。
請歸視故櫝。靜夜珠當反。
安居三十年。古衲磨山繭。
持珠尙默坐。豈是功用淺。

【字解】【一】維摩遺　維摩經に「汝、上方界分に往け、國あり、衆香と名づけ、佛を香氣と號す。汝、往いて彼に到り、世尊に稽首し、願はくは、世尊食ふところの餘を得、當に菴羅世界に于て、佛事を施作すべし」とある。【二】全鋒　王註に「羅山、衆に示して云ふ、全鋒、敵勝つ、知音に遇ふこゝ罕なり。同生同死、萬中に二なし」とある。【三】半藏　傳燈錄に「婆子あり、人をして錢を送つて去り、老宿に請うて藏經を開かしむ。老宿、施利を受け、便ち禪牀を下つて轉一匝し、乃ち云ふ、婆子に傳語せよ、藏經を轉じ了るなり、と。その人歸り、舉げて婆子に似す、婆子云ふ、比來全藏を開くを請ふ、如何ぞ、只だ半藏を開くを爲す」とある。【四】裴頠　晉書の本傳に「頠、深く王衍の徒、聲譽太だ過ぎ、位高く、勢重く、物議を以て自ら嬰けず、遂に相放效し、風教陵遲するを患へ、乃ち崇有論を著し、以て其蔽を釋く」とある。【五】三陀　尙書顧命に「三宿三禦三陀」とあつて、註に「齋に至つて飲まざるを陀といふ」とある。【六】一㗖　王註に「㗖は吹なり、一吹の間、未だ喘に至らざるを云ふなり」とある。【七】故櫝　韓非子に「楚人、その珠を鄭に賣るものあり、木蘭の櫝を爲り、桂椒の櫝を薰し、綴るに珠玉を以てす。鄭人、その櫝を買うて、その珠を還す。これ善く櫝を賣るといふべし、未だ善く珠を賣ぐと謂ふべからざるなり」とある。【八】磨山繭　翻譯名義に「蠶衣は、野蠶の絲綿を用ひて衣と作すを謂ふ。東天竺に國あり、烏陀と名づく、便來熟せむと欲すれば、葉變じて蠶となり、蠶は來を食ふ、人取つて蒸し、以て綿となすなり」とある。

【詩意】朝來、飯を貰ふ爲に、勸化に出かけられるが、それは、卽ち維摩より遺されるのである。長老は、なかなか全鋒を露はさないが、藏經の半は、すでに曾て轉じて仕舞つた。長老の說は、裴頠を陋とし、談話をしても、王衍を笑はず、つまり、萬象を以て無と觀じて居るのである。經を看ることがあつても、ほんの眞似に過ぎず、眼を遮つて、初めから卷かうともせず、三たび口に銜んだばかりで、醒めた心持があるし、一氣に吹き出して喘ぐことはない。要するに、長老は、深く佛道に悟入し、區區たる經文などに依らないのである。むかしの箱は、その儘、殘つて居て、やがて、靜夜に珠の方から自然と還つて來るであらう。長老は、ここに安居すること三十年、山繭で織つた古い僧衣を著たままである。そして、平生、數珠を爪繰つて、相變らず、默坐して居られる處を見ると、その功用は、

決して浸薄なものではない。

用前韻再和霍大夫

前韻を用ひて、再び霍大夫に和す

文字先生飲、江山清獻游。
典刑傳父老、尊俎繼風流。
度嶺逢梅雨、還家指麥秋。
自慚鴻雁侶、爭集稻粱洲。
野濶横雙練、城堅聳百樓。
行看鳳尾詔、却下虎頭州。
君意已吳越、我行無去留。
歸途應食粥、乞米使君舟。

文字、先生の飲、江山、清獻の游、
典刑、父老に傳はり、尊俎、風流を繼ぐ。
嶺を度つて、梅雨に逢ひ、家に還つて麥秋を指す。
自ら慚づ鴻雁の侶、爭つて集まる稻粱の洲。
野は濶くして雙練を横へ、城は堅くして百樓を聳ゆ。
行く〻鳳尾の詔を看、却つて虎頭の州を下る。
君の意、すでに吳越、わが行、去留なし。
歸途、應に粥を食ふべし、米を乞ふ使君の舟。

【字解】〔一〕先生　東坡の自註に「劉執中を謂ふ」とあり、宋史に「劉摯、字は執中、福州の人、熙寧の初、新法の不便を言ひ、罷められて虔州に知たり」とある。〔二〕清獻　虔州志に「趙抃は、西安の人、嘉祐六年、右司諫となり、内侍を極論し、出でて虔州に知たり」とある。〔三〕梅雨　王註に「周處の風土記に云ふ、夏至の前の雨、黄梅雨と名づく、衣服を霉せば皆敗腐す」と。又埼

雅に云ふ、今江湘二浙、四五月の間、梅黄落ぜむと欲すれば、水潤土溽、柱礎皆汗し、蒸鬱して雨と成る、これを梅雨といふ」とある。〔四〕麥秋　王註に「蔡邕の月令章句に云ふ、百谷、各〻初生を以て春となし、熟を秋と爲す、故に麥は孟夏を以て秋となすなり。今、指二麥秋一といふ、すなはち、四月の末を言ふなり」とある。〔五〕鳳尾詔　紀聞譚に「晉の元帝、詩を作り、凡そ諸侯の牋奏、これを批して詔といふ、面して、草書、若字の尾、鳳の形の如し、故に之を鳳尾詔といふ」とある。〔七〕虎頭州　舊説に、虎頭は顧愷之の小字、これは、無錫、即ち常州の人だから、常州を虎頭州といふとあるが、諸家、皆これを駁し、これは虔州だといつて居る。查註に「元和郡縣志、晉の南康郡は、宋の南康國、隋、虔州と改む。輿地紀勝の中興小歴に云ふ、紹興二十三年、校書郎董德元、上言す、虔州、虎頭城と號す、徒名に非ざるなり。今、天下擧つて安く、ひとり、この郡、小警あり、おもふに、その名以て之を兆すあらむ、と。すでにして、廷臣の議、亦た虔劉の議ありといふ。途に州名を贛と改め、古縣名に因る。案するに、虎頭州は、即ち虔州なり、趙清獻の守二虔州一の詩に虎頭城裏人煙濶、馬祖巖前氣象豪の二句、證すべし」とある。おもふに、虔を虎頭といつたのは、虔の字の主部虍が、虎といふ字の上半であるからであらう。〔八〕乞米　顔魯公の事、前に次二韻過一陳紀一癡の詩中に注して置いた。

【題義】前韻とは、前に見えた鬱孤臺の詩韻で、さきに其韻を用ひて霍大夫に詩を贈つたことがある。すると、大夫、即ち霍漢英が和作を寄越したから、再び其韻を用ひ、更に之を和したのである。

【詩意】さきに、劉執中は、ここに文字の飲をなし、趙抃は、ここに江山の游をなしたが、その典型は、父老の間に傳はり、君は、尊俎の間に風流を繼がれて居る。予は、五嶺を度つて、梅雨に逢ひ、麥秋の頃に家に還らうとして居るが、慚づべきは、鴻雁の友として、稻粱の洲に集まり、ひどく、行き惱んで居ることである。眺めやれば、野は濶くして、二水練を横へ、城は堅固で、多くの物見樓

が聳えて居る。ここに、行く〻天子の詔を奉じて、虔州に下つて來た。君の心は、すでに呉越の間に馳せて居るが、わが行、去留なく、おツつけ、旅程に上る積り、北歸の途すがら、粥を食ひたいと思ふので、使君の舟に向つて、米を乞ふ次第である。

用前韻、再和許朝奉

前韻を用ひて、再び許朝奉に和す

高門元世舊。客路晩追游。
高門、元と世舊、客路、晩に追游。

清絶聞詩語。疏通豈法流。
清絶、詩語を聞き、疏通、豈に法流。

傳家有衣鉢。斷獄盡春秋。
傳家、衣鉢あり、斷獄、盡く春秋。

邂逅陪車馬。尋芳謝朓洲。
邂逅、車馬に陪し、芳を尋ぬ、謝朓の洲。

淒涼望鄉國。得句仲宣樓。
淒涼、鄉國を望む、句を得たり、仲宣の樓。

恨賦投湘水。悲歌祀柳州。
恨賦、湘水に投じ、悲歌、柳州を祀る。

何如五字律。相與一尊留。
何ぞ如かむや、五字の律、相與に一尊留まるに。

更約登塵外。歸時月滿舟。
更に約す、塵外に登り、歸る時、月、舟に滿つ。

【字解】【一】世舊　代代舊好がある。【二】法流　淡書藝文志に「法家者流は、蓋し理官より出づ、信賞必罰、以て禮制を輔く」とある。【三】衣鉢　前に次韻毛滂の詩中に注して置いた。【四】謝朓洲　どこか分からぬが、謝朓の詩に芳洲採杜若とあつて、杜若の生えて居る汀洲を指したのであらう。【五】仲宣樓　仲宣は王粲の字、前に二公再和の詩中に注して置いた。【六】投湘水　賈誼が湘水を渡る時、文を爲つて屈原を弔ひしこと、前に西山詩和者の詩中に注して置いた。【七】祀柳州　韓愈の羅池廟碑の終に、柳州を祭る迎享送神詩が記してあつて、前に玉女洞及び遷居の詩中に注して置いた。【八】塵外　亭名、虔州の勝景、前に虔州八境の詩中に注して置いた。

【題義】前に虔守霍大夫、監郡許朝奉見和云云とあつた、この詩は、許朝奉が次韻の作を寄越したから、再び之に和したのである。

【詩意】君の一門とは、代代の舊好ある上に、予は、今、客路の身、晩年、ここに追隨して同游することの出來たのは、まことに喜ばしい。その間、詩語の清絶なるを拜聽し、事ごとに疏通して、きまりをつけられるが、決して、法家者流の如く冷酷ではない。君は、傳家の衣鉢を傳へ、訴訟を判決するには、すッかり、春秋賞罰の義に準據して居られる。ここに、ゆくりなくも、相逢ひしに因り、車馬に陪して、謝朓の詩中に見えた樣な杜若の洲に芳を尋ね、さびしい思をして、鄉國を望む折から、仲宣樓に比すべき高閣に上る詩を作つた。さはれ、我が心の悲哀は、恨を賦して、文を湘水に投じた賈誼の如く、又悲歌、以て柳宗元の靈を祀りし韓愈にも似て居る。されば、五言律の樣な簡單な詩を作つて、相與に一尊を酌んで留賞する方が、はるかに善い。その上、去つて塵外亭に登り、ゆッくり

と月を舟に載せて歸ることを、前以て約束して置かう。

【餘論】邂逅の四句は、隔句に對偶をなし、これを扇對と稱する。王註に「梁の元帝の詩に云ふ、朝出屠羊縣、夕返仲宣樓、と。凡そ四句第一句を以て第三句に對し、第二句を以て第四句に對す、これを扇對といふ、蓋し、白氏金針に出づといふ。然れども、梅聖俞に至つて、續金針を作り、乃ち前人の詩を引いて云ふあり、昔時花下留連飲、暖日天桃鶯亂啼、今日江邊容易別、淡煙衰草馬頻嘶、以て其格を證す。今、この兩聯は、卽ち其格」とあるが、查註には「案ずるに、趙彥材云ふ、凡そ詩の扇對、蓋し白氏金針に始まる。胡仔曰く、杜少陵の鄭少監を哭するの詩、得レ罪台州去、時危棄二碩儒一、移官蓬閣後、穀貴殁二潛夫一、すなはち、此よりも前、すでに之あり、白氏に始まらず」といつて居る。されば、紀昀が「邂逅の四句、隔句對法、唐人、この格あり」といへるは、蓋し、語つて未だ詳ならざるものであらう。

用前韻再和孫志舉

人衆者勝天。天定亦勝人。
鄧通豈不富。郭解安得貧。
驚飛賀厦燕。走散入幕賓。
醉眠中山酒。結夢南柯姻。
寵辱能幾何。悲歡浩無垠。
回視人間世。了無一事眞。
灑掃古玉局。香火通帝闉。
我室思無邪。我堂德有鄰。
所至爲鄉里。事賢友其仁。
之子富經術。蔚如井大春。
蜿蟺楚南極。淑氣生此民。
唱高和自寡。非我誰當親。
譬彼嶰谷竹。翦裁待伶倫。
俗學吁可鄙。紙繒配芻銀。
聊將調癡鬼。亦復爭華新。

前韻を用ひて、再び孫志舉に和す

人衆きものは天に勝ち、天、定まつて亦た人に勝つ。
鄧通、豈に富まざらむや、郭解、安んぞ貧なるを得む。
驚飛す厦を賀するの燕、走り散ず入幕の賓。
醉眠す中山の酒、夢を結ぶ南柯の姻。
寵辱、能く幾何ぞ、悲歡、浩として垠なし。
人間の世を回視するに、了に一事の眞なるなし。
灑掃す古玉局、香火、帝闉に通ず。
わが室、思、邪なく、わが堂、德に鄰あり。
至るところ、鄉里となし、賢に事へて其仁を友とす。
之子、經術に富み、蔚として井大春の如し。
蜿蟺、楚の南極、淑氣、この民を生ず。
唱高くして和自ら寡く、我に非ずして誰か當に親むべき。
譬ふ彼の嶰谷の竹、翦裁して伶倫を待つに。
俗學、吁、鄙むべし、紙繒、芻銀に配す。
聊か將に癡鬼に調れむとし、亦た復た華新を爭ふ。

願子事篤實、浮言拂譫諄。　願はくは、子、篤實を事とし、浮言、譫諄を拂へ。
窮通付造物、得喪理本均。　窮通、造物に付し、得喪、理、本と均し。
期子如太倉、會當發陳陳。　期す、子が太倉の如く、會ず當に陳陳を發すべきを。

【字解】【一】人衆者勝天　この二句は申包胥の語、前に秦君舉三進士一及び次韻二寄三子由一の詩中に注して置いた。【二】鄧通　漢書佞幸傳に「文帝、善く人を相する者をして鄧通を相せしむ、曰く、當に貧にして餓死すべし。上曰く、能く通を富ますものは我に在り、何ぞ貧を說かむ、と。ここに於て、通に蜀の嚴道銅山を賜うて、自ら錢を鑄るを得せしむ、鄧氏の錢、天下に布く、その富、かくの如し」とある。【三】郭解　漢書游俠傳に「藁を茂陵に徙すに及びてや、郭解、貧にして當に中らず。吏、恐れて數て徙さずんばあらず。衛將軍、爲に郭解家貧にして徙に中らざるを言ふ。上曰く、解は布衣、匹、將軍を使ふに至る、これ其家貧ならず」とある。【四】賈誼燕　淮南子に「大厦成つて、燕雀來り賀す」とある。【五】入幕賓　晉書に「桓溫、不軌を懷く、郗超、これが謀を爲す。謝安、王坦之と、かつて溫に詣りて事を論ず。溫、超をして帳中に臥して之を聽かしむ。風動いて帳開く。安笑つて曰く、郗生は入幕の賓といふべし」とある。【六】中山酒　一たび飲めば、千日の間、醉眠するといふ酒。前に和三海州石室一の詩中に注して置いた。【七】南柯夢　淳于棼が夢に槐安國に至り、國王の壻となりしこと、前に厲鶚山の詩中に注して置いた。【八】古玉局　卽ち玉局觀。【九】井大春　後漢書に「井丹、字は大春、五經に通ず、京師、これが語を爲して曰く、五經紛綸井大春」とある。【一〇】蛺蝶　のたくつて蛺る、蝶蝶の文に「清淑の氣、蛺蝶扶輿、磅礴して鬱積す、意ふに、必ず魁奇忠信、材德の民、その間に生ずるあらむ」と見ゆ。【一一】綈谷　前に送二家安國歸二成都一の詩中に注して置いた。【一二】紙錢配匊銀　王註に「紙を以て錢となし、銀を以て銀となす、俗學の實なきを言ふ」とあるが、馮應榴の案には「疑ふらくは、紙錢を用ふるの意、故に下に鬼と云ふなり」とある、すると、紙や絹を以て、細かな銀錢に代へるといふ意と見える。【一三】譫諄　王註に「狂言を譫といふ、字、素問に出づ」とある。【一四】太倉　前に次韻曾子開一の詩中に注して置いた。

【題義】前に和三猶子遲贈二孫志舉一の一首があつたが、この詩は、志舉が和作を寄越したから、乃ち再び其韻を用ひて志舉に和したのである。

【詩意】人衆き時は天に勝つが、天が定まれば、矢張人に勝つといふは、古しへの格言である。鄧通は、十分に富んで居たし、郭解は、どうして貧乏の苦がないと云はれ、大厦の新に成りしを喜び合つて居た燕も、俄に驚いて起つ樣なことがあるし、入幕の賓といはれた郗超も、うッかり見つかると、あわてて走り出すし、中山の酒に醉へば、千日の間、眠さめず、南柯國に壻入りして、富貴を極めたのは、唯だ東の間の夢に過ぎなかつた。この世に於ける寵辱は、どれ程の事であらうか、悲歡は循環して、はてもなく、人間の世を回顧すると、一事として眞なるものは無い。われ既に玉局觀の提舉を命せられ、香火を薦めて天帝に奉仕する身分であるから、わが室に於ては、思、邪なきを旨とし、わが堂に於ては、德、必ず鄰あるを主とし、どんな處にでも落ち付いて、おのが鄉里となし、賓人を相手にして、その仁を友としやうと思つて居る。君は、經學の修養深く、蔚然として、古しへの井大春の如く、楚地の南極に於て、かくの如き人の輩出したのは、全く淸淑の氣の盤結した爲めである。君が詩を唱へ出せば、格、甚だ高きが故に、和するものは自然少く、予に非ざれば、誰も之に當ることが出來ず、たとへば、かの巖谷の竹の如く、折角切り取つても、伶倫の如きものでなければ、吹き鳴らし得

す、從つて、その價値を認めぬ樣なものである。世の俗學者流は、もとより賤むべく、何事につけても、胡魔化しを事とし、錢の代りに紙錢を用ひ、とぼけた樣な幽鬼に戲れて、その奇麗で珍らしいことを誇らうとして居る。願はくは、君だけは、篤實を旨とし、浮言の狂妄にして七くどきを一掃して貰ひたい。達觀すれば、窮通は、もと天意、得失は、根本に至つて同一理である。そこで、予は、君が太倉の如く、十分に素養を貯へ、その古びた處から、段段に取り出す樣にあらむことを希望する次第である。

崔文學甲、攜文見過、蕭然有出塵之姿、問之則孫介夫之甥也、故復用前韻賦一篇示志舉

崔文學甲、文を攜へて過ぎらる、蕭然として出塵の姿あり。これを問へば則ち孫介夫の甥なり。故に復た前韻を用ひ、一篇を賦して志舉に示す

(一)象服盛(二)簪珥。豈是邢(三)夫人。　象服、簪珥盛に、豈に是れ邢夫人。
敝衣破冠履。可(四)憐范叔貧。　敝衣破冠履、憐むべし范叔の貧。
君看崔員外。晚就(五)觀國賓。　君看よ崔員外、晚に就く觀國の賓。
當年頗赫赫。翁嫗(六)爭爲姻。　當年頗る赫赫、翁嫗、爭つて姻を爲す。
蹭(七)蹬阻風水。橫(八)斜挂邊垠。　蹭蹬、風水に阻まれ、橫斜、邊垠に挂る。
青衫映白髮。今似梅(九)子眞。　青衫、白髮に映じ、今、梅子眞に似たり。
道存百無害。甘守吳市闉。　道存して、百、害なく、甘んじて守る吳の市闉。
自言總角歲。慈(一〇)母爲擇鄰。　自ら言ふ、總角の歲、慈母、爲に鄰を擇ぶと。
邦人驚似(一一)舅。矯矯惡不仁。　邦人、舅に似たるに驚く、矯矯として不仁を惡む。
詩文非他師。家法乃富(一二)春。　詩文、他の師に非ず、家法、乃ち富春。
豈非空(一三)同秀。爲國產(一四)雋民。　豈に空同の秀、國の爲に雋民を產するに非ざらむや。
挺然齊魯(一五)生。近出(一六)姬姜親。　挺然たり齊魯の生、近く姬姜の親に出づ。
爲文不在多。一頌(一七)了伯倫。　文を爲る、多きに在らず、一頌、伯倫を了す。
淸詩要鍛煉。乃得鉛(一七)中銀。　淸詩、鍛煉を要す、乃ち鉛中の銀を得む。
自我遷嶺外。七見槐(一八)火新。　わが嶺外に遷つてより、七たび見る槐火の新なるを。
著書已絕筆。一嘿含千諄。　著書、すでに筆を絕ち、一嘿、千諄を含む。
賁(一九)桴和葦籥。天節(二〇)非人均。　賁桴、葦籥に和し、天節、人均に非ず。

時時自娛嬉、豈爲俗子陳。

【字解】【一】 衆服　法度の衣服、夫人の禮服。【二】 簪珥　かんざしと耳の飾。【三】 邢夫人　前に芙蓉城の詩中に注して置いた。【四】 范叔　即ち范雎、前に次韻陳海州の詩中に注して置いた。【五】 觀國賓　鄉貢生が郡に上つて試驗を受けること、杜甫の詩に甫昔少年日、早充觀國賓」とある。【六】 翁姥爭爲媚　東坡の自註に「退之の贈崔員外」に見ゆ」とあつて、その詩には、遠年敢科第若拾芥、飯下從二老嫗一、嫁女不約論二財貨一、老翁不量分、黑月皆二其兒一」とある。崔員外、名は斯立、字は立之。【七】 徘徊　躊つて進退自由ならざること、王註に「言ふは、瓦魚、蹤ならむと欲するも、風水に阻まれて、乃ち徘徊す」とあり、杜甫の詩に徘徊無二蹤跡一」とある。【八】 横斜　王註に「言ふは、餘星の零落するが如く、天心に當らずして、邊角に挂るなり」とある。【九】 梅子眞　前に次韻陳海州の詩中に見ゆ。【一〇】 慈母　前に橘推官母挽詞の詩中に注して置いた。【一一】 似舅　宋書に「桓玄、義軍の起るを聞き、大に懼れて曰く、劉裕は一世の雄、何無忌は劉牢之の外甥、酷だ其舅に似たり、ともに大事を擧ぐ、何すれぞ成るなからむ」とある。【一二】 富春　三國志に「孫堅、世〻吳に仕へて富春に家す」とあつて、これは同姓に因んで孫介夫を指したのである。【一三】 空同秀　空同は即ち崆峒、山名、前に和二駙子遷一の詩中に見ゆ。【一四】 齊魯生　馮應榴の案に「漢書叔孫通傳、魯の諸生を徵す、齊の字なし、但し、蔡絛聞評を考ふるに、揚子法言を引いて云ふ、先生を齊魯に徵す、致す能はざるところのもの二人と、齊魯といふは、上文齊魯大臣の語を承く、疑ふらくは、後人、一の齊の字を添ふるなり、と。これに據れば、齊魯諸生に作るも、亦た可」とある。【一五】 姬姜　姬は王室たる周の姓、姜は齊の姓、屢ば婚姻を通じて居た、ここでは宗室に關係ある名族の義。【一六】 一頌　晉書に「劉伶、字は伯倫、未だ嘗て意を文翰に屑かず、惟だ酒德頌一篇を著す」とあり、魏泰の臨漢隱居詩話に「朱子章云ふ、唐藝文志、劉伶文集三卷あり、坡、豈に偶ま忘るるか、と。予謂ふ、坡は晉史に據るのみ、且つ公の意、本と謂ふ、只だ此一篇、以て平生を道ひ盡し、名を後世に傳ふるに足る、他文の有無、必ずしも論ぜざるなり」とある。【一七】 鉛中銀　蘇頌の本草圖經に「銀の鉛中に在るや、銅と相雜る、土人采り得、鉛を以て再三煎煉して方に成る、又鉛銀最も得難し。今時の燒煉家、一斤の鉛ごとに、止だ一二銖を得」とある。【一八】 挽火　王註に「言ふは、七たび清明を見るなり、蓋し、清明、火を檢挽に取る」とある。しかし、周禮の註に「春は檢柳を取り、夏は柒杏を取り、夏季は桑柘を取り、秋は柞楢を取り、冬は槐檀を取る」とある。【一九】 蓋浮和桑薪　禮記に「蓋浮土鼓桑薪は、伊青氏の樂なり」とある。蓋浮は、土で固めた棒で、それで鼓を擊つ。桑薪は、桑の薪で造つた管。伊青氏は堯の別名。【二〇】 天節　自然の音節。【二一】 人均　人爲の樂。

【題義】 敎官の崔甲といふ人が、文章を攜へて來訪した。蕭然として、塵俗を拔き出でた姿をして居て、天晴、一かどの人物。聞いて見ると、孫介夫の甥といふこと。そこで、再び前韻を用ひ、この一篇を賦して孫志舉に示したといふのである。崔甲、字は次之、その閱歷等は失考、孫介夫の事は、虞州志に「孫立節、寧都の人、皇祐の進士、王安石新法を行ひ、以て條例司と爲さむと欲す。立節曰く、當に我に勝つ者を求むべし、我輩人の如きは、肯て是官とならず、と。蘇文忠、剛說を作つて以て之に遺る」とある。

【詩意】 象服を著て、簪や耳飾りを盛に付けて居たからといつて、神仙の邢夫人ではないが、古くなつた衣に、破れた冠履を著けて居る范叔の貧乏らしい有樣は、まことに、氣の毒である。つまり、人の眞價は、その服裝などに關係しない。ここに、崔員外は、晩年になつて、鄉貢生となり、その時は、聲譽赫赫として、翁嫗輩は、爭つて、その娘を嫁に遣りたいと思つた位。しかし、その後、大魚が風水に妨げられて、弱り込んだ如く、又消え殘つた星が、横に斜に天の片隅に懸れる如く、青衫は白髮に映じ、さながら、古しへの梅子眞の樣であつて、道の存する限りは、すこしも差障りとは成らず、廿

んじて吳の市門を守ると同じく、微官に安んじて居る。その崔君が自ら言ふには、總角の少年の頃には、慈母が近鄰を擇んで、專ら意を敎育に用ひたから、一邦の人は、その伯父の孫介夫の如く、矯矯として不仁を惡むのに驚歎した位。それから、詩文も、他人を以て師と爲さず、孫氏に傳はつて居る家法を守つて居るといつた。いかさま、これは空同山の秀靈が、國家の爲に、傑出した人を產出したのであらう。その人物は、挺然として、かの叔孫通が致す能はざりし齊魯二生の如く、それが近く姬姜に比すべき名族の中から出でたといふのも、不思議の至りである。文章を作つても、多きを旨とせず、かの劉伶の如きは、一篇の酒德頌だけで、千古に不朽である。清秀なる詩句は、十分に鍛錬すべく、鉛の中から、純粹な銀の出る樣にせねばならぬ。顧みれば、予が嶺南に遷謫されしより、七たび槐火の新なるを見、近ごろでは、著書の筆を絕ち、一默の中に千諄を含み、最早、何も言はぬ積り、土製の棒だの、蘆の管だのは、極めて、原始的の樂器ではあるが、これこそ、自然の音節であつて、人爲の樂を超絕して居るので、つまり、言はで思ふは、言ふに勝れるのである。そこで、時時、自ら娛んで喜んで居るが、この眞情は、君を除いて、世上俗子の爲には、到底述べることが出來ない。

戲贈虔州慈雲寺鑒老

戲に虔州慈雲寺の鑒老に贈る

居士無塵堪洗沐。居士、塵の洗沐に堪へたるなし、

道人有句借宣揚。道人、句あり、借つて宣揚。
窗間但見蠅鑽紙。窗間、但だ見る蠅の紙を鑽するを、
門外惟聞佛放光。門外、惟だ聞く佛の光を放つを。
徧界難藏眞薄相。徧界、藏し難し、眞に薄相、
一絲不挂且逢場。一絲、挂けず、且つ逢場。
却須重說圓通偈。却つて須らく重ねて圓通の偈を說くべし
千眼熏籠是法王。千眼の熏籠、是れ法王。

【字解】【一】佛放光　楞嚴經に「當時、世尊、肉髻の中より百寶光を涌かし、光の中、千葉寶蓮を涌出す、化如來あり、寶華の中に坐し、頂より十道百寶の光明を放つ」とある。【二】徧界　五燈會元に「石霜山の慶諸禪師、方丈內に在り、曾、窗外に在つて問ふ、咫尺の間、其麼の爲に師の顏を見ざる。師曰く、徧界、かつて藏せず」とある。【三】一絲不挂　傳燈錄に「南泉、陳亘に問ふ、十二時中作麼生、陳曰く、寸絲挂けず、又逢場戲を作す」とある。【四】圓通　楞嚴の偈に「楞迦摩提、圓通、入流成二正覺一」とあり、楞嚴經に「跋陀婆羅佛、圓通を問ふ、わが課するところの如き、因に觸れて上たり」とある。【五】熏籠　李詮に「十六開士、浴室に於て本因を證悟す、熏籠煙浴に於て具に大安樂を得」とある。【六】法王　法華經に「法王無上尊」といひ、圓覺經註に「佛は萬法の王たり、又空王といふ」とある。

【通義】輿地紀勝に「慈雲寺は、贛州城の東南に在り、舊名景德寺」とあり、冷齋夜話に「東坡、海外より歸つて虔上に至る、水潤れ、舟行くを得ざるを以て、時に慈雲寺を過ぎて浴す。長老明鑒、魁梧、世、畫くところの慈恩の如く然り。叢林、道學を以て之に與ふ。坡、詩を作つて之に戲る云云」とある。この詩は、卽ち虔州慈雲寺の明鑒長老に贈つたのである。

【詩意】東坡居士は、湯あみをせねばならぬ程、塵にまみれても居らず、長老の作つた句を借りて、大に法風を宣揚しやうと思ふ。窓間には、唯だ蠅が來て、障子の紙を針する音が聞こえ、門外では、佛が光明を放つたといつて、頻りに取沙汰をして居るのが聞こえる。この身の徧界に隱れ難きは、その相貌の尙ほ薄きに起因し、體に一絲をも挂けず、丸裸でも逢場の戲を爲すことに躊躇しない。しかし、ここには、再び圓通の偈を說くべく、千眼を具へ、熏籠で焙洛して、やがて、湯あみを終れば、取りも直さずこの身が法王、卽身卽佛とは、まさしく此事であらう。

畫車二首

何人畫此隻輪車。
便是當年敧器圖。
上易下難須審細。
左提右挈免疏虞。

畫車　二首

何人か、この隻輪車を畫く、
便ち是れ、當年敧器の圖。
上るは易く、下るは難く、須らく審細［すべし。］
左提右挈、疏虞を免れむ。

【字解】【一】隻輪車　卽ち一輪車。東京夢華錄に「獨輪車、前後二人、駕の兩旁を把り、兩人扶拐、前に驢の挽くあり、これを車車といふ」とあり、蓉塘詩話に「錄江より以東、耳子轉輪を用ひざるを以てなり」と。獨輪小車あり、一人前に挽き、一人後に推す、これを羊頭車といふ。書箋、未だ此名を載するものを見ず、ひとり、張文潛の輪車行に云ふ、羊頭車子毛布裳と。はじめて、詩人の之を用ふるを見る」とある。【二】敧器　家語に「孔子、魯の桓公の廟に觀る、敧器あり、守廟の者に問ふ、これ何の器ぞや。對へて曰く、これ蓋し宥坐の器。孔子曰く、吾聞く、宥坐の器、虛しければ敧ち、中なれば正しく、滿つれば覆る、明君、以て戒誡となす」とあつて、又荀子及び韓詩外傳等に見えて居る。

【題義】この詩は、車の畫に題したのである。

【詩意】誰が、この一輪車を畫いたか知らぬが、これは、むかしの敧器の圖と略ぼ同じである。この車たるや、上ることは易く、下ることは難いから、篤と注意すべく、そして、左に提げ、右に挈げ、兩方で相助けて行けば、幸に過失を免れることが出來る。

【餘論】紀昀は「この首、凡近」といつて居る。

九衢歌舞頌王明。
誰惻寒泉獨自清。
賴有千車能散福。
化爲膏雨滿重城。

九衢の歌舞、王明を頌す、
誰か惻む、寒泉の獨り自ら清きを。
賴に千車の能く福を散ずるあり、
化して、膏雨となつて、重城に滿つ。

【字解】【一】九衢　都大路。【二】王明　王者の明德、易の井卦九三に「井渫つて食はれず、我が心の惻を爲す、用つて汲むべくんば、王明、並に其福を受けむ」とあるを用ふ。

【詩意】今しも、都大路では、歌舞して太平の御世に於ける王者の明德を頌し、寒泉の獨り清きに拘はらず、汲まれずに棄ててあるのを痛む人がない。しかし、幸に、これを汲み、千輛の隻輪車に載

せ、城中の民家に配つて、その福を散ずれば、やがて、膏雨の重城に滿ちた樣な趣があらう。

【餘論】紀昀は「この首未詳」といつたが、寒泉は、東坡自ら比し、千車は、當路の有力者を指したのであらう。

虔州呂倚承事、年八十三、讀書作詩不已、好收古今帖、貧甚、至食不足

虔州の呂倚承事、年八十三、書を讀み詩を作つて已まず。好んで古今の帖を收め、貧甚しくして、食足らざるに至る

揚雄老無子。馮衍終不遇。揚雄、老いて子なく、馮衍、終に不遇。
不識孔方兄。但有靈照女。孔方兄を識らず、但だ靈照女あり。
家藏古今帖。墨色照箱筥。家に古今の帖を藏し、墨色、箱筥を照らす。
飢來據空案。一字不堪煮。飢ゑ來つて、空案に據る、一字、煮るに堪へず。
枯腸五千卷。磊落相撐拄。枯腸五千卷、磊落相撐拄す。
吟爲蜩蛩聲。時有島可句。吟して、蜩蛩の聲を爲し、時に島可の句あり。
爲語里長者。德齒敬已古。爲に里の長者に語る、德齒、すでに古りたるを敬せよ。
如翁有幾人。薄少可時助。翁の如き、幾人かある、薄少、時に助くべし。

【字解】【一】揚雄　はじめ童烏といふ子があつたが、八歳で死んで後は、子がなかつた。【二】馮衍　前に次韻蘇山亭見寄の詩中に注して置いた。【三】孔方兄　錢をいふ、前に贈王仲素の詩中に注して置いた。【四】靈照女　傳燈錄に「龐居士、女あり、靈照と名づく、常に隨つて竹漉籬を製し、これを賣がしめ、以て朝夕に供す」とある。【五】空案　何物も載つて居らぬ机。【六】撐拄　互に支へ合ふ。【七】島可　賈島と可朗。【八】薄少　少しばかりの贈金。

【題義】潘子眞詩話補遺に「呂倚夢得は、維揚の人、少にして場屋の聲あり。屬對を善くし、喜んで書畫を收む。蹭蹬不偶、老いて、始めて恩を以て虔州瑞金簿に補せらる。致仕し、貧以て歸るなし。年八十餘、惟だ一女あり、贅人に嫁す、因つて居る。王禹玉と舊あり、元豐の間、錢二萬・酒十壺を餉る。夢得、啓を作つて謝を致し、隔句中、白水眞人・青州從事を用ひて對となす。禹玉、極めて之を賞賞す、後、東坡、虔を過ぎ、詩を以て之に遺るといふ」とある。承事、詳しくは承事郎、文官の官階。この詩は、虔州の承事郎呂倚といふもの、年八十三に成つても、書を讀み、文を作つて、少しも止まず、且つ好んで古今の法帖を蒐集し、貧甚しくして、食物さへ十分でない位。その人と爲りに感じて、賦して贈つたといふのである。

【詩意】揚雄は、老いて後、遂に子なく、馮衍は、終生不遇であつた。君も、この二人と同じく、孔

方兄と稱する錢とは、知り合にもならず、唯だ靈照女の樣な娘が一人居るだけである。家には、古今の法帖を藏し、墨色は箱を照らすばかり、飢ゑて來ると、空案に據つて、その法帖を眺めて居るが、一字と雖も、煮ることが出來ない。學問の素養深く、枯腸の中には、五千卷の書籍があつて、つゞ張つて、互に支へ合ふといふ有樣。その詩を吟じ出す聲は、蟬や蟋蟀の如く、時時、賈島・可明に比すべき名句がある。ここに、里中の長者に告げるが、道德年齒、すでに久しきを經たるものは、隨分尊敬すべく、まして、この翁の如きは、外に幾人もないのであるから、すこしばかりの義捐金でも贈つて、時時、救助するが善からう。

王子直、去歲送子由北歸、往返百舍、今又相逢贛上、戲用舊韻作詩留別

王子直、去歲、子由の北歸するを送りて、往返百舍、今また、贛上に相逢ふ。戲に舊韻を用ひ、詩を作つて留別す

米盡無人典破裘。米盡きて、人の破裘を典するなし、
送行萬里一鄱游。送行萬里、一鄱游。

【字解】〔一〕鄱游　王註に顏魯公の蔡明遠に與ふる帖に云ふ、聞く、鄱游、明遠と同じく來り、采石に至

解舟又欲攜君去。舟を解き、又君を攜へて去らむと欲す、
歸舍聊須與婦謀。舍に歸つて、聊か須らく婦と謀るべし。
聞道年來丹伏火。聞くならく、年來、丹、火を伏すと、
不愁老去雪蒙頭。愁へず、老い去つて、雪、頭に蒙るを。
剩買山田添鶴口。剩さへ、山田を買うて、鶴口を添ふ、
廟堂新拜富民侯。廟堂、新に拜す富民侯。

卽ち去り、しかも、家人に告げず」とある。【三】與婦謀　楚王が孫叔敖の子を相とせむと欲して優孟に問ひ、孟が歸つて婦と謀りしこと、前に寄呂鵬仲一の詩中に注して置いた。【四】丹伏火　前に和子瞻一の詩中に注して置いた。【五】買山田　王子直、鶴田山に住せしが故に云ふ。【六】富民侯　漢書に「武帝、田千秋を拜して丞相となし、富民侯に封ず」とある。

【題義】王子直は、去年、子由の北歸を送り、驛の百もある長い道中を往復したが、今、又贛上に於て逢ひしが故に、戲に舊韻を用ひ、この詩を作つて、留別したといふのである。王子直は、秀才といふだけで、その名字閥歷等は分からない。

【詩意】米が無くなつても、誰も破裘を質に入れて救つて呉れる人もないが、君は、當年の鄱游の如く、萬里の行を送つて呉れられて、まことに辱い。そこで、舟を解き、君をも載せて一緒に立ち去らむと欲すと。計るに、其れ久しからずして亦た會はむ」とある。【三】攜君去　晉書張翰傳に「賈籍、命に赴いて洛に入らむとし、吳の閶門を經、船中に於て琴を彈ず。翰、はじめ相識らず、乃ち籍に就いて言譚し、便ち相欽悅す。籍に問うて、その洛に入るを知る。翰曰く、吾、亦た北京に事あり。便ち同じく載せて、京に事ありと。便ち同じく載せて、孟が歸つて婦と謀りしこと、前に寄呂鵬仲一の詩中に注して置いた。【四】買山田　王子直、鶴田山に住せしが故に云ふ。【五】富民侯　漢書に「武帝、田千秋を拜して丞相となし、富民侯に封ず」とある。

らうと思ふ位であるが、家に歸つて、聊か細君と相談されるが善からう。聞けば、年來、仙丹を鍊つて火を伏せてあるさうで、年を取つて、雪の如き白髮が頭に被るをも苦にしない。その上、君は、鵝田山に畑を買つて、鵝をさへ飼はうといふ位。廟堂の上に於ては、田千秋の如き人が、俄に拔擢されて、富民侯に封せられたといふが、君は、そんな事を聞いても、何とも思つては居らぬ樣である。

次韻江晦叔二首

人老家何在。龍眠雨未驚。
酒船回太白。稚子候淵明。
幸與登仙郭。同依坐嘯成。
小樓看月上。劇飲至參橫。

【字解】【一】回太白　太白は李白の字、前に哭二刁景純一の詩中に注して置いた。【二】候淵明　陶淵明の歸去來辭に僮僕歡迎、稚子候門とあり、又その詩に、歸人望三燈火一、稚子候二荒蕪一とある。【三】登仙郭　郭は郭泰、李膺と同舟して仙の如く見えたといふこと、前に次二韻遠鱗見一懷の詩中に注して置いた。【四】坐嘯成　成は成瑨、字は公緒、前に趙郎中見一和の詩中に注して置いた。

【語義】説明に及ばぬ。晦叔の事は、前に送二江公著知二吉州一の詩中に注して置いた。

【詩意】われは、老いて、家が何處とも知らず、幸ひ、江中の龍が眠つて居る爲に、ひどい風雨もなく、これでは旅路も安心である。たとへば、酒を載せし舟が李白を迎へ回すが如く、又稚子が門に候して、陶淵明の歸るを待つが如く、予も亦た歸りが急がれる。ここに、君と逢つたのは、登仙せむとする郭泰と舟を同じうせしが如く、又坐嘯せる成瑨に依つた樣である。されば、小樓に倚つて、月の上るを眺めつつ痛飲して、參といふ星の橫はる頃に至つた次第である。

鐘鼓江南岸。歸來夢自驚。
浮雲時事改。孤月此心明。
雨已傾盆落。詩仍翻水成。
二江爭送客。木杪看橋橫。

【詩意】江の南岸には、寺があると見えて、鐘鼓の聲、さわがしく聞こえ、歸つて此に至れば、夢も自然、驚いて醒めるばかり。浮雲は、時事と共に改まり、孤月は、此心の如く光明透徹である。雨は、既に盆を傾けるが如く降り注ぎ、詩は、水を翻すが如く、咄嗟の間に出來た。二江の水は、爭つて客を送るが如く、木の梢の邊に、橋の橫はるのが見える。

【餘論】乾隆御批に「冲襟內に盎、文、詞に見はる、邃然として理に入らざるなし」とあつて、これ

は、まきしく、苕溪漁隱叢話に「浮雲世事改、孤月此心明、語意高妙、參禪悟道の人、胸襟を吐露するが如く、一毫の窒礙なきなり」とあり、困學紀聞に「浮雲世事改、孤月此心明、坡公晩年造るところ深し」とあるのを承けたのである。

次韻江晦叔、兼呈器之

江晦叔に次韻し、兼ねて器之に呈す

横空初不跨鵬鼉。空を横ぎる、初めより鵬鼉に跨らず、
但覺胡牀步步高。但だ覺ゆ、胡牀、歩歩高きを。
一枕晝眠春有夢。一枕、晝眠つて、春に夢あり、
扁舟夜渡海無濤。扁舟、夜渡つて、海に濤なし。
歸來又見顛茶陸。歸り來つて、又見る茶に顛するの陸、
多病仍逢止酒陶。多病、仍は逢ふ酒を止むるの陶。
笑說南荒底處所。笑うて說く、南荒、底の處の所、
祇今榕葉下庭皐。祇今、榕葉、庭皐に下る。

【字解】【一】歩歩高　東坡の自註に「器之言ふ、かつて、夢に飛び、自ら身と坐牀と皆空中に起つを覺ゆ」とある。【二】顛茶陸　東坡の自註に「さきに鎮壩に在り、かつて晦叔に語る、陸羽は茶顛、君、亦た然り」とある。【三】止酒陶　東坡の自註に「陶淵明に止酒の詩あり、器之少時、飲量敵なし、今復た飲まず」とある。【四】庭皐　皐は平地。

【題義】王註に「劉安世、字は器之、寶文閣待制に終る、學者、號して元城先生といふ」とあつて、宋史に其傳を載せ、なほ邵氏見聞後錄に「器之、東坡と元祐の初同朝、元符の末に至り、嶺南より歸り、道に相遇うて、はじめて交歡す」とある。この詩は、江晦叔の詩韻に次し、兼ねて劉安世に贈つたのである。

【詩意】予は心地曠濶、空中を横ぎるにも、初より鵬や鼉に跨らず、歩歩の間に、身と坐牀とが自然高くなる樣な氣がする。枕を擁して、暢氣に晝寢をすると、春の日永に夢をなし、夜、扁舟に乘じて、海を渡ると、幸にも濤なくして、至つて平穩であつた。そこで、此まで歸つて來ると、茶の爲に氣逸ひの樣になれる陸羽の如き君と相見るを得、多病の身で、酒を止めた陶淵明の樣な人に逢つた。南荒は、如何な處かといへば、今しも、春過ぎて、榕樹の葉が庭もせに散り敷き、流石に物寂しい景色であらう。

寒食、與器之游南塔寺寂照堂

寒食、器之と南塔寺の寂照堂に游ぶ

城南鐘鼓鬬清新。城南の鐘鼓、清新を鬬はす、
端爲投荒洗瘴塵。端に投荒の爲に、瘴塵を洗ふ。

【字解】【一】投荒　宋史劉器之傳に「章惇、事を用ひて新州別駕に貶し、英州に安置す、投荒七年、甲

總是鏡空堂上客。　すべて、是れ鏡空堂上の客、
誰爲寂照境中人。　誰か寂照境中の人となる。
紅英掃地風驚曉。　紅英、地を掃うて、風、曉に驚き、
綠葉成陰雨洗春。　綠葉、陰を成して、雨、春を洗ふ。
記取明年作寒食。　記取せよ、明年、寒食を作し、
杏花曾與此翁鄰。　杏花、かつて此翁と鄰りしを。

含蓄するところ遠惡の地、これを歷ざるはなし」とある。【二】鏡空堂　王註に「或は云ふ、鏡空堂は張安道の堂なりと、未だ詳ならず。但し、先生、聰上人に和する詩あり、一悟鏡空老、始知圓澤賢」とあるから、僧の名ではないかと思はれる。【三】寂照　堂の名、楞嚴經に湛然寂照とあるを取つたのであらう。【四】曾　與此翁鄰　韓愈の杏花の詩に居鄰北郭古寺空、杏花開株能白紅、明年更發應三更好、道人莫忘鄰家翁とある。

【題義】泰和志に「槐安閣は、縣の南塔寺に在り、黃山谷、白下の宰となつて詩あり」と見え、虔州志にも亦た之を載せてあるが、あまり著名でもないと見えて、紀逸は甚だ疎略である。王註に杭州圖經を引いたのは、全く見當違ひであらう。この詩は、寒食の日に、劉器之と共に、南塔寺の寂照堂に游んで作つたのである。

【詩意】城南なる寺の鐘鼓の響は、清新にして、まさしく、投荒の人の爲に、療塵を洗つて與れる樣である。ここに來たものは、すべて鏡空長老の堂上の客であるが、その中、誰が名にしおふ寂照境中の人となり得べきか。今しも、紅の花びらは、地を掃うて、風は曉に驚き、綠の若葉は陰を成し、雨は春を洗ひ去らうとして居る。明年再び寒食に遇ひし時、杏花は、かつて、かく申す東坡と鄰り、その眷賞を受けたといつた其言葉を記憶して居て貰ひたい。

【餘論】乾隆御批に「花落ち、木榮え、人事を言はず、しかも、人事の變遷、自ら見はる、寄慨良に深し」とある。

器之好談禪、不喜游山、山中筍出、戲語器之、可同參玉版長老、作此詩

器之、好んで禪を談じ、游山を喜ばず。山中に筍出づ、戲に器之に語る、同じく玉版長老に參すべしと、此詩を作る

叢林眞百丈。法嗣有橫枝。　叢林、眞に百丈、法嗣、橫枝あり。
不怕石頭路。來參玉版師。　怕れず石頭の路、來り參ず玉版の師。
聊憑柏樹子。與問籜龍兒。　聊か柏樹子に憑つて、與に問ふ籜龍の兒。
瓦礫猶能說。此君那不知。　瓦礫、なほ能く說く、此君、那ぞ知らざらむ。

【字解】【一】百丈　傳燈錄に「洪州百丈山の懷海禪師、大雄山に住む、居處險峭、峻、極まれるを以て、故に之を百丈と號す」と

ある。【三】横枝　東坡の自註に「玉版は横枝の竹筍なり」とある。【四】石頭路　前に次韻答寶覺の詩中に注して置いた。【五】柏樹子　前に柏堂及び程德孺惠二柏石の詩中に注して置いた。【六】此君　竹を云ふ、前に絲筠軒の詩中に注して置いた。

【題義】劉器之は、好んで禪を談ずれども、山に游ぶことを好まない。そこで、一處に寺に參詣すると、山中で筍を見つけたから、戯に器之に向つて、これも同じく玉版長老の處へ往つて、禪に參ずることが出來やうといひ、仍つて、この詩を作つたといふのである。若溪漁隱叢話に「東坡、かつて、劉器之と同じく玉版和尚に參せむとす。器之、欣然、これに從ふ。廉泉に至り、筍を燒いて食ふ。器之、筍味の勝れたるを覺え、問ふ、これ何の名ぞ。曰く、玉版と名づく、この老僧、善く法要を說き、人をして禪悅の味を得せしむ、と。ここに於て、器之、方に其戯を悟る。坡、偈を作る、云云、と。この詩、盡く禪家の語を用ひて形容す、游戯に善きものといふべし。山谷云ふ、この老、般若に於て、横說竪說、百に剩語なし、その筆端、舌あるに非ざるか」とある。

【詩意】叢林は、名の同じ通りに、眞に洪州の百丈山に似て居るし、その法嗣としては横枝の此筍がある。この筍は、石頭の路を恐れず、態態、ここに來て、玉版和尚に參禪せむとし、まことに、殊勝の至である。そこで、柏樹子に憑つて、この筍に事問はむとして居るのであるが、瓦礫でさへも、往往にして物いふ位であるから、此君と稱せらるる竹にして、話說することを知らぬ筈はない。

永和清都觀道士、童顏鬒髮、問其年、生於丙子、蓋與予同、求此詩

永和清都觀の道士、童顏鬒髮、その年を問へば、丙子に生まる、と。蓋し、予と同じ。此詩を求めらる

鏡湖敕賜老江東。　鏡湖、敕して賜ひ、江東に老ゆ、
未似西歸玉局翁。　未だ似ず、西歸の玉局翁。
敧枕未容春夢斷。　枕を敧て未だ容さず、春夢の斷ゆるを、
清都宛在默存中。　清都、宛として默存の中に在り。
每逢佳境攜兒去。　佳境に逢ふ每に、兒を攜へて去り、
試問行年與我同。　試みに行年を問へば、我と同じ。
自笑餘生消底物。　自ら笑ふ、餘生、底物を消ふ、
半篙清漲百灘空。　半篙の清漲、百灘空し。

【字解】【一】鏡湖敕賜　賀知章が官を謝めて歸る時、玄宗が之に鏡湖一曲を賜はりしこと、前に哭刁景純二の詩中に注して置いた。【二】玉局　前に送二戴蒙一及び過嶺の詩中に注して置いた。【三】默存　稚天子傳に「王、化人の袂を執り、騰つて上るもの中天、王、實に以爲へらく、清都紫微、鈞天廣樂、帝の居るところ、と。すでに寤め、王、從つて來るところを問ふ、左右曰く、王、默存するのみ」とある。【四】半篙清漲　東坡の自註に「予、劉器之と同じく、虔州を發す、江水忽ち清漲丈餘、贛石三百里、一も見るものなし。永和に至り、器之、舟

を解いて先づ去り、予、ひとり、清都に游んで此詩を作る」とある。

【題義】　査註に「泰和志、縣を距つる、東北八十里、晉の置ける東昌城あり。隋、省いて西昌に入る、今の永和鎮、即ち其地なり。吉安志、萬安縣に三鄉あり、曰く永和、曰く誠信、曰く龍泉。廬陵志、清都觀は、吉州城南十五里、儒林鄉、永和鎮に在り。南唐保大の間、石基あり、號して西臺といふ。宋の興國の初、道士蕭道元、茅を臺に結び、額、西臺觀を賜ふ。治平中、今の名に改む。蘇軾、南歸し、かつて游び、爲に清都臺の三字を書す。本集に清都謝道士の眞贊あり、云ふ、謝道士、生三丙子、眞一存、長不レ死、欲レ識二清都面目一、一江春水東流、滔滔直入二滄海一、大至二蓬萊頂頭一と。道士、姓は謝、字は子和」とある。すると、この題は、永和なる清都觀の謝道士は童顏で、房房した髮をして居るが、その年を問へば、丙子に生まれたといふから、予と同年で、六十五歳。その人が詩を求めたから、この一首を作つたといふのである。

【詩意】　君は、當年の賀知章が、敕して鏡湖一曲を賜はつて、江東に老ゆるが如く、予が西歸して玉局觀を提舉するのとは、丸で異なつて居る。枕を敲てても、長閑けき春の夢は未だ醒めやらず、名にしおふ清都は、默存の中に在つて、彷彿として、天上に參向することがある。予は佳境に逢ふ毎に、倅と一緒に往き、そこで、君に逢つたから、試に行年を問ふと、恰も予と同じだといふことで、その若若しいのは、まことに羨ましい。予は、餘生を送るに、何物を用ふべきか。江水、忽ち清澄して、半籠の深さに及び、百灘の險も皆沒して仕舞ひ、ここまで無事で來られたのが、先づ嬉しいと思ふ位、その落寞たることは、自分でも、をかしい位である。

贈詩僧道通

詩僧道通に贈る

雄豪而妙苦而腴。　雄豪にして妙、苦にして腴、
祇有琴聰與蜜殊。　祇だ琴聰と蜜殊とあり。
語帶煙霞從古少。　語は煙霞を帶ぶ、古しへより少く、
氣含蔬筍到公無。　氣は蔬筍を含む、公に到つて無し。
香林乍喜聞薝蔔。　香林、乍ち喜ぶ薝蔔を聞くを、
古井惟慚斷轆轤。　古井、惟だ慚づ轆轤を斷つを。
爲報韓公莫輕許。　爲に報せよ、韓公、輕しく許す莫れ、
從今島可是詩奴。　今より、島可、これ詩奴。

【字解】【一】苦而腴　苦いけれども妙味がある。【二】琴聰與蜜殊　琴を學んで居た思聰と蜜ばかり嘗めて居る仲殊、ともに詩僧の名、東坡の自註に「錢塘の僧思聰、絲角、琴を善くす、後、琴を舍てて詩を學び、復た詩を棄てて道を學ぶ。その詩、峻然に似て、しかも雄放を加ふ。安州の僧仲殊の詩、敏捷立どころに成る、しかも、工妙、人に超えて遠きこと甚し。殊、穀を避けて常に蜜を喫ふ」とある。【三】氣含蔬筍到公無　梔子の花、前に敷ば見ゆ。【五】韓公　即ち韓愈、賈島の詩を激賞せしが故に云ふ。【六】島可　賈島と可明、王註に「島は賈島なり、は

じめ、浮屠となつて無本と名づく。可は可明なり。韓退之、無本に詩を贈つて之を稱す、故に莫二輕許一といふ」とある。【七】詩奴王註に「杜牧、李賀詩集の序を作り、謂はゆる奴僕として驅に命ずるの意」とある。

【題義】説明に及ばぬ。詩人玉屑・石林詩話には、皆惠通に作つてあるが、未だ孰れか是なるを詳にせず、且つ俱に失考。

【詩意】詩を作つて、雄豪なれども工妙、苦いけれども、えならぬ至味があつたのは、唯だ思聰・仲殊の二人があつたばかりだが、君は決して之に遜らない。語語、煙霞の句を帶びたるは、古しへより其例なく、坊主の詩といへば、蔬筍の氣を含んで、精進料理臭いが、君の作には、絶對に、さういふことがない。ここに、君の詩を得たるは、花咲き匂ふ林の中に、梔子の薰り高きを聞くが如く、古井の清冷極まれる水が、轆轤が無くては、どうしても汲めぬと同じである。むかし、韓退之は賈島などを推許したが、最早輕しく、さういふことを言はぬ樣にと警告した位で、今後、賈島・可明などは、詩の上で、全く君の奴僕たるに過ぎぬものである。

【餘論】乾隆御批には「氣含二蔬筍一、祇だ是れ諧語を以て詩に入れ、遂に千古の名論となる。世の堂を開いて人の爲にするもの、能く斯意を得ば、定めて、兎園四六、敗瓮の時文、撮合補綴、支那の撰述となすに足らず、而して、正法眼藏を具ふるもの、卽ち不レ搽二紅粉一也風流、只要檀郎認二得聲一、等の句の如き、皆第一義を解すと爲すを知らむ」とあつて、大に之を推賞して居るが、紀昀は「これ何の言語ぞや」といつて、全然、これを否定して居る。

張競辰永康所居萬卷堂

張競辰永康、居るところの萬卷堂

君家四壁如二相如一。　君が家、四壁、相如の如し、
卷藏二天祿一吞二石渠一。　卷いて、天祿を藏して、石渠を呑む。
豈惟鄴侯三萬軸。　豈に惟だ鄴侯の三萬軸のみならむや、
家有二世南行祕書一。　家に世南の行祕書あり。
兒童拍手笑二何事一。　兒童、手を拍つて何事をか笑ふ、
笑二人空腹談一經義一。　人の空腹にして經義を談ずるを笑ふ。
未許中郎得二異書一。　未だ許さず、中郎の異書を得るを、
且與揚雄說二奇字一。　且つ揚雄と奇字を說く。
清江縈山碧玉環。　清江、山を縈る、碧玉環、
下有二老龍一千古閒。　下に老龍あつて、千古閒なり。

【字解】【一】相如　卽ち司馬相如、文君と共に成都に歸り、四壁山立せしこと、前に謝二郡人饋一花の詩中に注して置いた。【二】天祿　下の石渠と共に皆漢の閣名、乃ち書を藏せし處。【三】鄴侯　唐の李泌、前に書軒の詩中に注して置いた。【四】世南行祕書　國朝雜事に、唐の太宗、出でて幸す、有司書を載せて以て從はむことを請ふ。帝曰く、須ひず、虞世南、ここに在り、行祕書なり」とある。【五】中郎　蔡邕、論衡を得て議論大に進みしこと、前に和二陶答二龐參軍一、及び廣陵散大夫の詩中に注して置いた。【六】說奇　前に和二陶答二龐參軍一、及び廣陵散大夫の詩中に注して置いた。

知君好事家有酒。　君が好事、家に酒あるを知り、
化爲老人夜扣關。　化して老人となつて、夜、關を扣く。
留侯之孫書滿腹。　留侯の孫、書、腹に滿つ、
玉函寶方何用讀。　玉函寶方、何ぞ讀むを用ひむ。
濠梁空復五車多。　濠梁、空しく復た五車多く、
圯上從來一編足。　圯上、從來、一編足れり。

牢。前に復次韻謝一道景脫一の詩中に注して置いた。【七】化爲老人　王註には酉陽雜俎を引いて、開元中、雨を祈り、龍が老人に化して、救を孫思邈に求めしことを引き、又「或は曰く、張氏、實に龍の老人に化するに逢ふの事あり、亦た此を借りて之を用ふ」とある。【八】濠梁　惠子の事、前に觀魚臺の詩中に注して置いた。【九】五車　莊子に「惠子多才にして、その書五車」とある。【一〇】圯上　張良が圯上に於て老人から書を受けしこと、前に和三張郎中一及び回先生過三湖州一の詩中に注して置いた。

【題義】　說明に及ばぬ、揮麈後錄に據れば、張競辰は、華陽張德遠の父だといふこと、その他の事は、さつぱり分からぬ。

【詩意】　君が家は、四壁山立、さながら、司馬相如の舊宅の如く、何物もないが、唯だ天祿・石渠の兩書閣を卷いて呑んだかと思ふばかり、藏書だけは極めて豐富で、鄴侯の三萬軸のみでなく、行祕書と稱せられた虞世南に匹敵する位。兒童等は、手を拍いて、頻りに笑つて居るから、何事ぞと問へば、空腹でありながら、物物しく經義を論じて居るのがをかしいといつた。蔡邕が異書を得たのも、物の數ならず、しばらく、揚雄の爲に、あべこべに奇字を說いて聞かせることも出來る。眺めやれば、清江一道、山を縈つて碧玉の環の如く、その淵には、むかしから、老龍が住んで居る。君は、物數奇にも、家に酒を貯へて置く爲に、その龍が老人に化けて、夜ごと來て、門を叩くといふ話。君は、留侯の末裔であつて、素養も深く、書物は腹に一ぱいであるから、玉函に藏したる仙家の祕方などは、全く讀む必要もない。元來、濠梁に於て、莊子と魚の樂を論じた惠施の如きは、その書、五車に餘ることを誇つて居るが、何の役にも立たず、ただ精讀して善く運用するならば、圯上の一編だけでも、十分である。

【餘論】　紀昀は「亦た殊に漫易」といつて居る。

劉壯輿長官是是堂

劉壯輿長官の是是堂

開燕言仁義。是非安可無。
非非義之屬。是是仁之徒。
非非近乎訕。是是近乎諛。
當爲感麟翁。善惡分錙銖。

開燕、仁義を言ふ、是非、安んぞ無かるべけむや。
非を非とするは義の屬、是を是とするは仁の徒。
非を非とするは訕に近く、是を是とするは諛に近し。
當に麟を感ずる翁となつて、善惡、錙銖を分つべし。

抑爲阮嗣宗。臧否兩含糊。抑も、阮嗣宗となつて、臧否、兩つながら含糊。
劉君有家學。三世道益孤。劉君、家學あり、三世、道、益す孤なり。
陳古以刺今。紬史行天誅。古を陳べて、以て今を刺り、史を紬いて天誅を行ふ。
皎皎大明鏡。百陋逢一姝。皎皎たる大明鏡、百陋、一姝に逢ふ。
鶚立時四顧。何由擾羣狐。鶚、立つて時に四顧、何に由つてか、羣狐を擾さむ。
作堂名是是。自說行坦途。堂を作つて、是是と名づく、自ら說いて、坦途を行くと。
孜孜稱善人。不善自遠徂。孜孜、善人を稱す、不善、自ら遠く徂く。
願君置座右。此語禹所謨。願はくは、君、座右に置け、この語、禹の謨とするところ。

【字解】【一】 閒燕　國語に「管子曰く、むかし、聖王の士を處するや、閒燕に就かしむ。閒燕すれば、父は父と義を言ひ、子は子と孝を言ふ」とあり、漢書貨殖傳に「士相與に仁誼を閒燕に言ふ」と見ゆ。【二】 臧否含糊　孔子を云ふ、前に李白の詩中に注して置いた。【三】 阮嗣宗　卽ち阮籍、前に阮籍嘯臺の詩中に注して置いた。【四】 紬史　史實を引き出して對比する。【五】 鶚立　李白の詩に鶚立重飛翻とある。【六】 遠徂　遠ざかつて立ち去る、左傳に「羊舌職曰く、善、これを聞く、禹、善人を舉すれば、不善人は遠し」とある。【七】 座右　王註に「後漢の崔瑗、座右の銘あり」と見ゆ。

【題義】 宋史に「劉義仲、字は壯輿、父恕、卒して七年、資治通鑑成るや、その勞を追錄して、義仲を郊廟齋郎に官す。政和中、汝州より召されて、編修官となり、京師に至る。權要に謁せず、未だ幾ならず、致仕して、廬山に歸る。一時の公卿、詩を賦し、三世、美を濟す、尤も易からずといふ」とあり、陳後山の是是堂記略に「劉子義仲、鉅野に佐たり、屋を架して以て居り、名づけて是是の亭といふ。その大父凝之、仕へしが、合はずして去り、廬山の下に老ゆ。その父道原、面のあたり、人の短長を數め、權貴を避けず、卒に窮して以て死す。而して、天下重きを歸す。今、劉の博覽偉辨、剡身苦思、すでに其世を嗣ぎ、善に向ひ、惡を歸とする、亦た其二父に減せずといふ」とある。この詩は、劉義仲の是是堂に寄題したので、長官といへば、その西江に令たる時であらう、但し、その何の邑たるかは分からない。

【詩意】 閒燕の際、仁義の話をする以上は、他を是非することは、決して無い譯には行かぬ。それも決して惡いことではなく、非を非とするは義の屬、是を是とするは仁の仲間である。しかし、非を非とすれば、訕るに近く、是を是とすれば、諛ふに近く、そこで、或は之を差控へやうとする人があるので、かの獬豸に感じた孔子の如く、善惡に就いて、極めて微細な處まで辨別して、これを判定するか、然らざれば、阮籍の如く、善しとするも、惡しとするも、兩つながら、曖昧にして置く外はない。劉君は、家學を傳へ、すでに三世に亙つて、道、益す孤、他に其類なく、古しへを陳べて今を諷刺し、史上の事實に對して天誅を行はれる。たとへば、皎皎たる大明鏡が照らすと、大抵の物は醜陋で、美

人は滅多に無きが如く、鶚が立つて、時に回顧する外、羣狐を擾亂せしむるものなきと同じである。そこで、堂を作つて、是是と名づけ、自分では坦途を行く積り、孜孜として善人を稱揚すれば、不善人は、自然と遠ざかつて去る譯である。願はくは、君よ、これを座右の銘とすべく、善人を稱すれば、不善人は遠ざかるといふのは、取りも直さず、禹の謨訓であつて、必ず之を學ばねばならぬ。

【餘論】紀昀は「太だ理路に涉る」といつて居る。

絶句

柴桑春晩思依依。
屋角鳴鳩雨欲飛。
昨日已收寒食火。
吹花風起却添衣。

【題義】絶句とは、格別、はッきりした題も設けられぬ場合に用ふるのが普通である。唐人中には、律の半ば出來たままの者を稱したこともあるが、後世では、さうでもない。

【詩意】柴桑の地、春すでに暮れ、思依依として盡きず、屋角には、鳩が鳴いて、雨が降らうとして居る。昨日、すでに寒食の火を收めたのに、花を散らす風が吹き起つて、寒さを催し、却つて、衣を添へしめる程である。

【餘論】紀昀は「小しく情致あり、然れども、東坡の吐屬に似ず」といつて居るが、いかさま、さうであらう。

夢中絶句

楸樹高花欲插天。
暖風遲日共茫然。
落英滿地君方見。
惆悵春光又一年。

【題義】この詩は、夢の中に作つた絶句である。

【詩意】楸の樹の高い梢に咲いた花は、天に插むが如く、その爲に、暖き風も、暮るるに遲き日影も、ともに、ぼんやりして居る。落花は、地上に鋪いて、君の御覽の通り、春光すでに盡きむとして、今年も、亦た惆悵することを免れない。

【字解】【一】楸樹　雅に「葉小にして譏あるは檟、葉大にして譏あるは楸」とあり、詩眼に「楸は將に夏ならむとして乃ち繁し」とあり、杜甫の詩に楸樹高花細遠天とある。
【二】落英　落花に同じ。

【餘論】紀昀は「亦た東坡の語に似ず」といつて居る。

予昔作壺中九華詩、其後八年、復過湖口、則石已爲好事者取去、乃和前韻以自解云

予、むかし、壺中九華詩を作る。その後八年、復た湖口を過ぐれば、石、すでに好事者に取り去らる。乃ち前韻に和して、以て自ら解すと云ふ

江邊陣馬走千峰。江邊の陣馬、千峰を走らす、
問訊方知冀北空。問訊、方に知る、冀北の空しきを。
尤物已隨清夢斷。尤物、すでに清夢に隨つて斷え、
眞形猶在畫圖中。眞形、なほ畫圖の中に在り。
歸來晚歲同元亮。歸り來つて、晚歲、元亮に同じく、
却掃何人伴敬通。却掃、何人か敬通を伴はむ。
賴有銅盆修石供。賴に銅盆の修石に供するあり、

【字解】【一】陣馬　戰馬に同じ。【二】冀北　名馬の產地。【三】尤物　すぐれた物、東坡の自註に「劉夢得、九華を以て造化の一尤物となす」とあつて、劉禹錫の九華山歌に、九華山、自是造化一尤物、爲能籍甚千人間」とあるを指す。【四】畫圖　東坡の自註に「道藏に五嶽眞形圖あり」と見ゆ。道藏とは、道敎關係の一大叢書で、佛敎の大藏經に對して云ふ。【五】元亮　陶淵明の一字。【六】敬通　馮衍の字、前に與「周李」

仇池玉色自璁瓏。仇池の玉色、自ら璁瓏。

游三徑山」の詩中に注して置いた。【七】銅盆　東坡の自註に「家に銅盆あり、仇池石を貯ふ、正綠色にして洞あり、水、背に逆す。予、又かつて怪石を以て佛印師に供し、怪石供一篇を作る」とある。

【題義】予は、曩に湖口に於て、壺中九華といふ名石を見たから、その詩を作つた。然るに、八年後の今日、再び湖口を過ぎると、その石は、既に好事者に取り去られて仕舞つた。そこで、前詩の韻を用ひ、この詩を作つて、自ら遺憾に思ふ心を解いたといふのである。

【詩意】江邊の戰馬は、千峰を走らすが如く、その馬は、どこかへ往つて仕舞つて、問ひ尋ねると、冀北の野も爲に空しといふ有樣。折角の尤物は、清夢に隨つて、その跡を留めず、九華山の樣な其眞形は、圖畫の中に殘つて居る。身は、晚年、ここに歸り來つて、陶元亮の如く、妻妾に取り殘され、掃除などして相伴ふ人だになきは、まさしく、馮敬通の樣である。しかし、幸にも、銅盆の中には、長い石を貯へてあつて、仇池の名もゆかしく、玉の如く、自然に玲瓏として居るから、いささか、自ら慰めることが出來る。

次韻郭功甫觀予畫雪雀有感二首

郭功甫が予の畫雪雀を觀て感あるに次韻す　二首

早知臭腐卽神奇。　早く知る、臭腐は卽ち神奇、
海北天南總是歸。　海北天南、すべて是れ歸る。
九萬里風安稅駕。　九萬里の風、安んぞ稅駕せむ、
雲鵬今悔不卑飛。　雲鵬、今悔ゆ、卑く飛ばざるを。

【語義】郭功甫、名は祥正、當塗の人。その小傳は、前に郭祥正家詩の題註中に掲げて置いた。功甫の原作は、態態惠州にまで寄せたので、

平生才力信瑰奇。今在窮荒豈易歸。正似雪林枝上畫。羽翰難好不能飛。

とあり。後に、東坡の北歸する時、又前韻を用ひて、左の詩を寄せた。

秋霜春雨不同時。萬里今從海外歸。已出網羅毛羽在。却尋雲跡帖天飛。

そこで、東坡は、取り敢へず、これに次韻したのである。

【詩意】大道の上より見て、臭腐は卽ち神奇であるといふことは、早くから知つて居つて、予は、今はじめて赦され、海北天南、これから愈よ歸り行くのである。たとへば、九萬里の風に駕するが如く、

【字解】〔一〕臭腐　莊子に見ゆ、前に次韻魯直見贈の詩中に注して置いた。〔二〕稅駕　車を止める。

何處にか車を停むべき。この位ならば、雲井を度る鵬に比すべき身は、その初、なぜ低く飛ばなかつたかと、それを今更後悔するので、つまり、あまり高く飛んだものだから、歸るにも容易でない樣に成つたのである。

【餘論】乾隆御批に「謫宦を以て摶扶となし、卑飛を厚祿に擬し、偶ま不平の鳴を露はす、翻案獨絕」とある。但し、紀昀が「起句粗」といつたのは、大に當つて居る。

可憐倦鳥不知時。　憐むべし、倦鳥、時を知らず、
空羨騎鯨得所歸。　空しく羨む、騎鯨歸るところを得たるを。
玉局西南天一角。　玉局、西南天の一角、
萬人沙苑看孤飛。　萬人、沙苑に孤飛を見る。

【詩意】身は、倦飛の鳥の時を知らざるが如く、今でも、まごまごして居るので、かの鯨に跨つて、逸早く歸るところを得たるものを羨むことの果敢なさ。今次、わが提舉となりし玉局觀は、蜀の成都、卽ち西南の一角に在るので、人人は、沙苑に在つて、むかし徐佐卿が鶴に化して、遙に其方に飛

【字解】〔一〕騎鯨　李白の事、前に次韻魯直見贈の詩中に注して置いた。〔二〕玉局　前に送蘇蒙及び過嶺の詩中に注して置いた。〔三〕沙苑　徐佐卿が鶴に化せし事、前に、白鶴峰新居欲成の詩中に注して置いた。

んで行くのを眺めた樣にして居るであらう。

次韻法芝舉舊詩一首　法芝の舊詩を舉ぐるに次韻す　一首

春來何處不歸鴻。　春來、何の處か歸鴻ならざらむ、
非復羸牛踏舊蹤。　復た羸牛の舊蹤を踏むに非ず。
但願老師眞似月。　但だ願ふ、老師の眞に月に似たるを、
誰家甕裏不相逢。　誰が家の甕裏か、相逢はざらむ。

【字解】【一】何處不歸鴻　王註に「建中靖國の初、惠諸公の廢されたるものを起す、先生又請うて常州に歸るを得たり、この詩、蓋し以て興するなり」とある。【二】羸牛　王註に「先生、舊と詩あり、法芝に與へて云ふ、圓轉如二羸牛一、步步踏二陳跡一、と。故に今復た牛の如きに非ずといふなり」とある。【三】眞似月　王註に「先生、法芝に與へて、又云ふ、老芝如二盥月一、烱烱時一出、と。故に今側いふのみ」とある。【四】甕裏　馮應榴の案に「任註山谷集に、高僧傳、酷頭和尚の頌を引く、揚二起階甕一見二天下一、天下元來在二甕中一、甕中元來有二天下一、と。甕裏の字に至つては、佛書に習見す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。法芝、名は曇秀、その唱和の詩は、前に揚州惠州の卷中に見えて居る。

【詩意】春に成つてからは、何處へ往つても、歸る雁ばかりで、自分とても、最早、疲れた牛が舊い跡を踏むのではない。ただ願はくは、老師に於ても、本當に雲間の月の烱烱たるが如くあつて欲しいので、さうすれば、甕裏に比すべき天下に於て、到る處、相逢ふことが出來るであらう。

次舊韻贈清涼長老

過淮入洛地多塵。　淮を過ぎ、洛に入る、地に塵多し、
舉扇西風欲汚人。　扇を舉ぐれば、西風、人を汚さむと欲す。
但怪雲山不改色。　但だ怪しむ、雲山、色を改めざるを、
豈知江月解分身。　豈に知らむや、江月の分身を解するを。
安心有道年顏好。　安心、道あれば年顏よし、
遇物無情句法新。　物に遇ふも無情、句法新なり。
送我長蘆舟一葉。　われを送る、長蘆舟一葉。
笑看雪浪滿衣襟。　笑つて看る、雪浪の衣襟に滿つるを。

【字解】【一】西風欲汚人　庾亮の事、前に王廷老退居の詩中に注して置いた。【二】雲山　王註に「これ以て清涼長老を言ふなり。杜子美の詩、河漢不二改色一、而して、意は、多塵の中に在つて之を見るを以て、故に怪むべきなり」とある。【三】長蘆　前に、僕所二至未一嘗出游一の詩中に注して置いた。

【題義】説明に及ばぬ。清涼長老は、前に卷三十七に贈詩があつて、その題下に注して置いた。

【詩意】これより淮を過ぎて洛に入る途すがら、塵埃多く、さながら、かの王導が、扇を西風に擧げて、庾亮の塵、人を汚すといつた樣であらう。しかも、この間、長老が雲山の如く、その色を改めざるは、不思議であるが、予は、江月が何處にでも在るが如くに、分身する方法を知らぬから仕方がな

い。さはれ、安心の道を得れば、老いても顔が澤やかであるし、物に遇ふも絶えて情を動かさざれば、詩を作つても、句法が新警である。これから、蘆にまがふ一葉の舟で、予を送つて呉れたならば、雪の如き波がしらの衣巾に注ぐのを笑ひながら、眺めて行くであらう。

睡起聞米元章冒熱到東園送麥門冬飲子

睡起、米元章の熱に冒さるるを聞き、東園に到りて、麥門冬飲子を送る

一枕清風直萬錢。　一枕の清風、直萬錢。
無人肯買北窗眠。　人の肯て北窗の眠を買ふなし。
開心暖胃門冬飲。　心を開き、胃を暖む、門冬の飲、
知是東坡手自煎。　知る是れ、東坡が手自ら煎るを。

【語義】東園は、常州に在るだらうといふこと。そして、常州には、東坡所有の田園がある。麥門冬は、本草別錄に「葉は韮の如く、根は麥に似て鬚あり、冬を經て凋まず、故に又忍冬と名づく」とある。この詩は、睡さめし時、米元章が熱病に苦んで居ることを聞いたから、東園に到著せし後、忍冬の煮汁を送り、仍つて、これを賦したといふのである。

【詩意】一枕の清風は、萬錢を値すべく、これを買つて、樂しげに北窓に眠る人はない。君が熱病に苦んで居るのは、まことに御氣の毒である。そこで、胸を開き、胃を暖めて、一日も早く全快する樣にと、忍冬を煮た飲料を送呈するので、これは、東坡自身が煮たので、その心づくしの程を汲み取つて貰ひたい。

【餘論】紀昀は「竟に是れ藥店の榜子」といつて居る。卽ち藥屋の看板の樣だといふので、辛辣ながら、まことに痛快で、且つ氣が利いて居る。

夢中作、寄朱行中

夢中の作、朱行中に寄す

舜不作六器。誰知貴璵璠。
舜、六器を作らずんば、誰か璵璠を貴ぶを知らむ。
哀哉楚狂士。抱璞號空山。
哀いかな、楚の狂士、璞を抱いて空山に號ぶ。
相如起睨柱。頭璧與俱還。
相如、起つて柱を睨し、頭璧、與に俱に還る。
何如鄭子產。有禮國自閒。
何ぞ如かむ、鄭の子產、禮あり、國、自ら閒なるに。
雖微韓宣子。鄙夫亦辭環。
韓宣子を微かつすと雖も、鄙夫、亦た環を辭す。
至今不貪寶。凜然照塵寰。
今に至るまで、寶を貪らず、凜然として塵寰を照らす。

【字解】【一】六器　五等諸侯の持つ玉。【二】璵璠　即ち寶玉。【三】楚狂士　卞和の事、前に哀公濟和ノ詩の詩中に注して置いた。【四】相如　即ち藺相如、前に銅劍易ノ硯の詩中に注して置いた。【五】鄭子產　左傳に「晉の韓宣子、環あり、その一、鄭商に在り。宣子、これを鄭伯に謂ふ。子產、與へずして曰く、大國の求、理以て之を斥くるなくんば、何の鬻くことかあらむ。宣子、私に子產に賂して曰く、子、起に命じて、かの玉を舍かしむ、これ我に玉を賜うて、吾が死を免れしむるなり、敢て手に藉きて拜せざらむや」とある。

【題義】朱服、字は行中、東坡と游ぶに坐して、海州團練副使に貶せられ、徽宗の初には、廬に守として廣に移つた。この詩は、東坡絶筆の作で、その事を正言するを欲せざるより、わざと夢中の作に託したのである。

【詩意】人の才は、玉の如きものである。もし舜が六器を作らなければ、誰か寶玉の貴ぶべきを知るべき。楚の卞和が璞を抱いて、空山に哭して居たのは、氣の毒であつたし、藺相如は、起つて柱を睨み、やがて、その頭と璧とは、無事に趙に歸つて來た。鄭の子產は、禮を守りしが故に、その國は、自然しづかであつたが、相手が韓宣子でなくとも、鄙夫も、環を辭したであらう。予は、今に至るまで、この寶を貪らず、つまり、この才を世用に充てむが爲に刻苦したので、凜然として、この塵の世を照らす上は、亦た以て瞑すべしである。

答徑山琳長老

徑山の琳長老に答ふ

與君皆丙子。各已三萬日。君と皆丙子、各すでに三萬日。
一日一千偈。電往那容詰。一日一千偈、電往、那ぞ詰るべけむや。
大患緣有身。無身則無疾。大患は身あるに緣る、身なければ疾なし。
平生笑羅什。神咒眞浪出。平生、羅什を笑ふ、神咒、眞に浪りに出づ。

【字解】【一】丙子　景祐三年。【二】三萬日　東坡の死ぜし建中靖國元年七月二十八日に至るまで、實に二萬三千四百六十日、三萬は大數を擧げたのである。【三】一日一千偈　晉書に「鳩摩羅什、未だ終らず、少日、四大愈えざるを覺ゆ、乃ち口に三藏神咒を出し、外國弟子をして之を誦せしめ、以て自ら救ふ。未だ力を致すに及ばず、轉た危殆を覺ゆ、ここに於て、疾を力め、衆僧と別を告ぐ」とある。

【題義】東坡の疾を示せし時、徑山長老の維琳といふ坊主は、之を問うて、左の一偈を示した。

扁舟駕三蘭陵。自援舊風日。君家有二天人一。雄雄維摩詰。我口呑二文殊一。千里來問レ疾。若以レ默相酬。露柱皆笑出。

そこで、東坡は、その韻を用ひて、この詩を作つたので、後二日、終に長逝した。時に歳六十六。

【詩意】君と共に、丙子の年の生まれであるから、すでに三萬日を經過した。この間、毎日一千偈を誦したが、歳月は電の如く往き、格別詰ることも出來ぬ。大患は、此身あるに因り、身さへ無ければ、疾も亦た無い筈である。かく悟り澄まして、かの鳩摩羅什が、疾革らむとせし時、神咒を唱へ出し

たのは、まことに下らぬ事であると、平生笑つて居たが、今にして、愈よそれと思ひ當つたことである。

【餘論】紀昀は「この一卷、皆冗漫淺易の作、蓋し是に至つて、菁華竭く」といつて居るが、何は兎もあれ、長逝の年、六十六歲の作であるから、致方の無いことであらう。

蘇東坡詩集　卷四十六

帖子口號詩

今體詩　六十五首

春帖子詞

皇帝閣、六首

(一)
霭霭龍旂色、琅琅木鐸音。
數行寛大詔、四海發生心。

霭霭たり龍旂の色、琅琅たり木鐸の音。
數行、寛大の詔、四海、發生の心。

【字解】【一】龍旂　龍を畫いた天子の御旗。【二】木鐸　書經に「每歲孟春、遒人、木鐸を以て路に徇ふ」とあつて、その傳に「遒人は宣命の官、木鐸は金口木舌、文教を振ふ所以」とある。【三】寛大詔　後漢書に「立春の日、寛大の詔を下して曰く、三公に制詔す、春に方つて、東作、始を敬し、微を慎め」とあり、又侯霸傳に「光武、霸を徵して尚書令に拜し、前世の善政法度、時に益あるものを條奏せしめて、皆これを施行す。每春、寛大の詔を下し、四時の令を奉ず、皆霸の建つるところなり」とある。【四】發生心　爾雅に「春を青陽となし、發生となす」とあり、王冰の素問註に「六氣十八候、皆青陽、發生の令を布く、故に生を發ふものは、必ず謹んで天時を奉ず」とある。

【題義】帖子は賀帖、祝日に際して、朝廷の向向に上るので、多くは、近體の詩を用ふることが、

この頃の慣例に成つて居る。この春帖子は、東坡が翰林學士たりし時、哲宗の元祐三年の立春に際し、皇帝・太皇太后・皇后・皇太妃の四處に分つて、それぞれ奉呈したのである。何故、皇帝閤といふ樣に、各〻閤の字を付けたかといふと、閤は居室の傍なる小座敷で、書物・器玩などを貯藏する處、もと皇帝・太皇太后等に獻ずるのであるが、直接に名ざすのは失禮である處から、閤に向つて呈出するといふのである。

【詩意】龍旂の色は、靄靄として霞をこめ、木鐸の音は、琅琅として鳴り響いて居る。例に因つて、數行に寫した寬大の「詔」を發布されたのは、春に成つて、四海の萬物が發生する自然の心に負かず、まことに、結構なことである。

【餘論】紀昀は「節閤の詩、體制に限られ、東坡と雖も、亦た長を見るところなし」といつて、この卷を通じて、すこしも評語を著けて居ない。そこで、予も亦た之に倣うて、一一批評することを避けて置く。

暘谷賓初日。清臺告協風。
願如風有信。長與日俱中。

【字解】【一】暘谷　暘は明、日が出て天下はじめて明かなる故に云ふ、日の出づる處。【二】賓　郷く。【三】協風　立春の融風。

【詩意】暘谷に於ては、朝日を迎へ、奇麗に掃除した高臺には、長閑けき春風が初めて音なつた。願はくは、この風の信あるが如く、且つ長しへに、太陽と共に中天に位して、決して沒し去ることの無い樣にありたいものである。

草木漸知春。萌芽處處新。
從今八千歲。合抱是靈椿。

【字解】【一】合抱　兩手でかかへる。【二】靈椿　列子に「上古に大椿といふものあり、八千歲を以て春となし、八千歲を以て秋となす」とあり、又莊子にも見えて居る。

【詩意】草木は、次第に春を知つて、新しい芽は、處處に萌して來た。これより八千歲の高壽を保つて、一かかへもある樣に生長するのは、卽ち大椿であらう。

聖主憂民未解顏。聖主、民を憂へて、未だ顏を解かず、
天教瑞雪報豐年。天、瑞雪をして豐年を報せしむ。
蒼龍挂闕農祥正。蒼龍、闕に挂つて、農祥正しく、

【字解】【一】解顏　ほほ笑む。【二】蒼龍　星の名で、農事を司る。【三】春田　天子親耕の禮、宋史禮志に「籍田の禮、宋初、歲ごとに常に講

老稚相呼看藉田。

老稚、相呼んで、藉田を看る。

郊後の吉亥を以て、皇帝親ら先農を享し、三獻を備へ、三推の禮を行ふ。景德以後、制に因つて損益し、更に參殿を餙して思文殿となす」とある。

【詩意】わが聖天子は、民を憂へて、ほほゑみもせずに居られた處が、天は瑞雪を降して、豐年を報せしめた。やがて、蒼龍の星が高く宮門の上に挂り、農事の佳祥、正しきを示すと、そこで、親耕の禮を行はれ、老少輩相呼んで、その盛儀を拜觀に出かけることであらう。

昨夜東風入律新。
玉關知有受降人。
聖恩與解河湟凍。
得共中原草木春。

昨夜、東風、律に入つて新なり、
玉關、知る降人を受くるあるを。
聖恩、與に解く河湟の凍、
共にするを得たり、中原、草木の春。

【詩意】今日は、立春であつて、東風は、昨夜すでに新に太簇の律に叶うて吹き度り、玉門關では、北夷の降人を受け付けることであらう。やがて、聖恩は、爲に河湟の凍を解き、ここも、中原と同じく、草木欣欣として、春に榮えることであらう。

【字解】【一】入律　月令の疏に「律、太簇に中る、惟れ正月の氣を主る、宜しく東風と凍を解くべし」とある。【二】玉關　卽ち玉門關、前に聞二洮西捷報一の詩中に注して置いた。【三】河湟　甘肅省中に於ける黃河附近の地で、古しへより青海を以て知られて居る。前に和二王晉卿一の詩中に注して置いた。

翰林職在明光裏。
行樂詩成拜舞中。
不待驚開小桃杏。
始知天子是天公。

翰林の職は、明光の裏に在り、
行樂の詩は成る、拜舞の中。
待たず、驚いて小桃杏を開かしむ、
始めて知る、天子は是れ天公。

【詩意】翰林學士は、その職務として、明光宮中に奉仕し、ここに拜舞して、行樂の詩を上つた。すると、まだ待たぬ間に、桃だの、杏だのが遽てて咲き出したので、して見ると、天子は取りも直さず、天公で居らせられることが分かつた。

太皇太后閣、六首

太皇太后閣　六首

琱刻春何力。欣榮物自知。
發生雖有象。覆載本無私。

琱刻、春、何の力ぞ、欣榮、物自ら知る。
發生、象ありと雖も、覆載、本と私なし。

【字解】【一】 瑪刻　彫刻に同じ。【二】 發生　前首に見ゆ。

【題義】 宋史に「宣仁聖烈高皇后、英宗、婚を濮邸に成す、神宗立つて、尊んで皇太后となし、哲宗立つて、尊んで太皇太后となす」とある。

【詩意】 彫刻して、花を咲き出さしむるに就いて、春は何の力あるべき、欣欣として榮えるのは、物それ自身に備はつた作用である。發生の象は、歴然として明かであるが、天は覆ひ、地は載せ、もとより、公平無私のものである。

小殿黄金榜。珠簾白玉鉤。
一聲雙日蹕。春色滿皇州。

【字解】【一】 小殿　延和殿を云ふ。【二】 黄金榜　金を塗つた立札。【三】 雙日蹕　この太皇太后は、哲宗即位の初、權りに同じく政を聽き、十日に二日づつ前殿に出御に成つた。【四】 春色　これは謝朓の全句である。

【詩意】 延和殿に於ては、黄金の立札があり、珠簾は卷き上げられて、白玉の鉤で止めてある。太后が、警蹕の聲に隨つて、ここに出御されると、長閑けき春色が皇州に滿つる樣な想がする。

仗下春朝散。宮中晝漏稀。
兩廂休侍御。應下讀書幃。

【字解】【一】 仗下　仗は儀仗。【二】 春朝　春の日の朝會。【三】 宮中　太皇太后は崇慶宮に居られた。【四】 兩廂　太皇太后の御居間の左右なる部屋をいふ。

【詩意】 儀仗の立てる邊に、退出して、春の日の朝會が散ずると、崇慶宮の中、極めて靜かにして、晝は水時計の音さへも稀に聞こえる位、やがて、侍御の者どもは、御暇を賜はつて、兩廂に休息して居るが、太皇太后は、幃を下して、讀書を成さつて居られるであらう。

五日占雲十日風。
憂勤終歲爲三農。
春來有喜何人見。
好學神孫類祖宗。

【字解】【一】 五日　五風十雨てふ語に本づいたので、前に、答三同僚賀雨の詩中に注して置いた。占雲は、即ち雨ふること。そこで、馮應榴の案に「先生の詩、倒用に似たり、或は訛刊に係る」とある。【二】 三農　五日に雲を占し、十日に風、憂勤終歲、三農の爲にす。【三】 好學　哲宗好學の事、前に九月十五日題「御書」の題下に注して置いた。

【詩意】 五日目には、雲を占うて雨を候し、十日目には、風の吹くのを待つて居るといふ樣に、終年即ち平地山澤、前に西新橋の詩中に注して置いた。

憂勤されるのは、三農の爲である。春來、喜ぶべきことがあるが、宮外、何人か之を見るべき、神孫、卽ち今上の學を好まれることは、祖宗に類し、やがて、太平の治を望むべきは、まことに結構なことである。

共道十年無臘雪。　共に道ふ、十年、臘雪なしと、
且欣三白壓春田。　且つ欣ぶ、三白の春田を壓するを。
盡驅南畝扶犂手。　盡く、南畝扶犂の手を驅りて、
稍發中都朽貫錢。　稍く發す、中都朽貫の錢。

【詩意】最近十年の間、臘月に雪の降つたことなく、いつも、春になると、少し降つて、麥に宜しく、まことに目出たい。そこで、盡く驅つて南畝の農夫を發して、耕作に從事せしめ、都に貯へてあるさしの朽ちた錢を發して、彼等に支給された。

【字解】【一】臘雪　臘月の雪。【二】三白　雪が三寸降り積むこと、前に江上値雪、及び次韻陳四一の詩中に注して置いた。【三】中都　都中に同じ、卽ち汴京。【四】朽貫錢　貫はさし、貯藏久しきを經、さしが朽ちたと云ふ義。宋史に「哲宗元祐三年春正月、廣惠倉を復す。雪寒、京西の穀五十餘萬石を發し、その直を損して、以て民を紓くし、上元の游幸を罷む」とあつて、この首は、卽ちこの事を記したのである。

不獨清心能省事。　ひとり、心を清くして、能く事を省くのみならず、
應緣克己自銷兵。　應に己に克つて、自ら兵を銷すに緣るなるべし。
傳聞塞外千君長。　傳へ聞く、塞外の千君長、
欲趁新年賀太平。　新年を趁うて、太平を賀せむと欲するを。

【詩意】今日、清平の治は、唯だ上に在る方方が心を清くし、事件を生ぜぬ樣にされた爲めのみではなく、その一は、己に克つて、侵略を事とせず、自然、武器を鑄潰したにも因るであらう。傳聞すれば、塞外なる多くの君長どもは、皆これに感激し、新年を待ち、來朝して、太平の御祝ひを申し上げやうとして居る。

皇太后閣、六首

寶冊瓊瑤重。新庭松桂香。　寶冊、瓊瑤重く、新庭、松桂香ばし。
雪消春未動。碧瓦麗朝陽。　雪、消えて、春、未だ動かず、碧瓦、朝陽に麗かなり。

【字解】【一】寶冊　尊號を上りし御沙汰書、宋史に「尊號の册命、大臣、册文を撰し、及び册寶に書し、官を遣して、天地祖宗社稷に告げしむ。皇太后の册禮には、天子、嗣皇帝と稱す、餘、概れ尊號の儀の如し」とある。

【題義】宋史に「欽聖憲肅皇后は、宰相敏中の曾孫なり。神宗、潁邸に於て安國夫人に封じ、卽位、立てて皇后となし、哲宗立ち、尊んで皇太后となす」とある。

【詩意】皇太后宣下の寶冊は、瓊瑤を以て飾られて重く、新宮の庭上には、松桂が香を含んで居る。雪消ゆるも、春景色は、まだ動かぬ樣であるが、碧瓦の上に朝日の麗はしく輝くを見れば、流石に、暖かくして長閑である。

瑞日明天仗。仙雲擁壽山。
倚欄春晝永。金母在人間。

【字解】【一】天仗　宮中の儀仗。【二】倚欄　一に椅闌に作つた方が正しい樣である。洞冥記に「景帝、芳蘭閣を攻めて椅闌殿を造むるを以て、亦た王母と號す」とある。【三】金母　西王母傳に「金母は、神洲伊川に生まる、陰靈の氣を主り、西方を主る」とある。

【詩意】目出たき日影は、階下の儀仗を照らし、さながら、仙雲が壽山を擁するが如くである。猗蘭殿に比すべき深宮の中、春の日、愈よ長く、さながら、西王母が人間に來降した樣である。

朝罷金鋪掩。人間寶瑟塵。

【詩意】朝、罷んで金鋪掩ふ、人間、寶瑟の塵。

欲知慈儉德。書史樂青春。

【字解】【一】金鋪　黃金を數き伸ばして飾としたる扉。

【詩意】朝會、すでに罷めば、皇太后は、御居間に御歸りになつて、黃金を飾れる扉を閉され、寶瑟は、久しく御せざるに因つて、塵を帶びて居る。しかし、慈悲勤儉の德の何物なるかを知らうとして、春の日長に、古しへの書史を御覽せられるのは、一しほ結構の事で、方今の至治も、まことに偶然でないことが分かる。

仙家日月本長閒。送臘迎春亦偶然。
翠管銀罌傳故事。金花綵勝作新年。

【詩意】天上の日月は、本來長しへに淸閒であつて、臘を送り、春を迎ふることなどは、偶然である。しかし、笛を吹き鳴らしつつ、銀の酒壺を賜はることが、先例に成つて居るし、金花や、彩絹の造花を簪して、新年を祝ふのは、さすがに美美しいことである。

【字解】【一】翠管銀罌　杜甫の詩に「口脂面藥關恩澤、翠管銀罌下九霄」とある、翠管は笛、銀罌は酒壺。【二】綵勝　彩つた絹の造花、前に立春日剌中の詩中に注して置いた。

彤史年來不絕書。彤史、年來、書を絕たず、
三朝德化婦承姑。三朝の德化、婦、姑を承く。
宮中侍女減珠翠。宮中の侍女、珠翠を減じ、
雪裏貧民得袴褶。雪裏の貧民、袴褶を得たり。

【詩意】奥祐筆は、年來、書くことを休めず、日日、記錄を旨とし、そして、三朝德化の然らしむるところ、婦は姑を承け續ぎ、皇太后は、太皇太后の盛德に倣つて居られる。されば、節儉を第一とし、宮中の侍女は、珠翠の飾りを減じ、その代り、雪に惱む貧民どもは、股引を賜はつたといつて喜んで居る。

【字解】【一】彤史　新唐書に、「宮官に彤史二人あり、正六品」とある。つまり、奥祐筆といつた樣なものである。【二】三朝　英宗・神宗・哲宗の三世をいふ。【三】婦承姑　新婦は、何事につけても、姑女を承け繼ぐといふこと。【四】珠翠　翠は翡翠の羽、妝飾に供する。【五】袴褶　股引の類、馮應榴の案に「宋史、向皇后傳、愛民崇儉の事を聞けば、喜、色に形はる、この二句を以て相證すべし」とある。

邊庭無事羽書稀。邊庭、事なくして、羽書、稀なり、
閒遣詞臣進小詩。閒に詞臣を遣して、小詩を進む。
共助至尊歌喜事。ともに至尊を助けて喜事を歌ひ、

【字解】【一】邊庭　卽ち邊塞、邊境。【二】羽書　羽檄、至急を要する警報。

今年春日得春衣。今年春日、春衣を得たり。

【詩意】今しも、邊境無事にして、急を報ずる羽書も極めて稀なる折から、皇太后より詞臣を遣し、小詩を進めて、乙夜の覽に供せしめられる。そこで、天子を助けて、民の窮苦を救ふ樣な目出たき事どもを歌はしめむとし、今年の春、人民一同、春著を得ぬものはなく、大に喜んで居るといふことが第一に奏上された。

皇太妃閣、五首

葦桃猶在戶。椒柏已稱觴。葦桃、なほ戶に在り、椒柏、すでに觴を稱ぐ。
歲美風先應。朝回日漸長。歲美にして、風、先づ應じ、朝より回つて、日、漸く長し。

【字解】【一】葦桃　葦で編つた繩と、顔が桃の形をした人。風俗通に「上古の時、荼與・鬱壘の兄弟二人あり、性能く鬼を執らふ。度朔山桃樹の下に於て、百鬼を簡閱し、無道にして妄りに人の禍害を爲さば、縛するに葦索を以てし、執らへて以て虎に食はす。ここに於て、縣官、常に歲除夕を以て桃人を飾り、葦索を垂れ、虎を門に畫く、皆前事に追放し、以て凶を禦ることを爲ふなり」とある。【二】椒柏　元日の酒には、椒花柏葉をひたす故に云ふ。

【題義】宋史に「欽成朱皇后は開封の人、熙寧の初、宮に入つて哲宗を生み、德妃に進む。哲宗立ち、尊んで皇太妃となす。時に、宣仁欽聖の二太后、皆尊に居る、故に稱號未だ極まらず。元祐三年、宣

仁詔す、春秋の義、母、子を以て尊しと。ここに於て、輿蓋伏衛冠服、悉く皇后に侔し」とある。

【詩意】葦交桃人は、元の儘、まだ戶に殘つて居るが、ここに元旦になつたので、椒花柏葉をひたした酒を酌んで、觴を擧げる。歳の美なることは、風が、第一に應驗を顯はし、朝會が畢つて還御になると、日は次第に長く、後宮の中は、殊の外のどかである。

甲觀開千柱。飛樓擢九層。甲觀、千柱を開き、飛樓、九層を擢んづ。
雪殘烏鵲喜。翔舞下觚稜。雪、殘して烏鵲喜び、翔舞して觚稜を下る。

【字解】【一】甲觀　第一の殿閣を云ふ。宋史に「朱皇后、閣に卽いて殿を建べ、出入は宣德東門に由る、百官、農を上つて殿下と稱し、居るところを名づけて聖瑞宮となす」とある。【二】觚稜　宮殿の屋棟をいふ。

【詩意】新築の聖瑞宮は、千本の柱で建てた大結構であるが上に、高樓は九層を爲して、雲霄に擢んでて居る。雪の消えたのは、春の日影暖きを知るべく、烏鵲の類は、喜んで翔舞しつつ、屋根の上に降つて來る。

孝心日奉東朝養。孝心、日に奉ず東朝の養、
儉德應師大練風。儉德、應に師とすべし大練の風。

【字解】【一】東朝　漢書に「事帝、東、長樂宮に朝す、時に呂太后、長樂に居る。後世、太后を稱して東朝となす、義、これに本づく」とある。【二】大練　後漢書馬皇后紀に「常に大練を衣、裙、緣を加へず」とあつて、註に「大練は厚繒なり」とある。【三】四星　晉註に「漢書天文志、中宮天極星、その一、明かなるものは、太一の常居なり。後句四星、末の大星は正妃、餘の三星は後宮の屬なり。これを環つて匡衛する十二星は藩臣、皆紫宮といふ」とある。

【詩意】皇太妃は、孝行の心厚く、日ごとに、皇太后に朝して、供養を怠らず、その儉德は、むかし大練を衣た馬皇后の風を師とされて居るのであらう。太史が新年に天象を觀ると、瑞氣立ちこめ、後宮に應ずる四星は、その光、明潤にして、紫宮の中に竝び、奧向の肅清なることは、これを以て概見すべしである。

太史新年瞻瑞氣。太史、新年、瑞氣を瞻る、
四星明潤紫宮中。四星、明潤、紫宮の中。

【詩意】九門、月を挂けて未だ班を催さず。清禁の風は、玉漏に和して閒なり。崇慶早朝、銀燭下る、珮環の聲は、五雲の閒に在り。

九門挂月未催班。
清禁風和玉漏閒。
崇慶早朝銀燭下。
珮環聲在五雲閒。

【詩意】宮城九重の門には、なほ殘月を挂けて、まだ班列を催さず、宮中を吹く風は、水時計の音と

【字解】【一】九門　宮城の門は九重なるが故に云ふ。【二】清禁　宮中を云ふ。【三】崇慶　太皇太后の居殿、前に見ゆ。【四】五雲　五色の彩雲。

共に極めて靜かである。太皇太后の崇慶殿に於ては、早朝の儀、方に畢つて、銀燭すでに撤せられ、歸り行く太妃の環佩の聲は、縹緲たる五色の雲間に聞こえて居る。

東風弱柳萬絲垂。的皪殘梅尚一枝。
繭館午欣蠶浴後。禖壇猶記燕來時。

東風、弱柳、萬絲垂る、的皪、殘梅、尚ほ一枝。繭館、午ち欣ぶ、蠶、浴するの後、禖壇、猶ほ記す、燕、來るの時。

【字解】【一】繭館　蠶を飼ふ處、三輔黃圖の宮闕疏に「蠶所を繭館といふ」とあり、禮記に「下三宮夫人、世婦の吉なるもの、蠶を蠶室に入れしめ、種を來じて川に浴す」とある。【二】禖壇　禮記月令に「仲春の月、玄鳥至る、至るの日、太牢を以て高禖を祀る」とあつて、註に「燕は、嵩生の時を以て來り集ひ、受字に入つて孕乳す、娶嫁の象なり」とあり、宋史禮志に「高禖、仁宗、有司に詔し、壇ん南郊に築き、春分の日、以て青帝を祀る。詩の克禋以祓の義に本づく。禖を以て從祀するは、古しへ禖を爲すの先に報するなり」とあり、政和新儀に「簡狄・姜嫄を以て配す」とあり。宣註に「哲宗は朱太妃の所出、故に玄鳥廟を生むことを以て之に比す」とある。

【詩意】春風に吹かるる若柳は、萬縷の絲を垂れ、梅花は、的皪として、なほ一枝を殘して居る。繭館に於ては、蠶、すでに出で、禖壇に於ては、燕、早くも來り、春は、愈よ深くして、まことに長閑である。

夫人閣、四首

綵勝鏤新語。酥槃滴小詩。綵勝、新語を鏤め、酥槃、小詩を滴る。
昇平多樂事。應許外庭知。昇平、樂事多く、應に外庭の知るを許すべし。

【字解】【一】綵勝　前に見ゆ。【二】酥盤　酥は牛酪、その澤やかなるをいふ。槃は盤。花を活けた水盤を云ふのであらう。【三】外庭　內庭、卽ち御奧に對して云ふ。

【題義】宋史に「仁宗の苗貴妃、元祐六年薨ず。周貴妃、徽宗の時、年九十三にして薨ず。卽ち神宗の武賢妃、亦た大觀元年薨ず」とあるから、元祐の初には、皆、宮中に在つた。その外、宋史に、「馮貴妃は東平の人、はじめ郡君に封せらる。養女林美人、幸を神宗に得、燕越二王を生み、婕妤に進む」とあつて、元祐の初には、矢張、宮中に居られた。夫人とは、この中、どれを指したか分からない。

【詩意】彩絹の造花には、新らしい文句を鏤め、花を活けた水盤からは、小詩が滴れて出さうに思はれる。長閑けき太平の御世には、深宮、樂事多く、そして、外庭に知られることを妨げないのは、愈よ結構である。

細雨曉風柔。春深入御溝。細雨、曉風柔かに、春は深くして御溝に入る。

已漂新荇沒。猶帶斷冰流。　すでに新荇を漂はして沒せしめ、なほ斷冰を帶びて流る。

【字解】【一】新荇　荇は俗に花蓴菜と稱する。

【詩意】細雨の中、曉風柔かに吹き渡り、春は御溝に入つて、すでに深い。漾漾たる波は、新に出た花蓴菜を漂はして沒せしめ、そして、解けて碎くる斷氷を押し流して居る。

扶桑初日映簾昇。　扶桑の初日、簾に映じて昇り、
已覺銅餅暖不冰。　すでに覺ゆ、銅餅の暖かくして冰らざるを。
七種共挑人日菜。　七種、ともに挑ぐ人日の菜、
千枝先翦上元燈。　千枝、先づ翦る上元の燈。

【字解】【一】扶桑初日　前に王維奚逵子雲、及び贈三妙善師」の詩中に注して置いた。【二】七種　荆楚歲時記に「正月七日を人日となし、七種の菜を以て羹となす」とある。【三】千枝　鄭綱の淮陽門の詩の自註に「韓國、千枝の燭臺を爲る、高さ八十尺、上元の夜ごとに之を然やす、千光目を奪ひ、百里の內、皆望見すべし」とある。

【詩意】扶桑に上りし朝日は、珠の簾に映じ、銅瓶は暖かにして、最早冰らぬ樣である。正月七日には、七種の菜を摘み、十五日上元の夜には、千枝の燈を燃やし、ともに、舊例を守つて、その都度、儀式を行はれるのは、流石に尊く見える。

雪消鴛瓦已流澌。　雪は消えて、鴛瓦、すでに澌を流し、
風暖犀盤尙鎭帷。　風は暖かにして、犀盤、なほ帷を鎭す。
縹緲紫簫明月下。　縹緲たる紫簫、明月の下、
璧門桂影夜參差。　璧門の桂影、夜參差。

【字解】【一】鴛瓦　鴛鴦瓦の略、鴛鴦の形を刻したる瓦。【二】犀盤　犀角で造つた平たい盤、重しに代用する。【三】璧門　白璧門の略、もとより固有名詞ではなく、唯だ美辭として用ひたのであらう。【四】桂影　木の影を指したのであらう。【五】參差　長短不揃の貌。

【詩意】雪は消えても、鴛鴦瓦上、なほ解けた氷を流し、風は暖かなれども、相變らず、犀盤を以て帷の重しとしてある。明月の下、紫簫の聲は、縹緲として響き渡り、宮門の樹影は、參差として不揃の樣に見える。

端午帖子詞　皇帝閣、六首

盛德初融後。潛陰未姤時。　盛德、初めて融なるの後、潛陰、未だ姤せざるの時。
侍臣占易象。明兩作重離。　侍臣、易象を占し、明兩、重離を作す。

【字解】【一】盛德　月令に「孟夏の月、某日立夏、盛德火に在り」と見ゆ。【二】未姤　易に「一陰、五陽の下に伏す、名づけ

て蛤と爲す」とあつて、夏至の卦。ここでは、まだ其處まで達せざる時を指す。【三】明兩　易の離卦の象に「明兩、離と作る、大人、以て明を繼ぎ、四方を照らす」とある。

【題目】舊註に「元祐三年」とあつて、卽ち前の立春帖子と同年の五月五日に上つたのである。

【詩意】盛德、はじめて融にして、すでに立夏を過ぎ、潛陰、未だ五陽の下に伏するに至らず、漸く夏至に近からむとする時、侍臣は、易象を以て占をなし、明兩、重離をなす五月五日を以て、例の如く、御祝をすることに成つた。

采秀擷羣芳。爭儲百藥良。
太醫初薦艾。庶草驗蕃昌。

【字解】【一】百藥良　藝文類聚に夏小正を引いて「この日、衆藥を蓄採して、以て毒氣を銷除す」とある。【二】太醫　後漢書の少府所屬に太醫令がある、卽ち侍醫頭。【三】薦艾　荆楚歲時記に「端午の日、艾を採つて人となし、門戸の上に懸け、以て毒氣を禦ふ」とある。【四】庶草　書經の洪範に「五者來り備はり、各〻その敍を以て庶草蕃廡」とあつて、その疏に「風を須てば風來り、雨を須てば雨來り、各〻次序を以てすれば、衆草木蕃茂して豐茂」とある。

【詩意】ここに、五月五日に際し、羣芳の中より、その秀を擇んで摘み、爭つて、多くの藥草の精良なるものを貯へることに成つた。侍醫頭は、艾草を薦め、これを以て、庶草の蕃昌を驗することにした。

微涼生殿閣。習習滿皇都。
試問吾民慍。南風爲解無。

【字解】【一】吾民慍　尙書大傳に見えたる舜の歌に、南風之薰、可以解吾民之慍」とある。

【詩意】微涼は殿閣に生じ、習習として、ひろく皇都に滿つるを覺える。吾が民が慍つて居るにしても、南風が爲に之を解くや否や、試に問うて見たいと思ふ。

西檻新來玉宇風。
侍臣茗椀得雍容。
庭槐似識天顏喜。
舞破清陰作兩龍。

【詩意】西の欄干には、大空を度る涼風が、新に吹き來り、侍臣は、茗椀を賜はつて、雍容と打澄まして居る。庭前の槐樹も、天顏の喜を知れるが如く、樹が舞うて動けば、清陰爲に破れ、二つの龍の

【字解】【一】玉宇　大空。【二】茗椀　資註に「按ずるに、宋制、侍講・侍讀官、例、酒を賜ひ、茶を賜ふ。本集、侍立邇英の詩、上尊初破早朝寒、茗椀仍沾講舌乾の句あり」と見ゆ。【三】清陰　資註に「子由の入侍邇英の詩、槐黑對舞覆衣冠、自註に云ふ、邇英閣の庭前に雙槐あり、甚だ高く、しかも、柯葉、地を覆うて龍蛇の如し、講官、その下に遞對す」とある。

【詩意】西の欄干には、大空を度る涼風が、新に吹き來り、侍臣は、茗椀を賜はつて、雍容と打澄まして居る。庭前の槐樹も、天顏の喜を知れるが如く、樹が舞うて動けば、清陰爲に破れ、二つの龍の

蟠屈する樣に見える。

講餘交翟轉廻廊。　講餘、交翟、廻廊に轉じ、
始覺深宮夏日長。　はじめて覺ゆ、深宮、夏日の長きを。
揚子江心空百鍊。　揚子江心、空しく百鍊、
只將無逸鑑興亡。　只だ無逸を將て、興亡を鑑す。

【詩意】儒臣の進講が畢ると、天子は、羽團扇を差し翳し、廊を廻つて、そこらを歩ませられ、深宮の中、夏の日の長きを始めて悟られた。揚子江心で、百たび鍛錬して、御用の鏡を鑄るが、それより も、書經の無逸を誦して、興亡を鑑み、殷周の先王が敢て康からざりしに法られむことを希望する。

【字解】【一】交翟　翟は雉の羽で造つた團扇の如きもので、天子移御の時は、これを交叉して差し翳す。【二】百鍊　異聞集に「天寶中、揚州、水心鏡を進む、背に盤龍あり、鏡匠呂暉、鏡を移し、五月五日を以て揚子江心に于て之を鑄る。後、大旱、これを祀れば雨を得」とあり、白居易の百鍊鏡の詩に江心波上舟中鑄、五月五日日午時とある。【三】無逸　書經の篇名、周公、成王を戒むるの辭。

一扇清風灑面寒。　一扇の清風、面に灑いで寒し、
應緣飛白在冰紈。　應に緣るべし、飛白の冰紈に在るを。
坐知四海蒙膏澤。　坐に知る、四海、膏澤を蒙る、
沐浴君王德似蘭。　沐浴す、君王、德、蘭に似たるに。

【詩意】團扇の吹き送る清風は、顏に灑いで寒く、それといふも、飛白の御書が絹地に書いてあるからであらう。今や、四海の內、膏澤を蒙らざるなきは、かの蘭湯に比すべき君王の德化に沐浴して居るからである。

【字解】【一】飛白　唐書に「太宗、長孫無忌・楊師道に謂つて曰く、五日、舊俗、必ず服玩を用ひて相賀す、朕、今君を賀せむ。飛白二枚、匠はくは、清風を動かし、以て美德を揚げむ」とある。冰紈は白絹、それで造つた團扇で、その上に飛白の字を書いたのであらう。【三】德似蘭　楚辭に浴蘭湯兮沐芳とある。

太皇太后閣六首

漸臺通翠浪。暑殿轉清風。　漸臺、翠浪に通じ、暑殿、清風に轉ず。
簾卷東朝散。金烏未遽中。　簾、卷いて、東朝散じ、金烏、未だ遽に中せず。

【字解】【一】漸臺　史記孝武本紀に「建章宮を作り、度して千門萬戶となす。前殿は、高さを未央に度す。その東は鳳闕、高さ二十餘丈。その西は唐中數十里、虎圈、其北に大池漸臺を治め、高さ二十餘丈、名づけて蓬波といふ」とあつて、その註に「漸は浸なり、臺は池中に在つて水に浸さる」とある。【二】東朝　太后に朝すること、前に見ゆ。【三】金烏　太陽、淮南子に「日中に踆烏あり」と見ゆ。

【詩意】池中の臺は、木の影を漾はす翠浪に通じ、夏の御殿には、清風、吹き廻つて、すこしも暑さを知らぬ位。簾を卷き上げて、太后への朝參が濟むと、まだ午前中で、太陽は、遽に中天まで來て居

ない。

日永蠶收簇。風高麥上場。　日永くして、蠶、簇を收め、風高くして、麥、場に上る。
朝來耤田令。菰黍獻時芳。　朝來、耤田の令、菰黍、時芳を獻せしむ。

【字解】【一】收簇　蠶をして繭を造らしめる。【二】耤田　山堂考に「漢の文帝、はじめて耤田を開き、令丞を置き、圃廟壇壝の田を耕すを掌る。東漢及び魏は缺く。晉、復た置く。宋の元豐三年、耤田令を改めて、太常寺に隸す」とある。【三】菰黍　風土記に「午日、菰葉を以て稻米を裹んで粽となし、以て陰陽相包裹して、未だ分散せざるに象るなり」とある。

【詩意】日は長く、蠶は蔟つとに收まつて、繭を造るに餘念なく、風は高くして、刈られた麥は、場内に乾してある。朝來、耤田の令丞は、時の物として、眞菰や黍を獻上した。

舞羽諸羌伏。銷兵萬彙蘇。　羽を舞はして諸羌伏し、兵を銷して萬彙蘇す。
只應黃紙誥。便是赤靈符。　只だ應に黃紙誥、便ち是れ赤靈符なるべし。

【字解】【一】舞羽　羽は舞の名。【二】諸羌　羌は西夷の名。【三】萬彙　彙は類。【四】黃紙誥　天子の詔敕。【五】赤靈符　抱朴子に「五月五日、赤靈符を作つて心前に著く」とある。

【詩意】羽を舞はして、諸羌、すでに伏し、兵器を鑄つぶして、萬物、はじめて蘇生し、まことに目出たき太平の折から、黃紙に書いた詔敕は、取りも直さず、惡魔を祓ふ赤靈符であらう。

令節陳詩歲歲新。　令節、詩を陳して、歲歲新なり、
從官何以壽吾君。　從官、何を以て吾が君を壽せむ。
願儲醫國三年艾。　願はくは、醫國三年の艾を儲へ、
不作沈湘九辯文。　作らず、沈湘、九辯の文。

【字解】【一】令節　目出たき節句、卽ち五月五日。【二】醫國　國語に「上醫は國を醫す」とあつて、卽ち上醫の義。【三】沈湘　屈原は湘水に投じて死んだ。【四】九辯　文選の註に「九辯は、宋玉の作るところなり。辯は變なり。九は陽數、道の綱紀なり。道德を陳說し、變を以て君に說くを謂ふなり。宋玉は、屈原の弟子、その師の忠にして放逐さるるを惜み、故に九辯を作つて、以て其志を述ぶるなり」とある。

【詩意】目出たき節句に詩を上り、年年新なるを競うて居るが、從臣輩は、如何なる言葉を以て、吾が君を壽がむとするか。願はくは、名醫の手で摘んで來て、三年を經た艾を貯へて置きたいので、湘水に沈んだ忠臣を弔ひし九辯の文などは、又と作らぬ樣にと念じて居る。

忠臣諒節今千歲。　忠臣の諒節、今千歲、
孝女孤風滿四方。　孝女の孤風、四方に滿つ。

【字解】【一】忠臣諒節　屈原の忠亮なる苦節。【二】孝女　曹娥を云ふ、下に見ゆ。【三】巫陽占鄭夢

不復巫陽占郢夢。復た巫陽、郢夢を占せず、
空餘仲御扣河章。空しく餘す、仲御、扣河の章。

病む、洛に詣つて藥を市ふ。會ま三月上巳。士女、雲の如し。統、竝に顧みず。賈充、怪んで之を問ふ、徐に答へて曰く、會稽の夏仲御なり、と。充、その土俗を問はしめ、又謂つて曰く、卿、よく土地間の曲を作すか。統曰く、孝女曹娥、年はじめて十四、その父、江に墮ちて尸を得ず、娥、天を仰いで哀號し、更ち水に投じて死す。父子、尸を喪ひ、後乃ち俱に出づ。國人、その孝義を哀んで、爲に河女の章を歌ふ。今、これを歌はむと欲す、と。ここに於て、足を以て節を扣き、聲を引いて喉囀すれば、清激慷慨、大風、應じて至り、雷電晝冥し、諸人相顧みて曰く、河女の音を聞いて、涕泗の交も流るゝを覺えず、と。卽ち伯姬の高行、目前に在るを謂ふなり」とある。

【詩意】屈原忠亮の苦節は、今、すでに千歳を經、曹娥の比類なき遺風は、四方に流傳して居る。されば、ここに、巫陽をして郢に歸る夢を占はしむることなく、唯だ夏統が川舟を扣きつつ歌つたといふ河女の章を餘して居るだけである。

長養恩深動植均。長養、恩は深く、動植均し、
只憂貪吏尙殘民。只だ憂ふ、貪吏の尙ほ民を殘ふを。
外廷已拜梟羹賜。外廷、すでに拜す、梟羹の賜。

巫陽をして楚の國都たる郢に歸る夢を占はしめる。【四】仲御扣河章　仲御は夏統の字、晉書の本傳に「母の嗣午帖子詞にも、百官却拜梟羹馬、因去方知舜有功とある。

【字解】【一】梟羹　史記孝武本紀及び漢書郊祀志の註に「五月五日、梟羹を爲つて百官に賜ふ、惡鳥の故を以て之を食ふなり」とあり、子由

應助吾君去不仁。應に吾が君を助けて不仁を去るべし。

【詩意】方今長養の恩は深くして、動植の物、ひとしく生育して居るが、只だ貪慾なる吏胥輩が、往往にして、人民を虐げるのが心配である。今日、外廷に於ては、すでに梟の吸物を頂戴したので、それにつけても、吾が君を助けて、不仁を去ることに力を盡さねばならぬ。

【餘論】篇篇、大抵治國の事を道ひ、特に女性らしいことの見えぬのは、この太皇太后は、帝を輔けて政を攝して居られたから、全く人主と同一視したのであらう。

皇太后閣六首

露簟琴書冷。瑁盤饌餌新。露簟、琴書冷かに、瑁盤、饌餌新なり。
深宮猶畏日。應念暑耘人。深宮、猶ほ日を畏る、應に念ふべし暑耘の人。

【字解】【一】露簟　綺麗で澤澤しく、濡れた樣に見える竹むしろ。【二】瑁盤　玉を刻んで造つた皿。【三】饌餌　唐韻に「饌は厚粥なり」とあり、開元天寶遺事に「宮中端午、粉團角黍を造り、瑁盤の中に貯へ、小角弓を以て之を射、中るものは食ふを得」とある。

【詩意】綺麗な竹むしろの上には、琴書までも、冷かに見え、瑁盤の中には、端午の團子が新に調進

されてある。深宮の中に居てさへ、日光を畏れる位であるから、この暑さに際して、田間に耘る人の苦痛を念はれるであらう。

萬歲菖蒲酒、千金琥珀杯。　萬歲の菖蒲酒、千金の琥珀杯。
年年行樂處、新月挂池臺。　年年、行樂の處、新月、池臺に挂る。

【字解】【一】菖蒲酒　王氏象書集註に「端午の日、菖蒲を以て、或は糜にし、或は屑にして、酒に泛ぶ」とある。

【詩意】千代を壽ぐ菖蒲の酒を、見事な琥珀の杯に注いで賜はる、年年、目出たく祝ふ端午の長き日も、いつしか暮れて、新月が池邊の高臺に挂つて居る。

翠筒初裹棟、薌黍復纏菰。　翠筒、はじめて棟を裹み、薌黍、復た菰を纏ふ。
水殿開冰鑑、瓊漿凍玉壺。　水殿、冰鑑を開き、瓊漿、玉壺を凍る。

【字解】【一】裹棟　查註に「愼、案するに、伸子陵の五絲續命賦の棟葉結、采絲纏、註に云ふ、五月五日、屈原を祭る、竹筒に米を貯へ、棟を以て其上を塞ぎ、采絲、これを纏す、先生、正に此事を用ふ」とある。【二】薌黍　查註に「禮記、黍を薌合といふ。疏に云ふ、穀、馥なるものを黍と爲す、穀、すでに軟にして相合す、氣息又香ばし、故に薌合といふなり」とある。

【詩意】竹筒に米を入れて、棟葉で包み、黍の團子は、眞菰の葉で卷いてあつて、これが、端午の供へ物である。水殿の下には、池水、氷の鏡を開くが如く、結構な御酒は、玉壺の中に凍つて居る樣で、あたりの涼しさは、とても、この世とは思はれぬ位である。

祕殿扶疎夏木深。　祕殿、扶疎として夏木深く、
雨餘初有一蟬吟。　雨餘、初めて一蟬の吟ずるあり。
應將嬴女乘鸞扇。　應に嬴女乘鸞の扇を將て、
更助南風長棘心。　更に南風を助けて棘心を長ずべし。

【字解】【一】祕殿　奥御殿。
【二】嬴女乘鸞扇　秦の弄玉が其夫蕭史と共に、鸞に乘じて昇仙する處を畫いた團扇、劉禹錫の詩に團扇復團扇、奉君清暑殿、秋風入庭樹、從此不相見、上有乘鸞女、蒼蒼蟲網編、明年入懷袖、別是機中綾とある。【三】南風長棘心　詩經に凱風自南、吹彼棘心とあつて、その疏に「凱樂の風は、長養の方より來り、彼の棘木の心を吹く、故に棘心盛長を得、以て寬仁の母、慈愛の情を以て、我が七子の身を養ひ、故に七子、皆、少しく長ずるを得たるを興す」とある。

【詩意】奥御殿の近くには、扶疎として、夏木が茂り合ひ、雨あがりに、初めて一蟬の鳴くのが聞こえる。皇太后は、嬴女の乘鸞を畫いてある團扇を手にし、かの七子の母が南風、棘心を長ぜしめた樣に、四海の人民を劬はつて、生育を全うせしめられることと恐察する。

上林珍木暗池臺。
蜀產吳包萬里來。
不獨槃中見盧橘。
時于綬裏得楊梅。

【詩意】上林の見事なる木木は、茂り合つて、池邊の亭臺、ほの暗く見ゆる頃、吳蜀よりの進貢は、萬里の彼方から到達した。その品品は何かといへば、盤中に枇杷を盛りしのみならず、やま桃をちまきのつとに包んだのもあつた。

【字解】【一】上林　宮中の御庭。【二】吳包　吳地よりの進貢。【三】盧橘　前に數ば見え、本職ではないが、東坡は、枇杷の事に用ひて居る。【四】綬裏　ちまきのつと。【五】楊梅　やま桃。

閔楚遺風萬古情。
沅湘舊俗到金明。
翠輿黃繖何時幸。
畫鷁飛鳧盡日橫。

【詩意】むかしの楚國の遺風は、今に傳はつて、萬古の情に堪へざらしめ、沅湘の舊俗は、端午に競渡（卽ち端艇競漕）を行ふので、宮中の金明池でも、矢張、さうすることに成つた。皇太后は、翠輿に駕し、黃繖をさしかけて、何時臨御に成るか、池の中には、畫鷁飛鳧、さまざまの舟が終日橫はつて、これを御待して居る。

【字解】【一】閔楚　憐むべき楚國。【二】沅湘　沅水は湘水の支流で、その地方一帶を沅湘といふ。屈原の投死したのは、卽ち此處である。【三】金明　池の名。【四】翠輿　翡翠の羽で飾つた御駕。【五】黃繖　繖は日傘。【六】畫鷁　淮南子に「龍首畫鷁とあつて、その註に「鷁は水鳥なり、その像を畫いて、船首に著く」とあり、王子年の拾遺記に「浮二漢圖畫鷁之舟一」とあつて、或は船首に作つてあるが、音義、ともに同じ。【七】飛鳧　鳧を船首に畫いた舟、張正見の詩に「黃鵠逢二鳥路一、白雪下二鳧舟一」とある。

皇太妃閣、五首

午景簾櫳靜。薰風草木酣。
誰知恭儉德。綵縷出親蠶。

【詩意】眞晝の日が當つて、簾櫳の中、いとも靜に、薰風吹き度つて、草木は、今しも盛に茂つて居

皇太妃閣　五首

午景、簾櫳靜に、薰風、草木酣なり。
誰か知らむ、恭儉の德、綵縷、親蠶に出づ。

【字解】【一】午景　眞晝の日かげ。【二】草木酣　酣は盛りの頂點を過ぐること、但し、普通には眞盛りの義に用ひて居る。【三】綵縷　色どつた絲、端午には之を續命縷として用ふる。【四】親蠶　手づから飼はれた蠶、宋史禮志に「先蠶の禮、久しく廢す、眞宗、有司に詔して、故事を檢討せしむ。禮院言ふ、周禮、北郊に蠶するは、純陰を以てなり、漢、東郊に蠶するは、春桑生するを以てなり、請ふ、約社故事に附し、壇を東郊に築かむと。政和禮局、請うて古制に倣ひ、先蠶壇側に於て蠶室二十七を築き、別に殿一區を構へて、親蠶の所となす、詔して、その議に從ひ、親蠶殿に命じ、無斁を以て名となす」とある。

【詩意】眞晝の日が當つて、簾櫳の中、いとも靜に、薰風吹き度つて、草木は、今しも盛に茂つて居

る。皇太妃は、恭儉の德を旨とせられ、端午に用ふる色絲も、御自身で飼はれた蠶から取つたものだといふことは、誰も知るまいが、まことに、有り難いことである。

雨細方梅夏。風高已麥秋。
應憐百花盡。綠葉暗紅榴。

【詩意】細雨霏霏として、今しも、梅の實の熟する夏であるし、風は高く、すでに麥の秋を過ぎた。百花落ち盡し、綠葉茂り合つて、赤い石榴の花さへ暗きは、又一しほの風情がある。

【字解】【一】雨細　雨細にして、方に梅夏、風高くして、すでに麥秋。【二】應憐　應に憐むべし、百花盡きて、綠葉、紅榴暗きを。

辟兵已佩靈符小。
續命仍縈綵縷長。
不爲祈禳得天助。
要令風俗樂時康。

【詩意】すでに、小さな辟兵の靈符を帶び、その上に、長い續命の彩縷を縈ひつけて居る。何も、祈禳をして、天の冥助を得るにも及ばぬが、古い風習を尊重し、一般の人民をして、太平の時を樂ましめるのである。

【字解】【一】辟兵　查註に「裘元の新語、五月五日、五采の繒を繫け、これを辟兵符といふ」とある。【二】續命　即ち續命縷といひ、この色絲を卷きつけて居ると長生をするといふので、前に端午遊眞如一の詩中に注して置いた。

玉盆沈李灩清泉。
金鴨噓空裊細煙。
自有梧楸障畏日。
仍欣麥黍報豐年。

【詩意】玉盆に清泉を湛へて、赤い李の實をひたし置き、金鴨よりは、細煙裊裊として、空中に立ち登つて居る。御殿の周圍には、梧楸が茂つて居て、自然、夏の暑い日を遮り、折から、麥も、黍も、ともに豐年だといふ知らせがあつた。

【字解】【一】金鴨　鴨の形をなせる鍍金の香爐。【二】畏日　左傳に「趙盾は、夏日の如くして畏るべし」とあるに本づいて、夏の太陽を云ふ。【三】麥黍　月令に「孟夏には、農、乃ち麥を登せ、季夏には、農、乃ち黍を登す」とあつて、その註に「この時、黍、新に熟す。今、俗、鴨黍といふは、是れなり」とある。

良辰樂事古難同。　良辰樂事、古しへ同じうし難し、
繡繭朱絲奉兩宮。　繡繭朱絲、兩宮に奉ず。
仁孝自應禳百(一)沴。　仁孝、自ら應に百沴を禳ふべし、
艾人(二)桃印本無功。　艾人桃印、本と功なし。

【詩意】良辰と樂事とは、古しへより、兼ねることが出來ないのに、今之を併せたのは、まことに結構の至。この日太妃よりは、御自分で蠶を飼つて造つた繭と絲とを聖上・皇太后の兩宮に獻上される。かかる仁孝の德は、自然、種種の妖氣を禳ふべく、艾人だの、桃印だのは、本來、何等の效驗なきものである。

【字解】【一】百沴　沴は妖氣。【二】艾人　艾で造つた人形、戸外に掛ける。【三】桃印　桃の形を朱肉で押し、門戸の飾として惡氣を止める。

夫人閣、四首

肅肅槐庭午。沈沈玉漏稀。　肅肅、槐庭午なり、沈沈、玉漏稀なり。
皇恩樂佳節。鬬(一)草得珠璣。　皇恩、佳節を樂み、草を鬬はして、珠璣を得たり。

【字解】【一】鬬草　歲時記に「五日、百草を鬬はすの戲あり」と見え、歐陽修の端午の詞に共鬬今朝勝、盈檐百草香」とある。

【詩意】肅肅として物靜かに、槐の茂れる庭には、日色方に亭午、深宮の中は、水時計の音さへ沈沈として、稀に聞こえる。今しも、皇恩を荷うて、この佳節を樂み、草を鬬はして、勝つた御褒美に珠璣を得たので、太平の折から、後宮の長閑けき有樣は、ざッと、かくの如くである。

節物荆吳舊。娛游禁掖閒。　節物、荆吳舊く、娛游、禁掖閒なり。
仙風隨畫筵。拜賜落人間。　仙風、畫筵に隨ひ、賜を拜して人間に落つ。

【字解】【一】仙風　仙界の風。【二】畫筵　筵は卽ち團扇、方言に「扇、關より東、これを筵といふ」とある。

【詩意】荆吳地方の特異なる端午の祝も、隨分久しいもので、今では、宮中でも之を行つて、この日は、娛游を旨として居る。一たび、畫團扇を搖かせば、仙界の風が吹く心持がするが、賤しい吾吾が、それを頂戴するのは、まことに有り難い仕合である。

五綵(一)縈筒秫(二)稻香。　五綵、筒を縈つて、秫稻香ばしく、
千門結艾鬢髯張。　千門、艾を結んで鬢髯張る。
旋開寶典(三)尋風物。　旋ち寶典を開いて、風物を尋ね、

【字解】【一】五綵　五色の絲。【二】秫稻　もち米。【三】寶典　宣註に「隋書經籍志、杜臺卿の玉燭寶典二十卷」とあるが、必ずしも、こ

要及靈辰共祓禳。　靈辰に及んで祓禳を共にするを要す。

の書に限つた譯ではなく、儀式の事を書いた本を指すのであらう。【解】

靈辰　嘉辰に同じ。

【詩意】五色の絲で竹筒を縛り、その中には、もち米を入れ、又艾人は、隨處の門に掛つて、鬢髯ともに張るが如く見える。やがて、儀式の書物を調べて、折からの風物を尋ね、この嘉辰を幸に、惡魔拂ひの儀をも行はれる。

欲曉銅缾下井欄。　曉ならむと欲して、銅缾、井欄に下る、
鏗鍠金殿發清寒。　鏗鍠金殿、清寒を發す。
似聞人世南風熱。　聞くに似たり、人世、南風の熱するを、
日上牆東問幾竿。　日は牆東に上る、問ふ幾竿。

【詩意】夜あけに近く、銅の釣瓶が井欄を下つて、水を汲む聲が聞こえ、唯だでさへ、鄰きわたれる金殿の裏では、一しほの清寒を覺える。この世界に、南風が吹き度つて、暑さの增すことを聞いて居られるものと見え、日は、牆東に上つて、すでに幾竿の高さに成つたと問はれることがあつた。

興龍節集英殿宴敎坊詞、致語口號

興龍節、集英殿宴の敎坊詞、致語口號

臣聞、帝武造周、已兆興王之跡、日符祚漢、實開受命之祥、非天私我有邦、惟聖乃作神主、仰止誕彌之慶、集於建丑之正、瑞玉旅庭、爰講比鄰之好、虎臣在泮、復通西域之琛、式燕示慈、與人均福、恭惟皇帝陛下、睿思古冠、濬哲自天、煥乎有文、日講六經之訓、述而不作、思齊累聖之仁、夷夏宅心、神人協德、卜年七百、方過曆以承天、有臣三千、咸一心而戴后、彤庭振萬、玉座傳觴、誦干戈載戢之詩、作君臣相悅之樂、斯民何幸、白首太平、猥以微生、親逢盛日、始慶猗蘭之會、願賡擊壤之音、下采民言、上陳口號。

【訓讀】臣聞く、帝武、周を造りて、すでに興王の跡を兆し、日符、漢に祚して、實に受命の祥を開く。天、わが有邦に私するに非ず、惟だ聖、乃ち神主と作る。仰止誕彌の慶、建丑の正に集まり、瑞玉、庭に旅し、ここに、比鄰の好を講ず、虎臣、泮に在つて、復た西域の琛に通ず。式つて燕して慈を示し、人と福を均しうす。恭しく惟みるに、皇帝陛下、睿思古に冠とし、濬哲天よりす。煥として文あ

り、日に六經の訓を講じ、述べて作らず、思、累聖の仁に齊し。夷夏、心を宅し、神人、德を協へ、年を卜する七百、方に曆を過ぎて以て天を承く。臣あり三千、咸な心を一にして后を戴く。彤庭、萬を振ひ、玉座、觴を傳へ、干戈載ち戢まるの詩を誦し、君臣相悅ぶの樂を作す。斯民、何の幸か、白首太平、猥りに微生を以て、親しく盛日に逢ひ、はじめて猗蘭の會を慶す。願はくは、擊壤の音に賡せむ。下、民言を采り、上、口號を陳ず。

凜凜重瞳日月新。凜凜たる重瞳、日月新なり、
四方驚喜識天人。四方驚喜して、天人を識る。
共知若木初升旦。共に知る、若木、初めて旦を升すを、
且種蟠桃莫計春。且つ蟠桃を種ゑて、春を計る莫れ。
請吏黑山歸屬國。吏を請うて、黑山、屬國に歸し、
給扶黃髮拜嚴宸。扶を給して、黃髮、嚴宸を拜す。
紫皇應在紅雲裏。紫皇、應に在るべし紅雲の裏、
試問清都侍從臣。試に問ふ、清都侍從の臣。

【字解】【一】重瞳　ひとみが二つある。古しへ、舜は重瞳であつた。前に贈二妙善師一の詩中に注して置いた。【二】若木　崑崙子に「若木は建木の西に在り、末に十日あり、その華、下地を照らす」とある。【三】升旦　旦は朝日。【四】蟠桃　前に彭祖廟及び次韻魯直見贈の詩中に注して置いた。【五】請吏　史記大宛傳に「西南夷、吏を請うて入朝す」とある。【六】黑山　山海經に「流沙、西南海に入る、黑水の山」

ある。【七】給扶　扶は介添、介抱人。南史袁粲傳に「功を以て建安縣伯に封ぜられ、侍中太子詹事に除せらる。袁、職を解かむことを請ふ、許さず、尋いで、扶二人を給す」とあり、唐書に「玄宗、陰嶠を遣し、錦果を遺へて郡に至らしむ、辭して山に歸るや、扶侍二人を給す」とある。これは、當時の事實があるので、宋史文彥博傳に「元祐の初、司馬光、宿德元老を薦め、宜しく起して自ら輔くべしといふや、乃ち平章軍國重事を命じ、六日一たび朝し、一月兩たび經筵に赴き、恩遇、甚だ渥し」とある。【八】黃髮　前に次韻李修撰の詩中に注して置いた。

【題義】興龍節は、宋の哲宗の誕生日、宋史の本紀に「十二月初七日は、帝の生日なり、禧祖の忌辰を避け、次日を以て興龍節となす」とあるから、十二月八日、そして、この詩の東坡の自註に「元祐二年」とある。宋の制度として、春秋聖節の三大宴には、餘興として雜劇を催し、小兒隊と女弟子隊とが相次いで進んで之を演ずることに成つて居る。その詳は、宋史の樂志、及び孟元老の東京夢華錄等に見え、宋史には「舞隊の制、その名各一十、小兒隊凡そ七十二人、女弟子隊凡そ一百五十人」とあつて、その下に詳細なる次第書が見えて居る。この餘興に用ふる歌詞は、樂語と稱し、一に念語と稱する。宮中三大節の樂語は、はじめに、敎坊致語があり、次に口號があり、それから小兒隊が出て來て、その致語があり、次に女童隊が出て、その致語がある。これ等の樂語は、大抵、當時朝臣中の文學に名あるものに作らせたのである。ここに掲げたのは、元祐二年の興龍節に宴を集英殿に賜はつた時の樂語であるが、もとより、全體ではなく、敎坊詞の口號として七言律一首があるから、それを掲出する爲に、わづかばかりの前の部分を引き拔いたのである。その位ならば、その序とも見るべき

致語は、全く不必要である。されば、ここに致語があつても、解釋を略すことにする。致語は、つまり口上で、その口上が濟むと、この詩を一齊に合唱するのである。なほ査初白本以下、この詩の題を興龍節集英殿宴口號とし、その下に、幷に致語としてあるのは、甚だ宜しくない。この詩は、宴の口號ではなく、宴の餘興に於ける敎坊の致語及び口號であるから、王文誥の說に從つて、標題を改めた。なほ樂語の全文は、參考の爲に餘論の項に附記することにした。汴京宮室考に「大慶殿北に紫宸殿あり、西に垂拱殿あり、次の西に皇儀殿あり、又次の西に集英殿あり、宴殿なり」とあり、宋史の禮志に「宴饗は、凡そ春秋季の仲聖節、及び國に大慶あれば、皆大宴す。その日、殿庭には山樓を設け、排場して羣仙隊仗となし、宰相以下、殿に升つて酒を進む。各〻位に就き、酒九行、衣を更へ、花を賜ふこと差あり。大觀三年、議禮局、集英殿大宴儀を上る」とある。

【詩意】聖上は、凜凜たる重瞳が日月の如く新である處から、四方の億兆は、天人の如き御姿を見知つて、しきりに驚喜して居る。今は、御世の初めで、扶桑の若木に朝日が上つた樣であるが、この上とも、千代に八千代に打續き、さながら、三千年に一たび實るといふ蟠桃を植ゑて、幾年の春を經たか數へられぬ樣にありたいものである。刻下、天下太平にして、皇威遠方に及び、西の方、黑山の夷でさへも、態態、朝吏の派遣を請うて、甘んじて屬國となり、それから、天子は、元老を尊重されるから、黃髮の老臣は、曩に給はつた介添に扶けられて、紫宸殿に拜禮に參つた。天帝に比すべき我が聖上は、紅雲の裏に居らせられるに相違なく、試に、宮中に詰めて居る侍從の臣下に問うて見たいと思ふ。

【餘論】興龍節集英殿宴樂語の全文は、左の通りである。

敎坊致語

臣聞、帝武造ㇾ周……上陳二口號一、

口　號

凜凜重瞳……侍從臣（以上、ここに揭載せし本文）

勾合曲

祝二堯之壽一、既罄二於歡謠一、象二舜之功一、願觀二於備樂一、羽旄在ㇾ列、管磬同ㇾ音、上奉二宸嚴一、敎坊合ㇾ曲、

勾二小兒隊一

魚龍奏ㇾ技、畢陳二詭異之觀一、齠齔成童、各效二回旋之妙一、嘉二其尙幼、有二此良心一、仰奉二宸慈一、敎坊小兒入ㇾ隊、

隊　名

兩階陳二羽籥一、萬國走二梯航一、

問二小兒隊一

工師在ㇾ列、各懷二白獻之能一、振子盈ㇾ庭、必有二可ㇾ觀之技一、未ㇾ知二來意一、宜二悉奏陳一、

小兒致語

臣聞、生民以來、未レ有二祖宗之仁厚一、上帝所レ眷、錫以二聖神之子孫一、孚佑二下民一、篤生二我后一、瞻二舜瞳之日月一、望二堯顙之山河一、若二帝之初逢二四聰於無外一、如レ川方至、傾二萬字一以來同上、恭惟皇帝陛下、齊聖廣淵、剛健篤實、識二文武之大者一、體二仁孝於自然一、歌二詩思齊一、見二文王之所一以聖一、誦二書無逸一、法二中宗之不一敢康一、遐日載臨、與情共祝、神筴授二萬年之算一、洛書開二五福之祥一、臣等嬉二游天街一、沐二浴皇化一、欲陳二舞蹈之意一、不レ知二手足之隨一、未二敢自專一、伏取二進止一、

勾二雜劇一

金奏鏗純、既度二九韶之曲一、霓裳合散、又陳二八佾之儀一、舞綴暫停、伶優間作、再調二絲竹一、雜劇來歟、

放二小兒隊一

游童率舞、逐二物性之熙怡一、小技畢陳、識二天慈之廣大一、清歌既閟、疊鼓屢催、再拜二天階一、相將好去、

勾二女童隊一

垂鬟在レ列、斂レ袂稍前、豈知二北里之誠一、敢獻二南山之壽一、霓旌岔集、金奏方諧、上奉二威顏一、兩軍女童入レ隊、

隊名

君臣千載遇、歌舞八方同、

問二女童隊一

摻過屢作、旌旆前臨、願二游女之何能一、造二彤庭一而獻レ技、欲レ知二來意一、宜二悉奏陳一、

女童致語

妾聞、瑞飢來翔、共紀二生商之兆一、羣龍下集、適同二浴佛之辰一、佳氣充レ庭、和聲載レ路、輦出レ房而雷動、扇交レ翟以雲開、喜動二人天一、春還二草木一、恭惟、皇帝陛下、凝レ神昭曠、受レ命穆清、三后在レ天、宜二興王之世有一、四人迪哲、知二享レ國之無窮一、乃眷二良辰一、欲レ均二景福一、庭設二九賓之禮一、樂歌二四牡之章一、妾等幸覩二昌期一、獲レ瞻二文陛一、雖レ乏二流風之妙一、願輸二率舞之誠一、未二敢自專一、伏候二進止一、

勾二雜劇一

清淨自化、雖レ莫レ測二於宸心一、詠心雜陳、示二俛同一於衆樂一、金絲再舉、雜劇來歟、

放二女童隊一

分庭久立、漸移二愛日之陰一、振袂再成、曲二盡回風之態一、龍樓却望、鼉鼓屢催、再拜二天階一、相將好去、この中、勾は引き出す、放は退出の義である。

興龍節集英殿宴教坊詞、致語口號

興龍節、集英殿宴の教坊詞、致語口號

臣聞、天所眷命、生而神靈、惟三代受命之符、萃于茲日、實萬世無疆之福、延及我民、候南極之祥輝、交北鄰之瑞節、同趨鎬燕、爭頌華封、恭惟、皇帝陛下、稽古溫文、乘乾剛粹、體生知而猶學、藏妙用於何言、故得六聖承休、三靈眷佑、德隆星曷、齊六符而泰階平、河行地中、錫九疇而彝倫正、屬誕彌之令旦、履長發之嘉祥、夙設九賓于庭、徧舞六代之樂、日無私於臨照、葵藿自傾、天有信於發生、勾萌必達、臣等濫塵法部、獲造彤墀、下采民言、得三萬里之謠誦、登歌壽斝、以八千歲爲春秋、不度蕪音、敢進口號。

【訓讀】臣聞く、天の眷命するところ、生まれて神靈。惟れ三代受命の符、この日に萃まり、實に萬世無疆の福、延いて我が民に及ぶ。南極の祥輝を候し、北鄰の瑞節に交はり、同じく鎬燕に趨り、爭つて華封を頌す。恭しく惟みるに、皇帝陛下、古しへを稽へて溫文、乾に乘じて剛粹、生知を體して猶ほ學び、妙用を何言に藏す。故に六聖の承休、三靈の眷佑を得たり。德は星曷より隆に、六符を齊しうして泰階平かに、河は地中を行き、九疇を錫はつて彝倫正し。誕彌の令旦に屬し、長發の嘉祥を履む。夙に九賓を庭に設け、徧ぬく六代の樂を舞はしむ。日は臨照に私なくして、葵藿自ら傾き、天は發生に信あつて、勾萌必ず達す。臣等、濫りに法部を塵し、彤墀に造るを獲、下、民言を采つて、三萬里の謠誦を得、登つて、壽斝に歌ひ、八千歲を以て春秋となす。蕪音を度らず、敢て口號を進む。

風卷雲舒合兩班。
瞳瞳瑞日映天顏。
觀書已獲千秋鏡。
積德長爲萬歲山。
臘雪未消三務起。
壬人不用五兵閒。
相逢父老爭相賀。
却笑華胥是夢閒。

風は卷き、雲は舒べて、兩班を合し、
瞳瞳瑞日、天顏に映ず。
書を觀て、すでに千秋の鏡を得たり、
德を積んで、長しへに萬歲山と爲る。
臘雪、未だ消えずして三務起り、
壬人、用ひずして五兵閒なり。
相逢ふ父老、爭うて相賀す、
却つて笑ふ、華胥、是れ夢閒なるを。

【字解】【一】兩班　中書門下の兩省職員を云ふ、宋史職官志に「唐六典、中書・門下・尚書の三省合一。元豐五年、中書門下、はじめて分る。元祐の初、司馬光、請うて、合班、事を奏し、分省、事を治めしむ」とある。【二】千秋鏡　唐書張九齡傳に「はじめ、千秋節、王公、並に寶鑑を獻ず。九齡、事鑑十章を上り、千秋金鑑錄と號し、以て諷諫を申ぬ」とあろ。【三】萬歲山　御庭の中なる築山の名であらう。杜牧の詩に「春夏秋、王謝淡泥金事、蒼茫空高萬歲山」とある。【四】三務　左傳に「民、その野に狎れて、三務、功を成す」とあつて、その註に「農事、祭祀、兵戎」

三時の務」とある。【五】　壬人　宮闕の衛兵。【六】　五兵　卽ち五戎、五種の兵器、弓矢殳戈戟を合稱して云ふ。【七】　華胥　黃帝が夢に神游ぜし處、前に和蘇州太守の詩中に注して置いた。

【題義】　この篇は、集中に何の年とも標記してないが、東坡は、元祐元年より三年中は、翰林に居り、そして、元年は大喪中で、興龍節にも、餘興の催しなく、二年の樂語は、前に掲げ、四年の三月に罷めて外に出たから、この樂語は、無論、三年十一月に作つたのであるし、且つ女童致語の中に、再覩興龍之會」とあつて、その第二回だることは確實である。

【詩意】　風雲卷舒して、中書・門下の兩省の職員は、班を合して慶賀を述べ、瞳瞳たる目出たき日影は、天顏に映じて居る。獻上した書物の中には、張九齡の千秋金鑑錄に比すべきものがあるし、今後、德を積まれて名にしおふ萬歲山の如くならむことを切望する。臘雪、未だ消えざるに、農民は、野良仕事にいそしみ、勤勉の俗、尤も喜ぶべく、宮闕の番兵でさへ、五種の兵器を全然用ひざるは、流石に太平の祥である。父老どもは、相逢うて、爭うて賀し、かの黃帝は、唯だ夢の中にのみ華胥の國に游び、今日、至治の御世、それが眼前に實現されしに及ばざることを笑つて居る。

【論論】　前例に循つて、この樂語の全文を左に擧げることにする。

敎坊致語

臣聞、天所二眷命一……敢進二口號一、

口號

風卷雲舒……是夢間（以上、ここに掲載せし本文）

勾合曲

笙磬同レ音、考二中聲於神鼓一、鳥獸率舞、浹二和氣於敷天一、上奉二宸歡一、敎坊合レ曲、

勾二小兒隊一

衆技旅レ庭、振二歡聲於無外一、游童頌レ聖、陶二至化於自然一、上奉二皇威一、敎坊小兒入レ隊、

隊名

壤歌皆白髮、象舞及二靑衿一、

問二小兒隊一

跳二踉廣陌一、初疑二竹馬之游一、合二散彤墀一、忽變二鵞鴻之狀一、欲レ知二來意一、宜悉敷陳一、

小兒致語

臣聞、流レ虹啓レ聖、非二人力所レ致之符一、湛レ露均レ恩、與二天下一共享二其樂一、旁行二海宇一、外薄二戎夷一、咸欣二載夙之辰一、共獻二無疆之祝一、恭惟、皇帝陛下、神武不レ殺、將レ聖多能、天生二德於予一、旣稟二狗齊之質一、人樂二告以一善、輔二成經緯之文一、法二慈儉於東朝一、紬二詩書於西學一、載臨二誕日一、俛答二輿情一、非レ爲二靡曼之觀一、庶備二太平之福一、臣等微生齠齔、學二樂父師一、就レ列紛紜、雖レ無レ殊二於鳥獸一、赴レ音